流星

永井路子

お市の方 下



文春文庫

著者紹介

永井路子(ながい・みちこ)

大正14(1925)年、東京に生れる。東京女子大学国語専攻部卒業。小学館勤務を経て文筆業に入る。昭和39年、「炎環」で第52回直木賞受賞。57年、「氷輪」で女流文学賞受賞。59年、第32回菊池寛賞受賞。63年、「雲と風と」で吉川英治文学賞受賞。主な著書に「北条政子」「王者の妻」「朱なる十字架」「乱紋」「流星」「歴史をさわがせた女たち」「茜さす」「噂の皇子」「裸足の皇女」「異議あり日本史」「山霧」「王朝序曲」などがある。

文春文庫

流　星—お市の方（下）

永井路子



文藝春秋

解説 中村 哲 1
解説 高橋 幸八郎 19
解説 大塚 久雄 39
解説 川島 武宜 59
目次 1

姉川 9
不信 36
愛憎の轆轤 50
決戦のとき 65
飛札 80
朝倉滅亡 94
訣別 109
落城 124
薄濃 145
清洲往来 160
覇星殞つ 175

清洲評定 189
妙心寺供養 203
賤ケ嶽 219
敗将 252
夜の宴 268
時鳥 284

流星——お市の方 下

姉　川

奇妙な一瞬の空白が来た。

元亀元年（一五七〇）六月二十七日——。

二十日に近江の国境を越えて以来、火を噴くように連日暴れ廻っていた織田勢が、まさに戦いが頂点に達せんとするその日、俄かに沈黙したのである。そして、信長の本営竜ケ鼻から五十町余の大寄山まで進出して来た浅井軍も——戦端開始以来はじめて小谷城を降りて一気に野戦の気構えを見せた彼らも、なぜかその日は動こうとしなかった。

が、それは躊いでもなければ小休止でもない。練達の剣士が、剣先から火花をほとばしらせてからみあった直後、ぱっと離れて間合を計り、相手の隙を窺いながら、必殺の機を狙うような——、そんな静止の瞬間であった。

そういえば、この七日間の浅井・織田軍の戦いは剣士の名勝負に似ている。合戦を一から十まで知りつくしている戦国武将の、虚々実々の渡りあいである。織田軍が美濃の国境を越えたとき、

浅井側はその進路の前に立塞がるように横たわる臥竜山の横山城にかなりの兵力を入れて待ちかまえた。そこで時間をとらせ、兵力を消耗させよう、という魂胆である。信長はこれにわざと肩すかしをくわせるように一気に北上して小谷城の麓までひた押しに押した。

が、このとき浅井長政もまた信長の挑発に乗らなかった。信長の動員兵力は約一万。それに対して長政の動かせるのは五千がやっとである。誘いに応じて無駄な血を流すことは許されない。この多勢の敵を圧倒するには、やはりそれだけの数を揃えねばならない。とすれば、朝倉の援軍を待つほかはない。長政が冷然と城下の敵を無視して相手にならなかったのはこのためなのだ。

信長としても、小谷城の嶮峻を眼にしたときに、速攻の不可能なことは見てとっていた。とすれば、手をこまぬいて城下に長居は禁物である。それに越前から朝倉の援兵が駆けつけるであろうことは目にみえているから、ぐずぐずはできない。と、思いきりよく兵をまとめ、反転南下して横山城に向った。

と見るや、今度はたたっと浅井軍が追いすがって来た。横山城攻めに向った織田軍を背後から攻めようというのである。兵力の差を知って極力野戦を避けて来た長政が、敢然出陣に踏みきった理由は一つ——、朝倉軍の出陣の知らせが入ったからである。このとき朝倉が動かした兵の実数も諸説まちまちで、一万とも三万ともいわれるが、いずれにしろ、これに長政の兵力を加えれば、優に織田軍を凌駕するだけの数であったことはたしかである。

——戦いの様相が変った。

と浅井側は判断した。

——この機逃すべからず！

必殺の気合をこめての出陣である。

長政の眉宇に溢れる決意は、出陣のその日、見送るお市にも痛い程よくわかった。

「御武運を」

型通り、昆布と勝栗を載せた膳を夫に捧げると、お市は盃に酒をついだ。

「うむ」

ちらと視線を投げただけで、長政は一気に盃を乾した。夫の盃が膳に戻されたとき、ふしぎとお市の胸も澄み定まって来た。夫の軍勢が閧をあげるとき、その槍先には兄、信長の首が高々と掲げられているかもしれない。あるいは、ふたたび信長の軍が城下に姿を見せるとき、彼らの槍先には夫の首が刺されているかもしれない……。

——が、いまさらそれを思い悩んだところでどうなるものではないではないか。

両軍は行きつくところまで行こうとしている。踏みこみ、かわし、退き、追い、智力と腕のすべてを尽しての死闘である。そのどれ一つを誤っても今の状態はなかったし、またそれだけに、いまさら誰の力をもってしても、この戦いをくいとめることはできないのである。

——歴史の必然。

もしそういう現代ふうな言葉をお市が知っていたとしたら、たちまち頭に浮かべたのはそれであろう。が、そのときは、そういう便利な言葉も、それに伴う便利な——いや、もしかしたら上すべりにすぎる思考もお市の頭にはなかった。

ただ、お市は肌でそれを知っていた。子供のころから度々経験したはずのことであったが、そのぬきさしならぬきびしさを、はっきり理解したのは、今度がはじめてだった。そしてそう思ったとき、お市の心はひどく透明なものになっていた。五千の軍団にかこまれて夫が陣立ちした後、北の越前からやって来たおびただしい朝倉勢が、粛々と城下を通りぬけていったことをお市は知った。

小谷城から大寄山の陣地までは約七キロ、大軍であるだけに朝倉勢の動きは緩慢にならざるを得ない。二十六日夜すでに着陣していた浅井軍が、翌二十七日事態を静観したのは、一つには朝倉勢が戦闘態勢をととのえるのを待ったためであった。それに大寄山と信長の本陣である竜ケ鼻までの距離は約五キロである。戦場としてはやや距離がありすぎる。

――もっと間をつめて短期決戦を。

長政はそう判断した。一挙に敵の懐ろに飛びこんで一太刀あびせようというのである。とすれば、夕暮を待って軍隊を移動させるよりほかはない。満を持して、彼らは日の暮に備えた。

「馬に水を飼え。兵糧も十分にしたためよ。槍、鉄砲の手入れを怠るな」

夕暮とともに前進を開始し、南方に拡がる野村、三田村の平地に陣取る。夜があけたとき、信長は思いがけない近距離に敵を発見して狼狽するであろう……。

ところで、一方の信長も、その日一日、浅井勢への攻撃に出なかったのは、わけがあった。前夜、大寄山にともされた夥しい灯によって、事態の変化を察知したのだ。

――遂に朝倉が合流したな。

相手はわざとその勢力を誇示し、無言の威圧を加えようという心理作戦に出た、と読んだ。敵陣に放った密偵たちも、刻々、情勢を伝えて来る。朝倉勢の総数については密偵たちの判断もさまざまだが、とにかく、今はみずからの兵力を上廻る軍兵を相手にせねばならないのだ。

このとき、じつは信長方にも、頼もしい援軍が到着しつつあった。

三河の徳川家康――。

金ケ崎城攻めにも勇敢な活躍ぶりを見せた彼が三千の兵を率いてやって来たのである。その到着を待って作戦会議が開かれた。

信長の前には大きな見取図がひろげられている。

「ここが大寄山、浅井の本拠だ」

大寄山と竜ケ鼻の信長の本陣との間には姉川が西へ向って流れている。東の山奥に源を発するこの川は、近江の沃野に入っても、まだ山路の川の俤をとどめて流れは早い。が、水深はせいぜい一メートル、足をとられて溺れるというほどの難関ではない。この川をどちらが先に渡りきるか、いずれ一面のひろがりを持つ川原が戦場になるであろうことは誰の眼にも明らかである。

川に向って、上手が浅井、下手が朝倉と、密偵たちは報告している。

――では、誰が最初にこれに当るか。

人々が信長の口許を注目したとき、一瞬早く、

「この度の先陣はなにとぞ我々に」

と膝を進めた三人の武将があった。西美濃三人衆といわれた氏家直元（卜全）、稲葉良通（一鉄）、斎藤利三らである。彼らは美濃の斎藤氏が滅亡する折、主家を離れて信長に属した余所者、新参者である。ふつうの武将は、こうした新参者をまず最前線に配置する。そこでの働きによって、能力や忠誠度を判定するのである。

が、信長のやり方は違っていた。美濃攻略以来の度々の合戦でも、いつも旗本の子飼いを、犠牲の多い難所にあたらせる。自分の手勢の出血を惜しみ、むずかしい所を他人にやらせるといったけちなやり方は性にあわないのだ。また、これが、彼の人使いのうまい所でもある。余所者だけを前線に押し出せば、自然不満もつのるし、合戦にも身が入らない。それではかえって能率的ではない、という心理的、戦術的なみごとな計算なのだが、意表をついたこのやり方に、最初、美濃衆は少なからずめんくらった。そのうち、いつも子飼いの後についてゆく自分たちが後めたくなって来た。身の安全が保たれることに一種の住み心地の悪ささえも感じはじめていた彼らは、

——今度、ここで働きを見せねば……。

後へは退けぬ気持になっていたのだった。だから彼らの一言は、義理やゼスチュアで口にしたものではない。

——ここで許されなかったら、俺たちの男が立たぬ。

という真剣な気魄にあふれていた。そして信長も実をいえば彼らのそうした言葉を内心待ちうけていたのだった。

「うむ、そうか、そう申すなら……」

——戦いの気合というものは、そう来なくてはいかんのだ。

ゆっくり信長が肯きかけたとき、

「しばらくお待ちを」

思いがけぬ声が異議申立てをした。三河から、はるばる着陣した家康である。二十九歳という年よりは老けてみえるその顔が、珍しく子供っぽく見えるのは、何やら頬をふくらませ、口をとがらしているせいであろう。

「お言葉ではありますが、先陣はぜひ我らに仰せつけられたい。貴殿方は連日の合戦で、すでに手柄を樹てておられる。が、我らは只今着陣いたしたばかり、後陣に控えておっては功名の折が廻ってまいりませぬ」

このへんが、この若い武将のそつのないところであろう。

——あなた方は疲れている。ここは私がひきうけよう。

そう言いたいところを、やんわり言う。もちろん、信長は敏感にそれを感じている。それだけに家康の希望に任せることは、やや躊躇いがある。足許を見すかされている趣もないではないからだ。と、美濃三人衆が横から家康を遮った。

「いや、此の度はなにとぞ我らに——」

せっかくの機会を取逃すものか、という面持でにじり出て来た。

——うまい具合になって来たぞ。

信長は内心手を拍ちたい思いである。われ勝ちに先陣を希望するようになれば、それだけでい

よいよ戦意は昂揚する。はたせるかな、柴田、佐久間、木下といった子飼いの武将たちも黙ってはいられなくなった。

「私こそ、先陣を」

「いや、私こそ――」

頃合を見計って、信長は言った。

「されば――」

人々をなだめるように見廻した。

「せっかくの申し出である。徳川殿に先陣をおまかせする」

「有難うございます」

満足げに家康がうなずいたとき、

「したが、美濃衆もあれほどまで先陣を願っているゆえ、徳川殿に彼らをお預け申す」

一種の妥協案である。と、家康は微笑した。

「忝うございます。但し、美濃三人衆全部をお預かりするのは、いささか荷が重すぎます。その中のお一人を――」

と、稲葉良通を申しうけた。後で彼は良通に、

「かねて思うところがあったのでな」

と洩らしたという。それかあらぬか、稲葉氏は、戦国乱世を生きぬいた末、徳川氏に仕えて側近の一人となった。

こうして、一番手がきまったとき、
「さて、その攻め口だが」
信長は鉄扇で見取図を無造作に指した。
「徳川殿はこの小高い山に陣取られよ」
見取図をのぞきこみ、ついで遙かに眼をあげて、姉川のやや下流の雑木に包まれた丘陵の位置をたしかめて、
「あれでございますな」
家康はゆっくりうなずいた。
「何と申す山でござろうか」
すかさず信長の側近の一人が答えた。
「勝山と申しますそうな」
「ほう、それは縁起がいい」
家康は頬をほころばせた。それですべてきまった、というふうに、後は何一つ尋ねるでなく、きびきびと配置をきめてゆく信長の手許をのぞきこんでいる。
むしろ、かすかなざわめきをみせたのは、その他の武将たちである。信長はいともあっさりと、家康の陣地をきめてしまったが、姉川の下流に陣をとれ、ということは、すなわち朝倉の大軍に当れ、ということだ。その数、一万とも三万とも伝える朝倉の精鋭に対する家康の手勢はわずかの三千。稲葉良通の兵をあわせても五千にはみたない。

——その兵力で、いったい、どういうふうに当ろうとするのか。

殿もお人の悪い決定をされたものよ、という思いが誰の中にもある。ふつうなら難所、切所に当るのは親衛隊ときまっている。それをわざわざ家康にやらせようというのはどうしたわけか。が、それよりもふしぎなのは、家康のくそ落着きに落着いた態度である。大敵を割当てられても、苦情をいうわけでもなし、それ以上の援軍が欲しそうな顔もしていない。

——ふしぎな男だ。

誰しもがそう思った。信長とても例外ではない。

——ここがこの男の頼もしい所でもあり、多少小憎らしい所でもある。

合戦を前に、興奮の色を見せないこうした存在は、たしかに貴重ではある。しかし、この底知らずの戦さ好きは、いささか薄気味の悪さもないではない。が、信長としては眼前の敵は、やはり浅井長政だ。これはどうしても自分で叩き伏せたい。そのためには、朝倉は家康にまかすよりほかはないのである。手持の兵力は少なくとも、金ケ崎の殿軍にみせたしぶとさで、しばらくは持ちこたえてくれることはまちがいない。多少小憎らしい感じはあっても、今はそれを利用するのが最上の策なのである。

信長は対浅井戦のために手勢を六つに分けた。一番は坂井右近。三人衆と同じ美濃衆の一人だから、彼を真先に押立てた。次が池田恒興、続いて森可成、柴田勝家、明智光秀らが待機する形になった。竜ケ鼻の本陣の背後をおびやかす横山籠城軍の動きを押えるためには丹羽長秀を選び、これに氏家直元をつけた。

「いいか、わかったな」
言うなり、見取図を巻かせて、信長は座を起った。家康がもう一度笑顔を見せてうなずいたのはこのときである。
「川を渡ることですな」
呟くように言った。
「まず、それが勝敗の分れめになりましょう。明日の未明に、陣立ち仕ります」
誰に言わずとも、もう作戦の構図は彼の頭の中でできあがっていたようである。

闇の底が、いささかの藍色を帯びて来た。ついで樹々の輪廓が、闇ににじみながらも、ほのかにそれとわかるようになったとき、小鳥たちがさえずりだす。
が、この日の朝、川原に小鳥の声はなかった。前日の夕方までに手早く陣替えをして戦闘態勢を整えた織田軍もまた無言である。彼らは、その闇の重さを知っている。それが取りのぞかれたそのとき、彼らの眼前に姿を現わすであろう敵に向って出撃の命令の出る一瞬を待ちかまえている。
「前進」
闇の中に、低くこもった声が伝えられた。
「前進っ」
「前進っ」
葦の葉先を渡る風のように、命令はすばやく、押殺した声で伝えられていった。

「おっ、いよいよだなっ」

兵士たちは肩をゆすった。

まだ夜は明けない。その間にできるだけ川の近くまで前進しておくのだ。東の信長勢から西の家康の陣まで約一キロ。大きな波が押しよせるように、隊伍を整えた織田軍は進んでゆく。

空がふっと拭きとったように藍の色を消した、と思ったとき、闇は一瞬のうちに四散していた。あざやかな夏の夜明けが来たのである。そして掻きぬぐった闇の向うに、織田軍は、予想もしなかったものを見た。

すでに浅井軍は川を渡りはじめている！

「わおうっ」

獣じみた雄叫びは、敵味方から同時に放たれた。陣鼓、法螺貝——。いや、それらを圧倒して怒号が続いた。

戦いの順序も何もない。最初からの乱戦であった。

おそらく、意外の思いは、浅井軍も同じであったろう。機先を制して渡河を試みようとしたそのとき、ふいに至近距離に織田勢が姿を現わしたのだから。

が、中で朝倉勢はやや動きが鈍い。大軍であるのと、長途行軍の疲れがぬけていないのとで足どりがおくれがちなのである。その間に徳川勢は早くもしぶきをあげて姉川の流れに飛びこんでいた。

「えいや、えいや」

掛声をかけながら川原を歩くのと全く同じ速さで、隊列の乱れをみせずに、押しに押してゆく。集団行動は三河侍の最も得意とするところである。

一方浅井勢は、早くも川を渡り切って、織田の先鋒と火花を散らして戦っている。織田の鉄砲隊がすかさず砲列を敷く。至近距離からの銃砲火である。あたらぬはずがない。みるみるバタバタと倒れたが、硝煙が消えたとき、倒れた兵士が、早くも起き上がってより近くまで押寄せて来ているのを彼らは見た。いや、それは真実ではない。撃たれた者が起ちあがったわけではないのだが、ひしと続いた後続部隊が、彼らの屍を乗りこえて前進して来るのである。

もう弾丸をこめ直している暇はなかった。

「どけどけっ！」

槍勢が代って、浅井勢の前に立塞がった。が、浅井勢はひるまない。顔を真直に立てて、真一文字に進んで来る。織田方の先陣を承った坂井右近勢は、その気魄にまず押された。

この日浅井側の先鋒は戦さ上手で知られた磯野員昌である。率いる将士は約五千。高宮三河、山崎源太左衛門、赤田信濃といったえりぬきが、先頭切って進んで来る。彼らには、小谷城下を蹂躙されたという恨みがある。

――甘くみるなよ。

今日こそは、力の程を見せつけてやるぞ、という気魄が彼らを奮いたたせた。またその分だけ、坂井右近側には、気のゆるみがあったといってもいい。態勢を立直そうにも何にも、気がついた時は、懐ろに飛びこまれてしまっていて、どうにもならなかった。

大体織田軍は攻撃型の軍隊である。攻めには絶妙の力を発揮するが、案外に守りにはもろい。そうした織田方の弱点を、坂井右近は完全にさらけだしてしまったともいえる。

「退け、退けっ」

右近は我を忘れて叫んだ。怖気がついたわけではないが、このまま相手に引きずりこまれていけば、ますます出血は多くなるばかりだからだ。が、右近の必死の号令も、耳に入らないくらい、坂井隊の将士は動顚しきっていた。中でも、十六歳になる彼の嫡男久蔵は、ひとり敵の包囲下に取り残されたままであった。

「若殿うっ」

次第に敵に隔てられながら、声のかぎり叫んだのは郎等可児彦右衛門である。

「お退き下さいっ。殿の……殿の御命令ですぞっ」

が、久蔵は、答える余裕すらない。正面に、脇に、敵刃はひしと迫っている。

「若殿うっ」

ふたたび叫んだとき、彦右衛門自身、背後の敵に脳天を打ち割られていた。

「ぎゃっ」

という異様な叫びに、思わずふりむこうとした久蔵が繰り出された槍に胸を刺し貫かれ、鮮血を噴いてのけぞったのは、次の瞬間である。

坂井右近はそんなことは知らない。一退き退いて、二番手の池田恒興に先鋒を譲り、よろめきながら集まって来た手勢の中に気ぜわしげに久蔵の顔を探したが、いつまで経っても息子は戻ら

ない。

「久蔵は？　久蔵を知らぬか」

「……」

周囲は眼を見合せるばかりである。

「……先刻、数人の敵を相手に切り結んでおられましたが」

そのころ、草原に倒れた久蔵は、浅井勢の雑兵にのしかかられ、無惨に首をかかれていたのであった。

二番手の池田恒興は、それこそ信長の子飼いである。彼の母が信長の乳母であったところから、信長は彼を兄弟同然に愛していた。戦いも強いし、信長思いも一番である。ところが、その恒興の軍も、どうしたことか、磯野員昌の猛攻の前に手も足も出ないのだ。

――こんなはずではない。

恒興はあせった。

「返せっ、返せっ」

馬をあおって、浅井軍に突入するのだが、どうしても壁が破れない。気がついてみると、じわりじわりと陣地を後退している。員昌は、まるで、眼にみえない鉄の楯でも持っているかのように、恒興を押しまくって来るのだ。

ときに恒興三十五歳、少年時代から戦場を往来している彼には、一種の勘がある、その勘が、

――奇妙だな。

ふと彼をためらわせる。

——戦機を、いま完全に浅井に握られている。

信長の作戦には何の誤りもなかったはずだ。三十数年寝食を共にして来た彼は信長の心の動きが隅々までわかる。

——多分殿も、この陣立てと作戦に強い自信を持っておいでだったに違いない。なのに、このざまはどうだ。ふむ、待てよ。すると、敗けるということはこういうことかも知れぬな。

敗ける気がしないでいるのに敗ける、というほど困ったことはない。作戦に手落ちがあったとわかれば、とっさにそれの穴埋めをする手も考えつく。が、そうでもないのに敗けるというのは、どういうことか、奇妙な、無限に頼りない気持に捉われながら、恒興はぎくりとした。

——いかん。もしかすると、殿もそんな気持になっておられるのではないか。

ふしぎなことだが、彼は合せ鏡をあててでもいるように、信長と同じことを考え、同じに感じることができる男なのである。

——ふむ、してみると、殿も同じく……。

考えかけて愕然とした。

「殿っ。殿っ」

それは励ますというより、自分の妄想をふり切るための必死の叫びであった。

が、恒興のいる所から、信長の本陣は見えない。恐怖が深まったそのとき、池田勢は、すでに潰走を始めていた。

信長の手勢二陣をぬいたとき、浅井勢の攻勢は、さらにすさまじくなった。

「押せ、押せっ」

三番手の森可成も簡単に敗退した。ずるずると、織田勢は後退を続けている。

家康も苦戦を重ねている。馬を連ねて流れを押し渡ったものの、朝倉の第一陣はさすがに手強く、徳川勢はまたたく間に押し返された。姉川をはさんで追いつ追われつ、水煙をあげての死闘が続いた。が、三河武士にはしぶとい粘りがある。先手が疲れたと見ると、

「法螺吹けっ」

家康は退き法螺を吹かせた。と同時に、二陣を繰り出した。

「押せっ、押せっ」

騎馬武者を一直線に並べて、脇目もふらずに槍ぶすまを作って押し出してくる。まるで数十騎が一つの生きもののように、整然と押してくる姿には、三河武士独特のすさまじさがあった。彼らは矢が飛んで来ても面をそむけもしないし、首も縮めない。ただ一点、敵を睨めすえて速度を緩めず、ひた寄せるのである。これくらい恐怖というものを、もののみごとに払拭した集団はないだろう。個人の意志、感情を全く抹殺してしまったようなこの黒々とした集団とはじめて矛をまじえた朝倉勢は、あまりに勝手が違いすぎて動揺せざるを得なかった。

――これは、いったい何者だ。

――人間か？　こいつらは……。

ためらいが走り、心が揺れたその瞬間を、あやまたずに家康は衝いた。黒の集団が、ほとんどおめき声も発せずにのしかかって来たとき、朝倉勢は、すっかり自信を失い、支える気力を失っていた。

組織・用兵の勝利――としか言いようがない。三千に足らぬ徳川勢は、見る間に、北国随一の強豪、朝倉勢を追いつめてゆく。しかもこんなとき、家康の眼はいよいよ冴えて来る。勝利に酔わないのだ。的確に陣鼓を打たせ、法螺を吹かせ、川原から前面に拡がる田園の中で、執拗な攻撃を繰り返させた。卯の刻（午前六時）に始まった戦闘は、未の刻（午後二時）ころまで続いたが、統制は一糸乱れぬ形で続けられた。

このとき、徳川勢が、いかに活躍したかは『寛政重修諸家譜』を開いてみるとよくわかる。「姉川の合戦の折、朝倉が軍を破り、その功あり」と書いたものは、ちょっと拾っただけで八十数名になっている。もちろん『諸家譜』は自分に都合のいいところだけを拡大して書いている傾きがあるので、一人一人がそれだけ手柄を樹てたとは限らないのだが……。

中にはかなり具体的な記述もある。内藤正貞という二十歳の若武者があった。合戦のとき、追いつ追われつしている間に自分の槍を取り落してしまった。

「ちっ！　あの槍、人に渡してなるものか」

折から退き法螺が鳴っていたが、正貞は馬を返し、敵陣に飛びこんで、やっと槍をさがし出して戻った。それを見た家康は、ひどく不機嫌になって言った。

「馬鹿もの。命をかえりみずにやることがいいと思っているのか。死を覚悟するのは、めったな

時ではない。そんな心がけでは手柄は立てられない」

正貞は即座に謹慎を命じられた。槍を取り戻して来た武勇より、さしあたっては、退き法螺に従わなかった統制違反が責められたのだ。命知らずの勇敢さを表看板にしながら、じつはあくまで無駄死を避ける合理精神が徳川勢の勝利の基となっている。もっとも正貞はその数日後には謹慎を許されている。このあたりが家康の人使いのうまさであろう。

朝倉勢は今や総崩れになっていた。烈日の下、徳川勢は追撃態勢に移っている。青田の中を算を乱して逃げてゆく朝倉勢と、追う徳川勢は、揉みあい押しあい、敵か味方かわからない状態になった。例の忍者として有名な服部半蔵も敵を追う集団の中の一人だった。夢中で走ってゆくと、横あいから二、三十人の集団がひと塊りになって現われた。大将株らしい男は三十がらみ、ざんばら髪で、供の一人に討ち取った首を持たせている。

――朝倉勢だな。

そう思ったが、相手は人数が多い。とっさに機転をきかせて一礼した。

「お手柄なされましたな」

男は足をとめて、半蔵の面体をじっと眺めた。

「味方の者か」

なお半ばは疑う気配である。

「浅井の手の者でございます。敗れて戻りました」

さらさらと言うと、男は、はじめてうなずいた。

「うむ、残念ながら朝倉も敗けた。ここは退くよりほかはない」
「無念でございます」
半蔵は殊勝に首を垂れた。
「ともかく、退け」
「はっ、では、お供させていただきます」
一団となって走るうち、田圃の畔道にかかった。ここは皆が一列になって歩くよりほかはない。
このとき、半蔵は、巧みに大将株の男の後にぴったりくっつき、頃合をはかって、
「やあっ」
と、一刀のもとに首を刎ねた。気を許していただけに、男は多分、自分の首が飛ぶ瞬間すら、わが身に何が起ったのかわからずにいたのではないか。
「ひえっ」
従者たちは棒立ちになった。あわてて田圃へ転落するもの。
「うわ、わっ」
後も見ずに逃げ出すもの。中でやっと何人かが気をとり直して太刀を抜きあわせて来た。そこへ幸い、半蔵の弟の半助が駆けつけて来た。
「兄者っ」
「おうっ」
「どうしたっ」

「逃がすな」
兄弟の気合に呑まれて、男たちは早くも逃げ腰になった。そのうち、騒ぎを知った徳川勢が、あちこちから集まって来て、わっとばかりに彼らを取り囲んだ。

家康はそのころ、姉川べりにあって、右方の信長の陣地を望見していた。
――押したか？
どちらが先に川を渡ったか、俺か、信長か、とはじめて比較する余裕が出たのである。
ところがどうであろう。
川を渡っているのは、すべて逆の方向から来る武士達ではないか……。
「やや、これは」
――押されている。
すでに信長の二陣、三陣は崩れ立っている。見るなり、家康は、後方に控えていた稲葉良通に伝令を飛ばせた。
「ここはもういい、早く右に廻って浅井の横腹を衝け」
「心得ました」
一千の兵団は急旋回すると、真一文字に川原を駆けた。
惨たる光景である。

信長はずるずる押されている。

浅井勢の渾身の攻めはまだ続いている。彼らはこの一戦に賭けているのだ。狙うのは信長の本営のみ——と的を一つに絞って突撃に突撃を重ねて飽くことがない。

——浅井とは、こういう戦い方をする男たちだったのか……。

織田勢は信長はじめ誰でもが、正直のところ眼を見張る思いであった。

——気魄というものが違う。

織田家で一番勇猛だという評判をとっている柴田勝家さえ、ひそかに舌を巻いた。

「退るな。突けっ、突けっ」

彼はしきりに怒号するが、猛進を得意とする柴田勢も、崩れたった味方がからんでくるので自由に暴れ廻ることができない。

「もう、ここから退いてはならん。ええい、退くなっ。退くなというに」

勝家は仁王立ちになった。自分自身、向って来る敵を槍先で撥ねとばしながら満面に朱をそそいで彼は吠えた。

——もう俺は一歩も退くまい。根をはやしたように動かぬぞ。

一歩退けば、信長の命をそれだけ削りとることになる。が、何ということであろう。織田勢は日頃の鋭い猛攻ぶりを忘れて、だらしなく退却するばかりではないか。

「ええい、どいつもこいつも」

歯がみして、彼は唸った。崩れかかって来る味方が邪魔なのだ。

「何でお前らは逃げてくる。死ねっ、死ねっ」

足手まといが死んでしまえば、真向から敵と向いあうことができるのに、とそれが口惜しい。しかし、もし勝家の望み通り浅井勢と対決したとしても、果して五分五分の勝負ができたかどうか……。

——何しろ勝運はいま浅井の手にある。

勝家もそう思わざるを得ない。

——恐ろしいものだな。運というものは。

ここで敗けたら、どうなる、という思いがふっとかすめるのを、強いて彼は振り払った。もう今は、相手の運を見ることはすまい、と心にきめた。

——見るのは、この俺の槍先だけだ。

彼は手馴れた槍の先にすべてを賭けた。何人を突きのけ、何人を突き伏せたか、それから先は記憶がない。が、気がつくと、

——はて……。

潮が変るような、微妙な変化が相手方にあらわれていた。

——これはどうしたことか。

槍先から眼をあげたとき、彼は見たのである。黒々とした兵団がひと塊りとなって浅井勢の横腹に襲いかかっているのを……。稲葉良通勢が一撃を加えたのだ。

さすがの浅井勢も、いささかのひるみを見せた。と、そのとき、西側から襲いかかった稲葉勢

に呼応するように、姉川の上手から、わあっという鬨の声が起った。丹羽長秀と共に横山城に備えていた氏家直元の千騎が信長の伝令をうけて飛んで来たのである。

形勢は瞬時にして逆転した。深く鋭く織田勢の中に突っ込んでいた浅井勢――磯野員昌らは、両側面からの攻撃をうけて、俄かに崩れたのである。と、まるで呪文を解かれるように、織田勢自身も、いつもの攻め脚を取り戻したのであった。

――運よなあ。

勝家は烈日を仰いで、やっと唇をなめた。噴きだした汗がかわいて、唇までも塩辛い。頬をこすると、砂とも塩ともつかぬものが、ざらざらとこそげ落ちた。

そのころ、姉川の対岸にあった浅井長政も、ふと空を仰いでいた。

――日は更けている。

卯の刻からはじまって四刻近く――八時間ほどのその時間は嘘のように速くもあり、魂が摺り減るほどの長さでもあった。

――その長さの中で、俺は九分九厘までは目標通りの戦いをすすめた。

と、長政は思った。が、最後の一厘が及ばなかったのはなぜか。この時が長すぎたからか、あるいは短すぎたからか……。

卯の刻、立ち上がりから信長の陣の懐ろへ飛びこむように、すばやく先陣に姉川を渡らせたのは、勝敗を決するのは、今日のこの日しかない、と思い定めていたからだ。何しろ信長は一万余

の大軍だし、それに対して、浅井は総力を挙げてもせいぜい五千しかない。

「脇目もふらずに押せ。目指すは信長の首だけだ」

陣立ちにあたって彼はそう諸将に言渡した。そして、いざ戦ってみると、思いのほかに信長の旗本は脆かった。ずるずるっと後退を続ける信長を見て、彼は眼をこすった。

——やったぞ！

声をあげて雀躍りしたかった。戦いにはつねに意外性がつきまとうが、こうまで相手が弱いとは思いもかけなかった。

が、もう一つ、予期せぬ事態が起った。それは頼みにしていた朝倉勢が、これまたあまりの脆さで崩れてしまった事である。兵力は半数にも足らぬ徳川勢の押しに、一も二もなく突き伏せられ、浮足立ってしまったのを見たとき、その腑甲斐なさに、歯ぎしりする思いだった。

——もう一刻、いやもう半刻、家康を押し返して渡りあってくれていたら……。

その間に浅井勢は信長の馬前に突進していたであろう。ひどく無責任にも見える朝倉の退却が続いてひきおこす事態を、長政はとっさに読みとっていた。勝ちに乗じた徳川勢は、迂回して、浅井勢の側面に攻撃をかけて来ることは必至である。

——それまでに員昌の槍先が信長に届くかどうか……。

じりじりとした思いに胸を焼かれていたそのとき、果せるかな敵は浅井勢の右翼を襲い、ついで左翼へも襲いかかって来たのである。

——無念だ。

それよりほかは言葉がなかった。この期に及んで一縷の望みにすがるほど長政は愚将ではない。彼は、自分にとって最大の好機が音もなく自分の側をすりぬけてゆくのを感じていた。

「引き法螺を吹け」

命じるより先にすでに先陣は崩れたっている。

今まで勢いのいい奔流のように織田勢に向って流れ込んでいた浅井勢はせきとめられ、混乱の渦を巻き起しながら姉川を渡って後退しはじめた。勢いづいた織田勢がそれを追う。北岸の野村、三田村一帯は修羅地獄となった。一押し二押し、それでも浅井軍は抵抗した。しかし上げ潮に乗った織田勢の勢いを食いとめることはできなかった。

浅井の先鋒、磯野員昌は南に逃れ、居城の佐和山に逃げこんだ。織田勢の猛攻を耐えぬいた横山城も遂に降伏した。

姉川の戦場から小谷城までは約七キロ。勢いに乗じた織田軍としては追って追えない距離ではなかったが、信長は深追いはしなかった。いや、追いかけて再度決戦を挑むにしては、この一日の出血は余りに多すぎたのである。

「……合戦、大利ヲ得候。首ノ事、更ニ校量ヲ知ラズ候間、注スルニ及バズ候。野モ田畠モ死骸バカリニ候」

と、彼は細川藤孝や諸国の大名に大勝利を吹聴しているが、田畑を埋めつくした死骸の中には、織田側のそれも数え切れないほどあったのである。

それにしても、もし、朝倉と徳川の援軍が、ここに到着しなかったら、あるいはもっと別の戦

い方をしていたら、事態は違った動きを見せていたかもしれない。浅井は朝倉の援軍によって敗れ、織田は徳川の援軍によって勝ったといってもいい。

しかし、この戦いのなりゆきを見るとき、両者がそれぞれ援軍を待ち、一挙に決戦に出るというなりゆきは一種の必然である。任意に一つ駒の動きを変えてみる、といった思いつきではゆかない戦いの重みがそこにはある。

長政も信長も正攻法で渡りあい、当時の戦国武将として最高の智力と戦力を傾けて戦った。そして、いまここに残ったのは累々（るいるい）たる死骸と、浅井の敗戦という事実なのである。

その重い事実を背負って、いま長政は、お市のいる小谷城へ向って馬を進めている。

不信

夕映えの中で小谷の山が赤い。

が、馬上の浅井長政はその姿を見ようともしない。この日姉川のほとりで行われた織田軍相手の戦闘の数々が脳裏に消えては浮かぶ。

——やくたいもない。勝敗も決したいま、それを思い浮かべてみて何になろう。

が、ついついそこへ思いがいってしまう真の理由に長政は気づいている。

小谷の山を、小谷の城を、今日ばかりは見たくないのだ。

——どの面を下げて帰れるか。

父の顔、留守を預かる家臣の顔、いやそれ以上に見たくない顔がそこにはある……が、いかに長政が拒もうと、小谷の山は、否応なしに刻々近づいて来るのであった。

城の大手の門まで来たとき、浅井勢は、ともかく残兵を集め、一応の隊伍を整えるところまで漕ぎつけていた。出陣の折の兵員の半ば近くを失い、同僚の肩に体をあずけて、やっと戻って来

た手負いの武士たちもかなり多い。

出迎える人々は無言である。長政もまた無言で本丸の式台を踏んだ。居流れる家臣が平伏する中を長政は無表情に進む。しかしそこには、彼の気を重くしている人物の「顔」は見当らなかった。そのまま、まっすぐ彼は奥の曲廓にいる父の久政の下へ行くと、膝をつき、

「無念でありました」

短くそれだけ言った。あれこれ戦いの経過をしつこくたずねようとする父に、

「信長はもう攻めてはまいりませんでしょう。それだけの力は今はありませぬ」

さしあたっての結論だけを言って廊下に出て角を曲ったとき、

「お帰りあそばしませ」

薄暗がりから、息を殺した女の声がした。お市の侍女のかのであった。

「奥方さまよりのお言伝てでございます」

長政は、ふと身構える形になった。

「お出迎え申し上げるべきでございますが、急に御気分が悪くなられ、お臥りでいらっしゃいますので」

「……」

長政の口許がひときわきびしくなったとき、かのはさらに声を落した。

「お産気がおつきになられまして……。まだお産み月ではいらっしゃらないのでございますが、たいへんお苦しみで……」

長政の肩のあたりが、かすかにゆるんだようだった。彼が最も会いたくないような、それでいて何とも気がかりでならなかったその人の顔が見えない理由は、思いもかけないものだったのだ。

長政の唇が開きかけた。しかし、結局それは言葉にはならなかった。もう一度、じっとかのの顔に目を据え、そのままゆっくり歩き出した。

長政は合戦の間、お市が産み月に近いことは忘れていたのだった。かのの言葉はその虚を衝いて、たしかに彼を動揺させた。

しかし、その直後に、彼の心の裂け目を蔽う何かがあったことを、かのは感じている。長政の姿が遠ざかったとき、かのは身を起し、お市が臥っている北の局曲廊へと走った。

体を横たえているお市の頬には、ほとんど血の気がなかった。頬がこけ、眼ばかり大きく、肩で息をしているのがいかにも苦しそうだ。

「いかがでいらっしゃいますか」

「ありがとう。少しは楽になったようです。それよりも――」

お市はじっとかのをみつめた。

「殿さまは？」

「はい」

かのは平伏した。

「お見うけ申しあげましたところ、まことにおつつがなく――」

お市は苦しげにうなずきながら、

「口上は……私の口上はちゃんと伝えてくれたでしょうね」
「は、はい。しかと……」
「それで？」
「は、はい……」
「……」
かのは顔があげられなかった。真実を伝えるべきかどうか……。心身をすりへらし、衰弱しきっているからだで子供を産まねばならないこの女あるじに、あのときの長政の姿をそのまま伝えていいものかどうか……。
とっさに決心がついた。
「殿さまには……ゆっくりおからだをいたわるように、と仰せられましてございます」
やっとの思いで顔をあげたとき、かのは、お市の大きな瞳をまともにうけとめねばならなかった。蒼味を帯びた吊り気味の眼――いつも真実をまともにみつめねば気のすまないその眼は、床の中で、いよいよ澄み透って、じっとかのに注がれていた。
が、やがてその眼は、ゆっくり黒い睫に蔽われた。
「御苦労でした」
細い声が洩れたのはそのときである。
「退がって休みなさい」
「いえ、奥方さまのおからだが心配でございます」

「大丈夫です。少し痛みは遠のいています。しばらく退がって休みなさい。用があればまた呼びますから」

眼をつむったまま、静かにお市は言った。

よそ目には、安堵のまどろみともみえるそれが、決してお市に心からの平安をもたらすものでないことを、かのは感じている。

——しかし、あのとき、そうするほか、私に何ができたろう。

が、何か言いかけて唇をつぐんだ長政と、瞳を閉じてしまったお市と……奇妙な相似に、かのは心を凍らせた。

長政はお市の臥床を信じていない。

——子供を産むと？　ほう、女とは都合のいいものだな。

自分の帰還を迎えに出ない口実だ、としかとっていないのだ。

そして、お市も……。

いかにかのが取り繕おうとも、夫の心の中に根ざしている不信を感じとってしまっている……。はたせるかな、その後も長政からは、お市を見舞う言葉ひとつ伝えられなかった。孤独の中でお市はやがて女児を産む。お初と名づけられたこの二女は長じて京極高次の妻となる。のちに秀吉の側室となる姉のお茶々（淀どの）や、二代将軍秀忠の御台所になる妹のおごうに比べて眼立たない存在だが、そのじつ、最もしたたかに、要領よく戦国の世を遊泳して生きたのは彼女である。そのお初が浅井と織田の激しい対立のさなかに生れたというのも、いかにも彼女らしい人生

の出発というべきかもしれない。

お初の誕生祝いは、ほんの形ばかり行われた。このときも長政はお市のところへ姿を見せなかった。そしてその後も……。同じ館にありながら、二人はほとんど顔をあわせることもなく過すようになっていた。

やがて秋の半ば、お市は、長政が身のまわりにかしずく侍女の一人を愛しはじめたことを知る。誰も噂を耳に入れたわけではなかったが、かのの素振りで、それを感づいたのだ。

「かの、何もかくさなくてもいいのですよ」

言われて、苦しげに眼を伏せてかのが口にしたのは、お蘭という侍女の名であった。

――お蘭？

言われて、とっさにはどういう娘だか顔を思いうかべることすらできなかった。

「近ごろ、殿さまのお側に上った娘だそうでございます」

侍女たちの出入りさえ知らないほど夫との間に隔りのできてしまったことを、改めて知らされた感じである。

「そうですか」

うなずく顔を、かのはそっと窺うようにした。うろたえる様子も見せない女あるじの様子に、意外なものを感じたのである。その顔にお市は静かな微笑を向けた。

「そうなることは、わかっていましたもの」

瞬間、かのは、はっとしたようだった。
「かの」
「はい」
「私がもっと取乱すかと思っていたの？」
「……は、はい」
蒼く澄んだ眼が、ふっと遠くを見た。
「ほんとうはね、かの、私も取乱したいのです」
「……」
「取乱せたらどんなにいいだろうと思います。でも、……」
それなりお市は口をつぐんだ。
初秋の昼下り、小谷の館はひどく静かである。今しがたまで庭前の小笹を鳴らしていた風がやんだとき、思いもかけない近さで秋の虫が啼いた。その声がやみ、二人を包む静寂がさらに重くなったとき、お市の澄んだ眼が、かのの所に戻って来た。
「でも、姉川からお帰りになったとき、もう私にはこうなるような気がしていました。あのとき、そなたは――」
「奥方さまっ」
膝にすがりつくかのの髪をやさしくお市は撫でた。
「お許し下さいませっ。ただ、私は――」

「わかっています」

お市は、もう何も言うな、というふうに首を振った。

女あるじを絶望させぬように、わざとその場を取り繕って、言いもしなかった長政の言葉をこしらえあげたかのだったのである。

「そなたの心遣いはうれしい。でも、私は、あのとき、覚悟をきめてしまったのです」

取乱す時期はすでに過ぎていた。お市はあのとき、目をつむってそれに耐えたのだ。只一人敵の中に置かれている状態では、何一つ弁明は許されないと知って、お市はひとりで我と我が心と闘ったのだ。

が、お市は感じている。

いくら覚悟をきめたとはいっても、眼の前に確たる事実をつきつけられた今は、埋めるすべもない大きな欠落が、胸の中にできてしまったことを……。

しかし、それは、あくまで口に出すべきことではないのだが、長政の存在は、いまは限りなく遠い。

——いま、私は、恐ろしいような静寂の中にひとり閉じこめられている……。

と思ったそのとき、俄かに館の外で人馬のざわめきが起った。

「……」

かのは思わずお市と顔を見合わせると、

「御出陣でございましょうか」

息を殺して、そっと言った。

近江の野に、ふたたび戦雲がひろがりはじめたのは、その年の秋の終りである。姉川の合戦が終ると、信長はいったん上洛してから、そそくさと岐阜に帰った。合戦の場からそのまま帰城したいほど疲れきっていたにもかかわらず、一度上洛したのは、姉川における合戦の勝利を誇示するためである。

が、世の中はそんな宣伝にごまかされない。辛うじて勝利を得たものの、かなり出血は多いと知って、信長に反感を持つ勢力は、たちまち蠢動をはじめた。

その中で見逃せないのは、旧幕臣の三好一族の動きである。彼らは信長の推している義昭が将軍であることさえもまだ認めようとはせず、頑強に抵抗を続けている。その彼らの眼には、

「信長の疵は深い」

と映ったのだろう。信長が岐阜へ帰るのを待ちうけるように、七月のうちに、早くも摂津中島あたりに出陣して来た。さすがの信長もすぐには兵が出せない。やっと軍備をととのえて岐阜を発ったのは八月も末になってからであった。

ただ、今度は近江の横山城は押えてあるし、都への道は不安がなかった。姉川の合戦以来、横山は木下藤吉郎が守っている。もう一つ、宇佐山という城砦があって、ここには子飼いの森可成を置いて一応浅井への備えとし、信長は都から一気に河内枚方へと足を伸ばした。続いて足利義昭も八月三十日京都を発って信長と合体した。このとき、義昭と信長の仲は必ずしもうまくいっ

ていなかったのだが、その故にこそ、信長は義昭をむりやりこの戦いに引張り出したのである。

「三好一党は、あなたの敵だ。あなたがやる気を起してくれなければ困る」

というわけだ。それに策謀好きな義昭を放ったらかしにしておけば何をするかわからない。その動きを封じるためにも手許にひきつけておく必要があったのである。

この三好との対決はなかなか意のように進まなかった。と、それにつけこむように、石山本願寺が三好方についた。この当時の本願寺はちょっとした大名以上の実力を持つ恐るべき存在である。その上全国に宗徒を持っていて、これにいっせいに信長攻撃の檄をとばしたから、信長はほとんど日本国中を敵として戦わなければならないような形になった。

九月十二日、信長の陣営はこの本願寺門徒の夜襲攻撃をうけている。そしてそのころ、本願寺の総帥光佐（顕如）の手紙を持った密使は近江路を馳せていた。行先はいうまでもなく小谷の浅井久政、長政の所である。その誘いに応じて、浅井と朝倉は、織田勢の背後を衝くべく準備を始めた。お市やかのが聞いた人馬のざわめきは、それにほかならなかった。

が、まだ信長はそのことに気づかない。やっと三好党の一人を降したころ、浅井・朝倉の連合軍は宇佐山砦を急襲し、城を守る森可成やこの救援に赴いた信長の弟の信治を討取ってしまっていた。勢いに乗じて浅井・朝倉軍は、都に向って進撃を始める。九月二十日は坂本まで出陣し、山城の山科、醍醐方面に放火して気勢をあげた。もうここまで来れば、京都は目前である。悪くすると、信長が摂津でもたもたしているうちに、都は長政のものになってしまうであろう。

長政たちは、さきの姉川の敗戦を忘れてはいない。

——今度こそ、目にもの見せてやる。

意気込みがすさまじいのだ。これは朝倉勢も同じことで、家康の三千の兵に押しまくられたときとは人の違うような猛攻ぶりをみせた。しかもいったん江州を逃げた六角勢も情勢の変化を見て甲賀方面から戻って来て浅井・朝倉勢に合体した。

もう一刻の猶予も許されない。信長は摂津はそのままにしておいて、義昭ともども都に引返さざるを得なくなった。が、すでにこのとき、

——信長危うし。

の報はそのあたりの庶民の間まで伝わっていたらしい。江口まで来て神崎川を渡ろうとすると船がない。船頭が船をかくしてしまったのだ。

「おおい、船、船はどうした」

叫んでもしんとして人影さえない。人心の変化の恐ろしさを目の前に見せつけられて、信長勢は立ちすくむ。が、こうしてはいられない。

「何が何でも渡るのだ」

信長は彼一流の下知をした。ふつうなら、

「これは無体(むたい)な」

と思うところだが、その余裕はなかった。むしろその言葉をバネに、全員が眼をつぶって川に突込んだ。晩秋の水は肉を刺す冷たさだったが、冬に向っての渇水期が幸いして、押し流されるほどの水量でもなく、辛うじて対岸に着くことができた。

やっとの事で都に辿りつくと、信長は目まぐるしい早さで次々に手を打った。紀州や播磨その他、畿内一帯から加勢にかけつけて来ていた連中には、

「御苦労だった。一応ここは引取れ」

と言って本国へ帰した。みすみす手勢を減らすようだが、ここまで来ると他人は無用なのだ。いや、近くにいて妙なことを企んだりされるより敬遠した方が賢明である。それに、いまや彼は、浅井・朝倉勢に岐阜への道を遮断されている。身軽になっていなければ補給も不可能なのである。

そうしておいて、信長は都を未練気もなく棄てて坂本へ出た。もう一か八かである。今残る「来迎寺文書」が、

「此ノ合戦ノコト、信長卿御一代ノウチ、難儀ノ合戦トノ説ナリ」

と書きつけているのは、その間の事情をよく伝えるものであろう。

と、浅井・朝倉は正面衝突を避けて叡山へ上り、鉢ケ峰、青山、坪笠山などに陣取ってしまった。長期戦を覚悟で、信長勢の弱るのを待とうというのである。

信長は叡山を抱きこもうとした。

「今、味方をしてくれるなら、自分の領内にある叡山の所領は必ず委譲する」

が、これまで叡山は信長によい感じをもっていない。

――何を、それしきのことで味方できるか。

小馬鹿にしたように挨拶も返さない。このままでは、信長はじり貧状態に陥らざるを得なかった。

そのうちに寒気が迫って来た。浅井や朝倉の兵は雪にも寒さにも強いが、美濃、尾張勢はそれに馴れていない。形勢は日々に不利になってゆく感じである。信長は諦めもせずに、敵側に廻った六角勢に和を申込んでみたり、時には湖を渡って堅田の朝倉の拠点を急襲させてみたりしたが、これらもなかなかうまくゆかなかった。

——どうだ、見ろ、手も足も出まいて。

浅井・朝倉勢は、ここぞとばかり、修学寺や一乗寺あたりまで出て来ては火を放けた。

それでも信長は耐えた。幸い、彼の工作は少しずつ効果をあげて来るようになった。まず、六角側が、彼との和睦に同意したのである。もっともこのとき、六角家の中でも承禎はなかなかその気になれなかったらしく、

「自分の本意ではないのだが……」

という手紙を残している。宛名は不明だが、多分、浅井・朝倉側へ送ったものではないだろうか。

一方、三好三人衆の中にも信長に通じる者が出てきた。この勢いに乗じて信長は義昭を通じて、正親町天皇を動かし、その発意という形で、浅井・朝倉との和睦を成立させた。このときくらい彼が義昭という存在を徹底して利用したことはないであろう。浅井・朝倉側もやや戦いに倦んでいた。雪が多くなって以来、とりわけ朝倉側の補給も意のままにならなくなっている。和議を受入れるよりほかはないと判断したのであろう。しかし信長側の史料が、「浅井・朝倉が義昭に泣きついて和睦を願った」と書いているのは真実からは遠い。ここで一息ついたのは信長の方であ

る。

正式に和議が成立したのが十二月十四日、直ちに信長は江州永原城に入り、即刻美濃を目指した。浅井・朝倉勢は信長の退去を見届けて兵を退いている。

このころ、近江は深い雪だった。小谷山は厚い雪をかぶり、麓の館も雪の中に埋れていた。

雪の中を帰城した長政が、ふいにお市を訪れたのはその夜のことである。

「御在陣御苦労さまでございました」

お市のすすめる酒を、長政はさりげなく受けた。まるで昨日も一昨日も、この半年間ずっとそうしていたかのように彼は振舞った。

「初でございます」

侍女が抱いて来た嬰児にも機嫌よくうなずいて見せた。

「そちに似ておる」

その夜、長政はお市のもとを立去らなかった。久しぶりに褥をともにしたとき、お市のからだは、恥ずかしいほど震えた。からだの奥処から背筋に走る快感がとめどなかった。長政はたくましく、そしてやさしかった。

が、それでいて、お市は、これもまた和睦の儀式の一部であることを感じている。燭を消すと、屋根に降りつむ雪の気配が枕に伝わって来る。お市はしなやかな指で、そっと頬を蔽った。

愛憎の軛

一般に姉川の合戦で浅井・朝倉連合軍を破った信長は、その余勢を駆って一気に天下人の座をしめたように思われている。

が、それは大変な誤解である。彼が将軍義昭を追い出し、浅井・朝倉の息の根をとめるまでには、じつに三年の歳月が費されているし、その間こそ、彼にとって最も困難な時期だった。

さきに尾張一国で一族と主導権争いをしていたときは、数百の手勢の駆引で事はすんだ。そのとき信長は、

——この相手を倒しさえすれば、目の前がすっと開ける。

と思った。が、一族が倒れると、その後から今川義元や斎藤義竜が近づいて来た。こうなると動員兵力も千単位では足りない。今川義元は一度の奇襲攻撃で破ったものの、斎藤攻略には十年かかった。

この時点ではもう一息つくことも許されなかった。朝倉が、六角が、三好三人衆が、そして遠

くには上杉謙信が、武田信玄が隙を窺っている。勝てば勝つほど、敵の壁は厚くなるのだ。戦国武将には、

「足るを知る」

という処世訓はない。停止はすなわち自滅である。いよいよ厚くなる壁に向って前進しかないのである。

信長はもう後には退けなかった。元亀元年の末、疲れはてて岐阜へ帰ったものの、瞬時の休息もなく次の活動を始めた。そしてこの時期はまた、お市にとっても命をすりへらす日々であった。なぜなら、兄の攻撃の鉾先は、専ら浅井の領土、江北に向けられていたからである。

このとき、信長は、横山城を守る秀吉に命じて、姉川以南の都への道をきびしく監視させ、商人の通行を禁じている。物資の流れをとめて、経済的にしめあげてゆこうというのだ。

これはたしかに、浅井及び朝倉にとって大打撃だった。まず、都に売られる米穀の動きがとまり、一方、都からもたらされる消費物資の交流も途絶し、領内の百姓・商人層にまず不満が渦巻きはじめた。

経済封鎖とともに、信長は盛んに浅井家臣団の切崩しを行っている。こうした動きの一々はお市の許には伝わらない。それとない形で、二重三重の監視の輪にとりかこまれているからである。が、お市にはそれがわかる。時折り前触れなしにやって来る長政の、顔にふと翳りがよぎるからだ。それがかくしようもない心の苛立ちをしめすものだということを妻のお市は見逃さない。表面は一時的な和睦は保たれているが、干戈をまじえないだけで両者の間の戦いは、片時も休まず

に続けられているのだ。

元亀二年は雪が深かったせいか、梅の訪れが遅かった。やっと枝の先にほの紅い蕾をつけたかと思うと、そこへ雪が吹きつけて幼い芽を凍りつかせてしまうというようなことを二、三度繰返した後、急に空の色がうるんで来た朝があった。

「どうだ庭に出て見ぬか」

お市の部屋を訪れた長政の頬が、珍しく晴ればれと見えたのは、陽の光の明るさのためだったろうか。

「梅の花ももうすぐ開く」

言いながら、彼はお市の先に立った。表館に通じる小径の雪の下からは、蕗の薹が稚い緑をのぞかせている。

「——まあ」

思わず目頭が熱くなったのは、きびしい戦いのさなか生を享けたお初のことを連想したからである。何ほどの祝福もうけずに生れた娘ではあったが、このごろはよく笑い、しきりに手足を動かす。三度めの出産でありながら一日一日の成長がひときわ新鮮に、お市の胸をゆすぶるのは、辛かった出産の日を思いだすからであろう。と、知ってか知らずにか、長政は、

「鳥のさえずりも高くなった」

空を仰いでいった。

いつのまにか二人は表館の広間の前の庭まで来ていた。庭の一角には、残雪を踏み散らして、

男たちが群れていた。長政の姿を見るなり彼らは恭しく一礼した。
「召しつれて参りました」
「ふむ」
長政は軽く肯く。そのやりとりで、お市ははじめて、侍たちに周囲をとりまかれた一人の老婆に気づいた。薄鼠の小袖の衿はゆがみ後手に縄をかけられている。
侍たちは長政の顔を窺った。
「仰せのごとく？……」
蹲いがちに一人が口を切ったとき、長政は無言で肯いた。
「では、退らせまして――」
老婆を引立てようとしたとき、
「いや、そのまま」
はっきりした長政の声が響いた。
「は？」
一様に動揺の走った侍たちの顔をみつめて、さらに言った。
「そこにて斬れ、検分いたす」
突然のなりゆきに、背後のお市は口もきけないでいる。何が起ったのか。この老婆がいったいどうしたというのか。
が、長政の後姿は一切の応答を拒んでいる。辛うじてお市が感じたのは、どうやらこの処刑を

見せつけようがために、長政は自分を連れだしたらしいということであった。いつにない上機嫌さは、お市にそれと気づかせないためのものだったのだ。

「殿――」

お市は無言の後姿に声をかけた。

「なぜに、このような者を斬れと仰せられるのでございますか」

「……」

「殿――」

依然、長政は無言である。お市を前にして、さすがに侍たちも躊いの色をみせている。

「お許しをいただくわけにはまいりませぬか」

雪の上に引きすえられた老婆は襤褸のようにうずくまったまま顔をあげない。

「あの者が、斬られねばなりませぬわけなりと、お聞かせ願えませぬか」

ゆっくり長政の顔がお市をふりかえったのはこのときである。

「斬らねばならぬわけがあるから斬るのだ」

先刻とはうって変ったきびしい声でそう言い、

「斬れっ」

侍たちに語気鋭く命じた。

「はっ」

侍の群は、その語気にはじかれたようにぱっと左右に分れ、一人が老婆の後に廻って刀の鞘を

はらった。このとき、長政が一足お市に歩みよったのは、気を失うかもしれぬお市を支えるためではなく、眼を閉じ、身をひるがえしてこの場を去ることを許すまいとしたためにほかならない。

白刃は、やおらふりかざされた。

その日の光景を、お市は終生忘れはしないだろう。一刀のもとに老婆の首が飛び、噴きあげる血潮があたりの雪を叩くように飛び散ったのを……。

それにもまして、彼女の脳裏に焼きついて離れないのは、能面のように無表情な夫の顔であった。処刑が済むと、夫はさっと踵を廻らし、そのまま無言で歩き出した。彼がはじめて口を開いたのは、居間に戻ってからである。

「裏切者は許さぬ」

短く、冷然とそれだけ言った。

「あの者が裏切者だと仰せられるのでございますか」

「……」

ややあって、はじめて彼は斬られた老婆の身許をあかした。

佐和山城主、磯野員昌の母――。小谷を離れて佐和山の城を守る員昌から、人質として預けられていた女性だった。

ところが、員昌は遂に佐和山城を持ちこたえられなくなった。小谷よりずっと南にあるその城は、中間の横山城を織田方に押えられたために、全く孤立してしまったのだ。姉川の合戦の日、

浅井側で最も勇敢な働きを見せ、織田軍の守りを強行突破して居城に戻った員昌であったが、厳重な経済封鎖をうけて糧食尽き、手も足も出ない状態になった。

これ以上の籠城は餓死しかない——と見極めをつけた員昌は、遂に宇佐山を守る織田側の武将、丹羽長秀に開城を申入れた。が、このときも、員昌は彼らしい条件をつけた。

「開城はするが、降伏はしない。人数をまとめて小谷に引揚げる。それを認めてほしい」

城は渡すが、命までは売らぬ、というのである。織田方はこれを了承した。員昌が勇将であることを知ってのことである。

が、長政は員昌の申し立てを蹴った。

「引揚げと偽って手勢を小谷に入れ、織田の手先となって謀叛を企むつもりであろう」

織田方と戦うつもりなら、なぜ城を棄てる。最後の一兵まで戦いぬいて散るのが武士の道ではないか。それをおめおめ敵の保護をうけて、この城下に戻って来るというその所存がすでに怪しい。

進退きわまった員昌は、ままよ、とばかり丹羽長秀に身を預けた。長秀はその苦衷を察して、すでに織田側に属している堅田水軍に船を用意させ、彼を一応高島郡に送り届けた。結果的には員昌は織田側についたことになる。長政が員昌の老母を斬ったのはこのためである。

「裏切者は斬るのだ」

もう一度長政は冷たく言い放った。

——が、しかし……。

員昌は本当に小谷に戻って来て一働きするつもりだったかもしれない。そうすれば、あの老婆は殺されなくてもよかったのである。しかし、それを口にするより前に、激しい長政の視線がお市に迫って来た。

――俺が疑い深い、とでもいいたいのか。

お市もじっと夫を見つめかえす。

――疑い深いというより冷たい方です。

――何を。げんに員昌は裏切ったではないか。

――あなたさまが許されないからそういうことになったのです。

――馬鹿な、俺はな、そなたの兄の手口はちゃんと読んでいるんだ。

――何とでも仰せられませ。あの罪もない老婆の命を縮められたのはあなたさまなのです。それが一国のあるじのなさることでございましょうか。

二人の視線はからみ、青い火花を散らせては離れ、またからんだ。その無言の闘いにきりをつけるように、やがて長政は言った。

「ともあれ、裏切ったのは、そなたの兄だ。去年の冬、将軍に泣きついて和平をとりつけておきながら、すぐ小細工を始める。砲火をまじえずとも、これは明らかな挑戦だ」

投げつけるような口調であった。

「俺は裏切者は許さない。裏切者は殺す」

それから、ひたとお市の眼をみつめた。

「だから員昌の母親は殺した――と、そう信長に伝えるがいい」
「え？」
なぜそのようなことを言うのか？　お市は問いただしたかった。
――こんなに厳重に見張りをつけられていて、それでも私が織田の家と連絡がとれると思っているのか。
いや、夫はそういう形で別のことを言おうとしているのかもしれない。
――裏切者は殺す。
――人質は殺す。
お市は人質ではない。同格の大名家から嫁いで来た女性に対してはおのずから人質とは違った扱いがある。が、心許せぬ敵国の女性として、常にある距離をもってみつめられていることもまたたしかなのである。
――もしこれ以上事態が悪化すれば、私のことも容赦しないということなのか。
それでいて、その言葉の中にある長政のやり場のない哀しみをお市は感じずにはいられない。夫の心は揺れている。狂暴にもなり、平静さも失っている。
――もう二人の前には、そんな未来しか残されてはいないのだ。
という、これは悲痛な宣言であるのかもしれない。夫婦でなければわからない愛憎の思いを、そっと噛みしめてお市はうなだれた。

浅井側の前途は、いま、まぎれもなく暗い。かといって、佐和山城を奪取した織田側にとっても、その困難な状況は、ほとんど変っていない。というのは、諸大名に伍してひけをとらない――というより、諸大名からも恐れられている石山本願寺が、いまや公然と反信長側の陣営に加わったからだ。

これまでは信長の対本願寺の戦いは、天下統一の中で付随的に考えられて来たが、むしろ現在の学界では、これこそ信長の性格を決定づける戦いと見られている。

石山本願寺は、一向宗、つまり真宗門徒の本拠である。この門徒は室町時代の末期から北陸を主軸に一致団結して大名に抵抗する一揆を続発させて来た。

道場とか末寺を中心にしたこの団結力のすさまじさは他に例をみない。彼らはその団結を唯一絶対とし、大名の支配を嫌う。石山本願寺が信長と決定的に対立したのは五千貫の矢銭を拒否したことにあるが、じつはその裏には、末端の反大名的な体質がある。つまり両者は相映じあっているのだ。本願寺は末端から突きあげられるし、本拠の決定は全組織を動かす、といった具合で、この時期、信長と本願寺門徒の対立は、容易ならぬ様相をしめしはじめていた。

なかでも根強い抵抗は彼のお膝元から起った。河内長島と呼ばれた木曾川と長良川にはさまれたデルタ地帯は区分的には伊勢に属するが、尾張にもっとも近い所である。ここに願証寺という真宗寺院があり、本願寺が反信長の旗幟を鮮明にすると同時に猛烈な抵抗運動をはじめた。すでに元亀元年の暮には、ここで信長の弟の一人、彦七郎信興が一揆のために殺されている。

信長は、浅井・朝倉との休戦が成立するとまずここを潰すことを狙った。

が、この戦いは信長側の惨敗に終った。戦国の名ある武将と戦って一歩もひけをとらなかった信長が無名の一揆に？　などと思うのは的はずれである。この時期はまだ完全な兵農分離は行われていない。つまり、プロの武士は未成熟であり、火器の類にもそう差はなかったのだ。その上、一揆方には、信長傘下の武士とほぼ同じ程度の実力を持った土着の侍が加わっている。戦闘の際に、本当の戦力となるのは彼らである。しかも彼らは自分の住む長島を隅々までよく知っている。デルタ地帯を縦横に流れる小河川を通路に、まるで下駄でもはくように小舟を操って駆け廻る。

しかし信長勢はこうはゆかない。陸戦はお手のものだが、ほとんどが、水上移動に馴れていない。もたもたしているうちに、一揆側は、

「先手サヘギリ、跡（後）ヲサヘキツテ」

と『甫庵信長記』が書くような自在の神出鬼没ぶりで織田勢を分断し、これに痛撃を加えたのである。

さすがの信長も、攻撃をあきらめるよりほかはなかった。

「退けっ。退けっ」

総退却を伝えたが、殿軍もいつものようにあざやかにはゆかなかった。斎藤の有力家臣だった氏家直元――西美濃三人衆の一人といわれた彼まで敵中におきざりにされて戦死する始末。信長軍の棟梁と呼ばれていた柴田勝家さえ、日頃の歯ぎれのよさは影をひそめ、動きが鈍い。それでもやっと兵をまとめ、そのあたりを流れる大田川を遡って引揚げようとしたが、そこへ五、六十艘の一揆の舟が、わっとばかりに押しよせて来て、あっというまもなく、太股を射られて舟底に

転り落ちた。

勝家危しとみて、

「ここは俺が引受けた。早く退られよ」

と、殿軍を代った安藤守就もまたまた手傷を負う、という始末で、まさにさんざんのていたらくであった。

信長の敗北は、またたくまに小谷の館に伝えられた。

「手ひどい敗けであったそうな」

長政の口調は心地よげであった。そういう夜にかぎって、彼はお市を訪れる。

「権六までが手負いになったとはな」

お市は答えない。そのくらいのことでは心を動かされなくなって来ている。が、長政の口から、佐治信方――姉のお犬の嫁いだ尾張大野の城主までも戦死したと聞いたとき、

「え、信方どのも？……」

思わず声を上ずらせた。信方が多分この合戦に加わっているだろうということは察していた。為興の率いる大野水軍は、信長が最も頼みとする水上兵力である。水の上を小舟で走り廻る長島一揆を押えこむためには、信方の力にまたねばならないはずであった。

――その信方が戦死したとあっては……。

大野水軍も全滅したのであろうか。いまさらながら、今度の戦いのすさまじさが肌に伝わって来た。

——姉さまはどうなさるのか。

お犬には、わが娘と同じ年の与九郎という息子がいるはずだ。まだ数え年四歳では、とうてい父の跡を継ぐことはできない。

——とすれば……。

ふっくらしたお犬の顔が眼にうかぶ。いつもおっとりしている姉は、この生涯の危機の中でも多分取乱すこともないであろう。が、それにしても、戦国の世に幼な子を抱えてのこれからの人生は決してなまやさしいものではあるまい。

とつおいつ思いめぐらす傍で長政は話し続けている。

「福田寺、福勝寺、箕輪（みのわ）の誓願寺……」

しきりに寺の名をあげてから、

「この江北十カ寺も、もう我らの仲間だ」

凱歌を奏するようにいう。

——何のことなのか？

ふとかすめた自失の瞬間を長政は見逃さなかった。急に不機嫌な声になって、

「聞いておるのか、お市」

視線をけわしくした。

「は、はい——」

江北十カ寺——一向宗のことだな、とすぐ察しはついた。本願寺に呼応し、長島同様、この江

北の真宗門徒も立ちあがろうというのであろう。話にたちまち追いついたお市に、長政は不快さをかくそうとしなかった。

「そうだ。もう信長は四面楚歌だ、という話をしている。なのに――」

いきなり腕がのび、お市の胸元をひっつかんだ。

「何を白々しい顔をしているっ」

乱暴に胸を押しはだけたとき、長政は目に狂気を宿していた。

「何で泣かぬ。何で……」

思わずそむけるその顔を無理にふりむかせようとした。

「俺はな、その落着きはらった顔が憎い」

眼をぎらぎらさせて、長政は指に力を入れた。何で血しぶかぬ。何でのけぞって叫ばぬ――しかしそう言われても、今それが許される私だろうか……とお市は思う。

いや、長政とてもそれを知っているのだ。知っていながら、時として長政は狂する。それは彼が男だからだ。そして自分が水のような静かさでそれを受けとめるよりほかはないのは、女だからだ。そしてその愛憎のからみあいの複雑さは、城の中の誰にも覗かれてはならぬことであった。

数カ月の後、お犬が、兄信長の手許に引取られたことをお市は知った。幼い与九郎は佐治家に残してのことだという。が、その身の上を気の毒がるより、お市には、むしろお犬がうらやましかった。少なくともお犬は日々お市がさいなまれつつある愛憎の炎からはぬけだしている。

自分がこの愛憎の軛から解放されるのはいつの日か、そしてその解放の日は、員昌の母のように血しぶきを雪に散らせるときであろうか……。

思い惑うお市の耳に又もや兵鼓の響きが近づいて来た。信長勢が近江に近づきつつあるという知らせが届いたのである。

決戦のとき

お市の想像をこえた速さで、信長は小谷城下に迫って来た。

織田勢出陣――。

という情報が伝わり、夫の長政に従ってやっと小谷山上の城に上ったころ、すでにその先鋒はちらほら姿を現わしたのだ。

――速すぎる。

わが兄ながら、お市は頬の色の変る思いである。

――そんなに浅井の守りは手薄になってしまったのか。

嫁いで来た日、小谷までの道筋には、浅井の家臣の砦がひしめいて、鉄壁の守りを誇示していた。が、横山城が織田の手に陥ってしまった今は、彼らの帰趨もあやしくなっているのではないか……織田軍の迅速な進出は、あきらかにそれを物語っている。

――そうだとも、それにきまっているとも。

といわぬばかりに、織田勢の先鋒は火を放ちながら城下に近づいたが、体を固くして身構える城兵にわざと肩すかしをくわせるように、そのまま城の裾を通りぬけて北進してゆく。

——はて？

浅井勢が見守るうちに、若狭に近い木之本・余呉あたりにまで進んで、傍若無人の放火作戦を展開した。

——もはや、浅井領下は、俺の廊下だ。

といっているかのようだった。

が、負けん気の強いはずの長政は、なぜかこのとき挑戦に応じなかった。

「殿っ」

無念そうにふり仰ぐ部下に肯いて、

「待て」

短くそれだけ言った。

「しかし……これほど勝手な振舞をする奴らを許すことはできませぬ」

なおも出陣を促そうとするのを、

「なに、放っておけばやがて退く」

確信にみちた口調で言う。

「退かねばならなくなる」

果せるかな信長勢は、あっというまに反転し、横山城に戻ると佐和山に向った。近くに一向一

揆が蜂起したからである。本願寺の意をうけた近江十カ寺の息のかかった小武士団は、このところ蛇か蜂のような執拗さで信長にくいさがっているのだ。そして彼らは、浅井と気脈を通じ、信長がちょっとでも浅井を叩こうとすれば、たちまち牽制の動きをしめすのだ。長政とすれば自領こそ減ったものの、今や力強い協力者を得たのである。彼が依然として意気軒昂としているのはそのためであった。

今の浅井の力で信長に立ち向うのは無理だということは誰の目にも明らかだが、しかし彼は弱音は吐かない。

「みろ、信長の四方はみな敵だ。本願寺も叡山も、朝倉も……。甲斐では武田信玄も動きはじめている」

これらが一度に起って包囲の輪を縮めさえすれば、さすがの信長もぐうの音も出まい。そう言い放つ長政の言葉には、あながち虚勢とばかりいえないもののあることをお市は感じている。綜合的な判断に立てば、兄信長のおかれた環境は、今までで一番むずかしい所に来ているともいえる。

一向一揆に立ち向った信長は、相手に一応の打撃を与えただけで、さっと兵を退いた。彼らの執拗な抵抗ぶりからすれば、叩かれても叩かれても手向って来ることはわかりきっている。また徹底的に彼らを殲滅したところで、必ずしも包囲の輪を打破る有効打になるかどうかも疑わしい。

信長としては、最も決断を要する時期であった。

――包囲を撃破するために、何をなすべきか。何が一番有効か。

鋭く周囲を見廻した彼は、ここで果敢な手をうつ。今までの日本人が思いもつかなかった不敵な手を——。

その知らせを聞いたとき、長政は半ば叫ぶように言った。

「お市、狂ったぞ信長は」

たしかに、彼の眼から見れば、それは狂人のしわざとしか思えないことだった。近江の一向一揆に一撃を加えた後、鋒先を転じた信長は、一挙に叡山殲滅をやってのけたのだ。九世紀初頭、最澄が法灯をかかげて以来、禁制の聖域とされて来たこの地を踏みにじり、山上に住む人々を皆殺しにして火をかけてしまったのだ。

表面の理由は、先に浅井・朝倉に籠城を許し、公然と信長に敵対したこと、であるが、これは単なる復讐戦ではなかった。信長の目指したのは古代以来続いて来た宗教的な権威を徹底的に打ちのめすことにあった。これまで叡山は何かというと鎮守の日吉神社の神輿を都に担ぎ出して、要求をつきつけた。院政時代の気儘な王者、白河法皇をして、賀茂川の水と賽の目とならべて、「ままならぬもの」

と言わせた山（叡山）法師は戦国のこの時期にもまだ健在だったのだ。彼らは宗教的権威とともに広大な領地を持ち、都に通じる経済ルートを握る大領主である。これまでの権力者はすべてこの叡山勢力と妥協することによって、自分の権威を高め、地位を固めるのが常道だった。裏返せば、

——叡山に見放されたらおしまいだ。

という意識がつきまとっていた。

それを信長は一挙に払いのけた。自分を包囲する諸勢力の中で、もっともたちの悪そうなものに向って、まず痛撃を加えたのだ。

颯爽たる決意である。とかく古い権威と妥協するのを美徳と考えがちの日本人の中で、彼ひとりは、そんなものには目もくれない。この叡山焼打ちに彼の残酷さを見る人が多いが、それは正しい歴史的理解とはいえないだろう。古代中世を通じて日本の社会に重くのしかかっている宗教勢力——しかも真の意味の宗教とはおよそ無縁な現世の欲望にこりかたまった彼らと対決するには、このくらいの蛮勇を振う決意が必要なのだ。その意味で、彼のなしとげた仕事のうちで最も歴史的意義あるのはこのことだったかもしれない。

信長軍はこのとき、法螺を吹きたててひたひたと叡山に押し登り、諸堂伽藍をすべて焼きつくし、女も子供も区別なく虐殺した。

「そもそも女色禁制のこの地に女はいるべきはずがない。それがいることじたいがおかしい」

という論理である。また、

「私は浅井・朝倉の籠城に反対しました」

「某々は碩学、博才の老僧です。なにとぞお助けを」

といった歎願も一切受けつけなかった。

人々の眼には信長が天魔に魅入られたとしか映らなかったようだ。

「ちか比ことのはもなき事どもにて、天下のためせうし（笑止＝気の毒）なる事、ふでにもつくしがたき事なり」

宮廷の女房の日記である『御湯殿上日記』はこう書いた。宮廷も公家も他の寺の僧侶もただ茫然自失である。彼らは、

「叡山に限って、誰に対しても敗北はしない」

と信じていたし、

「もし弓をひくものには、たちどころに天罰が下る」

と思っていた。ところがどうだろう、山は丸焼けになり、信長はピンピンしている。彼らの世界観、人生観は根本から覆されたのだ。ひとり快哉を叫んでいるのはイエズス会の宣教師、ルイス・フロイスである。

「此の如き事は、日本に於ては極めて不可能なる事と考へられしに、此の如く余分なるものを滅ぼし、最も神聖なる教を当地方に弘通せしめんと計り給へるデウスの全能至善は称讃すべきかな」

これとて、キリスト教の立場に立った打算的評価であって、信長の行為に対する客観的な価値づけではないのであるが。

ともあれ、信長は渾身の力で包囲網の一部を破った。が、その勝利は孤独すぎて、人々の眼には、彼が破滅の道を歩んでいるとしか見えなかった。浅井長政もまさしくそう思った一人だったのである。

——信長の破滅は近い。

そう思う長政と、

——突破口を開いた。

と思う信長と。

翌元亀三年は、まさにこの二人が全力を尽して押しあい、揉みあった年であった。叡山を沈黙させた信長は次の目標を浅井・朝倉とはっきり狙いを定めた感じだったし、長政は、破滅に近い信長を、どうしても自分の手でねじ伏せねばおかない気持になっていた。

正月早々、長政は横山城に攻撃をかけた。信長の息子たちの元服の祝いに、木下藤吉郎秀吉が城を明けたのを嗅ぎつけての奇襲であった。留守を預かる竹中重治の指揮によって、織田勢は何とか城を守りぬいたものの、

——今年はやる！

闘志を溢れさせた浅井の攻撃ぶりが、織田側に衝撃を与えたのは事実である。負けじとばかり逆に織田側が攻勢をかけて来たのが三月、このときは、小谷城の足許近くに放火し、さんざんの劫掠（ごうりゃく）をほしいままにして引揚げた。

お市が、身ごもったことに感づいたのは、そのころである。このところ長政は側室のお蘭を近づける夜が多く、お市の寝所を訪れることはめったにない。なのに、お蘭はいっこう身ごもる気配がなく、お市が確実にその種を宿すというのは皮肉といえば皮肉なことであった。

——愛撫の濃密さのゆえだろうか。

ふと頬のあからむ思いがある。その濃密さの意味を口でたしかめたわけではないが、言葉に出

す以上のものをお市は感じている。すでにこの館にとついで五年、実家との仲が険悪になったからといって、ただちに二人の間まで冷えきってしまうような、夫婦とはそんなに単純なものではないのだ。

憎しみと愛情が奇妙に屈折しながらからみあい、信と不信が交互に相手を責めさいなむ。それが、時折りの激しい愛撫になって現われる。もし単なる欲望の吐け口を求めるのだったら、長政の周囲に女はいくらでもいる。お市を対象にする必要は全くないのだ。

では、なぜ長政はお市を抱擁するのか。そしてそれを愛そのものとうけとめていいのか？　いや、そうではない。狂ったように長政に責めさいなまれるとき、お市はそこには怒りに似た何かと、男の利己が、ほとばしっていることを感じないではいられない。とりわけそれが、信長が窮地に陥ったときに激しくお市に向って注がれるものであってみれば……。

が、そんなときも、長政は単純に信長の敗北を喜んでいるわけではないのだ。

――もしも信長が滅んでくれたら……。

そのときはさまざまの絆から解き放たれて、お市を愛することができるだろう。

――そうなっても、お市、そなたを見捨てはせぬ。いや、そのときこそ、何にもましてそなたをいとしむぞ。

お市には長政の心の揺れがよくわかる。その愛情の屈折は彼女自身のものでもあるからだ。

――この状況がすべて終ってくれたら、私はどんなに心安らかにこの人の胸に顔を埋めることができるだろう……。

心の隅で兄の没落を期待している自分に気づき、お市はぎょっとしながらも、

――ひととき、ほんのひとときだけでも、盲目でいたい。

ひそかにそう思う。そういうとき、お市はその濃密な陶酔を我を忘れてむさぼる。

――もし、それが、私を身ごもらせたのだとしたら……。

お市はわがからだの中の炎をみつめる思いである。いや、外を見る眼が盲でしまって、その炎だけを見つめていられたらどんなにいいだろう、という気がする。

その年の七月、信長は大軍を率いて小谷城近くに侵入して来た。しかも今度は、意気込みが違う。

――さあ、勝負！

問答無用とでもいうような強引な迅速さでやみくもに、小谷城に向いあう虎御前山に陣地を構築しはじめた。横山城からでは、小谷城はあまりにも射程距離が長すぎる。その間で押しつ押されつを繰返しているのでは埒があかない。小谷の鼻先に拠点を築き、じっくりと四方を取りかこんで、しめあげてゆくぞという構えを見せたのだ。

このとき、信長は大和の松永久秀にも手紙を送っている。

「来る七月七日、郷（江）北小谷表に相至って働き候。即（時の誤か）刻を違えず老若を選ばず打ち立つべく候。仍って取出（砦）を相構え候間、鋤鍬以下を持たしむべく候」（以下略、奥野高廣氏の訳読による）

陣地構築用の人数を徴発している。この鋤鍬が単に虎御前の城砦作りのみを目的とするものでないことは後にふれる折もあろう。とにかく、今度の出撃に、信長は重大な決意を秘めていた。作戦規模がこれまでとは違うのだ。虎御前に陣地を作る一方、彼は木下秀吉に命じて、小谷側の阿閉貞征の山本城をも攻撃させている。この山本城のある山本山は湖北の高月に近いところにあり、標高三百メートル余、さらに進んで信長勢は木之本から余呉方面に放火した。一方琵琶湖畔の長政らの拠点も、しらみつぶしに潰していった。

——どうだ、浅井の領土は、すっかり俺の手で握ってしまっているぞ。

といわんばかりである。

浅井方も、満を持している。

——何の、そうやすやすと挑発にのるものか。

わざと冷然と突き放す。

これにはわけがあった。すでに信長の動静のすべてを越前の朝倉に通報しているのだ。そして朝倉からは一万五千の兵を率いて急遽出陣する旨の返事が早くも届いているのである。いや、朝倉だけではない。このとき浅井は反信長陣営に逐一戦況を知らせている。

信長滅亡眼前に候。近日一戦に及ぶべく候。（中略）一日も早く居益、柏原口、ふかふかと手使い候様、才覚あるべき事

備前守　長政

これは島若狭入道宛の手紙である。このほか、父久政から若狭の武田信由に、

「義景が出て来るから、敵を討ち果すのも目前だ」

と知らせたものもある。中に、注目すべきは、「武田が間もなく遠江に出馬する」と、甲州の信玄の動静に触れる手紙のあることだ。かと思うと、石山本願寺の光佐から、二十両の軍資金に添えて、状況を問合わせる手紙も来ている。実は光佐は信長と表面上は和睦が成立しているのだが、本心は信長打倒にあったのである。

これで見ると、浅井の作戦行動は、朝倉義景や、武田信玄、本願寺光佐らと綿密な連携作戦をとっていることがわかる。これまでの対信長戦とは、明らかに性格が違って来ているのだ。

朝倉勢は八月には、小谷城の近くに姿を見せた。彼らは直接小谷には入らず、その背後にある大嶽山の城砦に入った。小谷山の四九五メートルに対し、大嶽はさらにこれより高い。それぞれが、構築を急いでいる虎御前山二一八メートルを見下す感じである。

戦機熟す——と見たか、早速両軍の間には足軽戦が始まった。しかし、着陣早々の朝倉と、すでに半月以上この地にあって、地形を頭に叩きこんでしまっている織田方とでは動き方に差がある。織田勢は闇にまぎれて、朝倉の陣営を奇襲し、旗差物や幟を奪い取って来ては、翌日、虎御前山から、

「おい、これを見ろよ」

と見せびらかす。朝倉方は地団駄を踏む。

「なにっ、馬鹿にする気か」

長嶋大乗坊という男が、今度は織田側へ殴りこみをかける。

目指すは、信長の首のみ——。

と奪戦したが、たちまち織田勢にかこまれて首をとられた。と、今度は織田の先鋒が、朝倉勢になだれこむ。それを追って、また朝倉側が——というような繰返しがかなり続くうち、ある日の白昼、朝倉の陣営から、具足に身をかためた三騎が飛び出していった。

「ややっ、あれはっ」

いでたちからして、足軽、端武者のたぐいではない。旗差物を見定めて、彼らが勇将の聞え高い前波吉継父子とわかったとき、

「さればよ——」

と朝倉方は肯きあった。

「前波殿は、ここで一働きして御覧に入れる所存と見える」

前波吉継は、少し前、主君義景に対し、無礼の振舞があって勘気を蒙っていたのだ。

「その汚名をいっぺんに雪ごうというのだな」

彼らのがむしゃらな馬の走らせ方に、並々ならぬ闘志を人々は感じた。

——狙うは、もちろん信長の首。ほかには眼もくれぬと見える。

敵陣に近づいていても、いっこう馬の足をゆるめる気配はない。見ている者は思わずひやりとした。

——あっ、危い。矢が、弾丸が来るぞっ。

あまりにも無防備な姿である。

――死ぬ気でおられるのか、前波どのは。

今にも織田側の鉄砲が火を噴き、彼らは木っ端微塵に吹っ飛ぶ！　と息を呑んだそのとき、人人は、思いがけない光景をそこに見た。

前波父子は、なおも速度をゆるめず、織田側の陣営に走りこんでしまったのだ。鉄砲は遂に彼らに対して発射されることはなかったのである。

「裏切りだったのか……」

あまりにも堂々とした白昼の行為の意味に、朝倉方が気づいたのはその後である。

――これは。

事の重大性に気づいた彼らは、にわかに身辺に探索の眼をきびしくした。池田隼人佐という男が通敵の疑いで捕えられたのもこのときだ。じつはその夜、彼が大嶽の朝倉の陣営に放火し、その手引きによって織田側が城内になだれこむ手筈がととのっていたのである。それを聞くなり、

「斬れ！」

決断の鈍い義景も、即座にこう命じた。鉄壁の包囲網を完成したと思ったそばから、ぼろぼろと裏切り者が出て来ることへの衝撃はかくしきれない面持ちであった。

その間に虎御前山の陣地構築はほぼ完成に近づいていた。

と、九月に入ったある夜、その城砦から突如火の手があがった。これは朝倉方の竹内三助、上村内蔵助という二人の武士が、虎御前山にしのび込んで放火したのである。

みごとに成功した復讐戦に、朝倉方は躍り上って喜んだ。風雨の激しかったその夜、彼らは、

織田側の夜廻りの後について砦の中を歩き、誰何されると、
「木下殿の中間でございます。あまり風雨が激しゅうございますので、こうして見廻っております。万一夜討などしのびこんでおりますと、危険でございますので」
と殊勝げに答えたという。
砦を焼く火は小谷の城から、あかあかと見えた。
「お市」
長政は、お市を呼びよせて小谷城の物見櫓に立った。
「見るがいい。信長の作った砦は燃えている」
「見ようとは思いませぬ」
勝誇ったような長政の言葉に、お市は静かに言った。
「なぜに」
それには答えず、
「私は盲になりとうございます」
盲になってからだの中に燃える光だけをみつめていたい。
二人の間に沈黙があった。深々としたその時間の中で、長政はそっと身重のお市を支えるようにした。
信長はどうやら虎御前の城砦の再構築はあきらめたらしい。残りの防備を木下藤吉郎にまかせ

ると、そのまま横山城まで後退した。が、それは単なる撤退ではなかった。横山城から虎御前まで約十二キロの間に八相山と宮部につなぎの城を作り、八相山には手勢を、宮部には浅井側から寝返った宮部善祥坊を入れた。

そうしておいて、その間に幅約六メートルの、当時としては例のない大きな道をつけた。湿地帯が多いので、小高く土を盛上げるという大工事である。大軍の迅速な移動を可能にする、いわば軍用の高速道路である。合戦のために道作りをするという計画はこれまでの合戦にない発想だった。しかもその先端には四キロ半にわたって、高さ七メートルの堤を築いて水で満たし、浅井側の侵入に備えた。こういう工事のために、例の鋤鍬が利用されたのである。浅井・朝倉勢は、この堤を破壊しようとするが、なかなか成功しない。

やがて十月、信長側と反信長側の対決の日は刻々近づいている。その間にお市が産んだのは、女児だった。そのころ、長政の寵をうけたお蘭も身ごもっていた。もっともそのことをお市が知ったのは大分後になってからであったが……。

飛札

お市が三人めの女児――おごうを産んだころ、小谷城下は、珍しく静かだった。元亀三年（一五七二）というその年は、信長と長政の息づまるような対決の連続だったのに、そのときだけ、潮が退くように信長軍は小谷の城下から消えていた。

――よもや、兄さまが、私の身を気遣って下さったのではないだろうけれど……。

お市は赤児の顔を見ながら、そう思わずにはいられない。それが思いすごしであることはよくわかっている。実家との音信が全く断たれてしまっている現在、兄はお市が身ごもったことも、女の子を産んだことも知らないはずだったから……。

――この子は誰にも知られずに生れ、祝福もされずに育つのか……。

姉のお茶々のときは、織田家からみごとな祝いものが届けられた。次の万福丸のときもそうだった。お初のときはすでに織田と浅井は対立関係にあった。まだほんの子供でしかない彼らにそうした生い立ちの差が、奇妙な翳を落しているように思われるのは気のせいだろうか。

長女のお茶々は勝気で目鼻立の華やかな少女である。子供ながら、どんな幸運でもそれを当然として身じろぎもせずに受取るような度胸のよさがある。万福丸は、この気の強い姉に押されがちだが、それだけ鷹揚で、将来は夫よりも大人物になるかもしれない。

二女のお初は愛嬌がいい。口から先に生れたようにおしゃべりで、おませで甘ったれだが、そのくせ、子供のくせに、ちょっと人の顔色を見るようなところがあるのが気がかりだ。

――自分が織田との間に立って心を砕いていたときに身ごもったからだろうか。

ふと、そら恐ろしくなる。

では今度生れたおごうは？　思いがけず訪れたひとときの静かさの中で、赤児はよく寝ている。上の誰よりもおとなしく、ほとんどむずかることもないこの子は、乳の吸い方だけは、どの子よりも逞しい。父の長政からも、ほとんど祝いらしい言葉ももらえなかったおごうだが、お市はむしろこの赤児の未来に、きわだった幸福よりも、平凡な静かさの続くことを祈ってやりたい。

――このひとときの静かさが、おごうの身辺にいつもあればよいのだが……。

が、奇妙な真空状態に似たこの静かさが、ほんものの平和でないことは、お市自身がすでに気づいている。

――なぜ兄さまは小谷城下を立退かれたのか。

落城を覚悟しかけたときに、俄かに信長が兵を退いたのは、ただごととは思われない。それは夫の長政の表情でも察しがつく。彼の頬には、危険を逃れた安堵の思いよりも、いまひとつ積極的な闘志があふれている。客観的に見れば、手足をもがれた感じの浅井なのに、このところの彼

は意気軒昂たる気概にあふれている。

その理由を、彼が初めてあかしたのは、おごうが生れて半月ほど経ってからである。やっと産褥を離れたお市の許にふらりとやって来て、赤児の顔をのぞきこむなり、彼は言った。

「女にしては不器量な子だな。俺にもそなたにも似てはおらぬ」

「まあ……」

お市は微笑した。やっと夫にも子供の顔を眺める余裕ができたと思ったら、ひどく勝手なことを言う。

「でも、生れてすぐでは、わかりませんわ。もう少し大きくなりませんと」

「いや違う。お茶々のときもお初のときもそうではなかった。赤児ながら、鼻筋通り目もとも涼しかったが、この子はどうだ。額ばかり出ばって、鼻はなきに等しい」

じつはお市もそう思わぬでもない。生れたときから、おごうはごつい顔なのである。それが何か姉二人よりも幸少ない生涯を予見させるようで、母の身になると、かえってそれがいじらしい。

長政はひょいとおごうの頬を指先でつつくと座をたった。

「紅葉が燃えるようだな」

小谷の館の、お市の部屋の前庭には、とりわけ紅葉が多い。その年は急に寒くなったせいか、その色がひときわ鮮かである。

「が、それも長くはないな。山の峯に雪雲がかかりはじめている」

それから、ゆっくり長政はお市をふりむいた。

「その雪が降ってそして消えるまで、信長の命は、さて、あるかどうか……」
「え？」
何気ない口調であるだけに、かえってお市の背筋に冷たいものが走った。
「なぜでございますか」
「これを読め」
懐ろから一通の書状を取り出して、長政はしめした。
「どなたの御書状で？」
「まあ読め」
やや部厚な紙に書かれた暢達な文字は、武将らしい気魄のこもったものであった。
「只今出馬候、この上は、猶予なく行い及ぶべく候……」
何という簡潔な出馬宣言であろうか。断固たる決意と自信が行間にあふれている。書簡にはつづいてこうあった。
「八幡大菩薩、富士浅間大菩薩、氏神新羅大明神の照覧、偽りあらず候。義景と相談せられ、此の時開運を行ぜらるべきこと尤もに候、恐々謹言」
花押には見覚えがなかった。
「どこからの御文でございましょう」
「読めばわかるだろう」
「さあ……」

「八幡大菩薩の照覧偽りなしとあろう」
「源氏の血をひく方でございますね」
「そして、富士浅間と新羅明神の加護を祈る人間は、今の世に一人しかおらぬはずだ」
「あ、では……」
その名を口にするより先に、長政は肯いた。
「そうだ、甲斐の信玄だ」
新羅三郎義光の後裔と称し、富士を目近に仰ぐところにいるのは、武田信玄をおいてほかにはいない。その簡潔な力にみちた書面も、彼のものとすれば、いかにもふさわしい。
「いよいよ信玄は甲斐を出た」
ゆっくりと長政は言った。反信長グループが待望していた信玄は遂に甲斐を発ち、遠江・三河に向って進撃を開始したのである。
当時信玄は誰の眼からも日本一の実力者と見なされていた。戦略家として、又領国経営の第一人者として、彼に対して、人々は神のごとき恐れさえも感じていた。将軍義昭がその座についたときから度々招いても、いっこうに腰をあげなかった周到さが、いよいよ彼の実力を神秘化していた。
その信玄が、いよいよ動きだしたのだ。お市が地鳴りにも似た響きを聞くような思いをしたそのとき、長政は言った。
「おろかよ、信長も。わが手で墓穴を掘ったのよ」

信長が墓穴を掘ったというのはこうである。

おごうの生れる少し前、信長は将軍義昭に異見十七カ条をつきつけた。義昭の非法を一々あげて難詰したわけだが、その言うところの中心は第二条に尽きている。ここで信長は言う。

「諸国に手紙を出し、馬その他をねだるのはどういうわけか。そういうことはつつしまれるべきだし、どうしてもほしい時は信長に言い、その副状をつけて言ってやることにきまっていたではないか。それを了承していたはずなのに、無断で遠国に手紙を出すのはどういうことか」

表面は欲張りをいましめているようだが、もちろんそうではない。信長をだしぬいて諸国の大名に手紙を出し、ひそかに信長打倒を呼びかけていることをなじったのだ。

今、信長をとりまく包囲網はしだいに狭められつつある。本願寺、浅井、朝倉、六角の残党、さらに武田……。彼らが緊密に横の連絡をとっているのは、義昭という音頭とりがいるからなのだ。

信長はそのことを早くから感づいていた。

——あの小細工好きめが。

包囲網ができあがったとき、義昭はおのれの力に、とほうもない幻想を抱きはじめていた。みんなが義昭を敬い、義昭の命令なら二つ返事で聞くと思いこんでしまったのだ。もちろん実態はそうではない。武田にしろ本願寺にしろ、信長に天下をとらせまい、という自分の利害から、表面義昭の命令をきいているにすぎない。自分の欲望をかくすためにそのほうが都合がいいからで

ある。

が、義昭はそう思わない。あっぱれ天下一の策士になったつもりである。

——よし、それほど気がついていないなら。

かんしゃく玉を破裂させる勢いで、信長は義昭に十七カ条を叩きつけた。すでに叡山を焼き滅ぼしてしまった彼は、将軍の権威など何とも思わなくなっている。それより彼を繞る包囲網をぶち切るためには、ここでその小細工の張本人をどやしつける必要がある、と思ったのだ。

しかし、これは、反信長側からみれば、いっせい蜂起のこの上ない口実になった。最も慎重だった信玄も、これでやっと上洛の機を捉えた、と思ったらしい。

これを長政は、信長が墓穴を掘った、と見たのである。

「これでは、信長め、風を喰って近江を逃げ出すわけよ」

夫の声を耳に、お市はまだ信玄の書状に見入っている。

——何と自信にあふれた文字か。

日本一の国取りといわれる彼の人間に圧倒される思いである。

と同時に、夫が何のかくしだてもなく、この書簡を見せてくれたことに、お市の心は揺れている。

——二、三年前ならこうではあるまい。

が、それは二人の間に信頼がよみがえったわけではないのだ。その書簡を投げ出すようにして自分に与えた夫の、声なき声を、お市は今聞いている。

「どうだ。もう信長の運命はきまったぞ」

誇らかに、彼はそう言っている。そして、

「信長に知らせたくば知らせるがいい」

とでも言いたげに、その書簡を、お市の手から取り戻そうともしない。しかし、いま、兄の許へ、使を走らすこともできないでいる自分であることを、誰よりもよく知っているのは夫自身ではないか。

——いま、夫は残忍に自分をなぶろうとしている。

が、それでいて……。

長政の中にあるのは憎しみだけではないのだ。お市がいつか思ったように、早くこの事態が片付くことを、長政自身も、ひそかに願っているのではないのか。

——もし兄が敗けたら……。

ひそかにそれを願っている自分に愕然としたことのあるお市だが夫もまた、苛立つ思いでそれを待っている。

——そうなれば、そなたと俺の仲は、もっと単純なものになる。

そう口に出していえないから、ますます長政は残虐なそぶりをし冷酷な言葉を口にするのである。五年間生活をともにし、四人の子を儲けた今、その縁はそうたやすく切れるものではない。

「不器量な娘だ」

という彼の言葉の中にも、どうにもならない血のつながりのうめきのようなものが漂っていはしなかったか。

気がついて眼をあげると、あたりは急に薄暗くなっていた。縁から眺める峯々が薄灰色に蔽われはじめたのは、雪を含んだ雲が頂を巻きはじめたからであろうか。

信玄の西上開始によって、たしかに事態は一つの転換期にさしかかった。

信玄がいつ美濃に入るか。信長は美濃で彼の進攻を支えるべきか、それとも、それ以前に都の義昭と決着をつけるべきか。距離と時間を賭けた、一手もあけられない戦いは、いよいよ始まったのだ。

信長が動きだしたと見るや、本願寺の光佐は勢いづいて、配下の寺院に信長攻撃を命じた。六角の残党もうごめき始めた。

いま、信長が唯一の頼みとするのは、遠、三両国を拠点とする徳川家康だけである。家康は自領の門徒（本願寺信徒）の一揆にさんざんてこずらされているから、彼が本願寺側に寝返ることは絶対にない。その意味では、まことに頼もしい同盟者だが、問題は彼がどれだけ信玄の進出をくいとめ得るかということである。

金ヶ崎、姉川で、信長は、家康のすさまじい戦いぶりを、じっくり見て来た。

――あいつは、まるで合戦のために生れて来たような男だ。

姉川の瀬を黒い集団となって、いっせいに槍をそろえて渡っていった、あの無気味なまでに統制のとれた戦いぶりには、少なからず舌を巻いた。あのとき本陣まで長政の先鋒になだれこまれた織田勢は徳川勢の働きによって命びろいをしたようなものだ。

――今度も家康は俺を助けてくれるかもしれぬ。

信長は一縷の望みをいだいたが、それはまたたく間に破られた。

鎧袖一触（がいしゅういっしょく）――。

という言葉があるが、武田勢は、まさにその言葉通り、遠江の徳川勢を蹴散らしてしまったのである。十月のはじめ、信玄は遠江に入ると家康に属する諸城をごぼう抜きにし、中でも最も頼みにしていた二俣城も簡単に攻落してしまった。この城を守っていた中根平左衛門正昭はかなり勇敢に戦ったが、結局信玄の軍隊には歯が立たなかった。最後は城の水の手を断たれて明渡す羽目に陥ったが、それまでの経過も、まるで大人と子供の喧嘩のようだった。

このときの武田勢はその数二万五千とも三万五千ともいわれる。これに対して家康の動員能力は三千。けた違いの規模もさることながら、何よりもまず軍隊の格が違う、という感じであった。やがて武田勢は遠州見付から袋井へと進んだ。まるで大規模な竜巻が地唸りを立てて地上のすべてを巻きこんでゆくような進軍ぶりだった。

家康はこの信玄の進撃を阻止すべく、いったん天竜河畔に陣をしいたが、なすところなく浜松へ戻った。信玄はその間に、部将山縣昌景（やまがたまさかげ）を三河に侵入させている。

勝ち戦さの波に乗った信玄は、その年の暮、家康に決戦を挑み、これを徹底的に打ちのめす。三方原の合戦といわれるものがそれである。この合戦が始まるまでは、家康はまだ自信を失っていなかった。

――生れついての戦さ好き。

と自他ともに許していた彼は、怒濤のような信玄の進撃を決して恐れてはいなかったのだ。小勢なら小勢の戦いようがある。かつて信長が今川義元を奇襲で破ったような手がないわけではない、とひそかに自負してさえいた。

ところが――。

蓋をあけた結果は惨敗だった。武田勢の猛攻に、旗本まで崩れたち、子飼いの本多忠勝らの必死の防戦の中で、家康は命からがら駆けぬけて、たった一騎、やっと浜松へ辿りつく（このとき信長は、数千の援軍をさしむけているが、これも、ものの役には立たなかった）。

信玄の徹底的な勝ちぶりは、たちまち都に伝えられた。

――さすがは信玄よ。

――その勝ちぶりのすさまじさよ。

反信長陣営はどよめきたつ。信玄の捷報にこたえて、光佐は、早速筆をとった。

「遠州浜松表において一戦に及ばれ、即時、徳川敗軍、敵輩討捕えらるるの由、御調略の至り比類あるべからず候、大慶この事に候」

光佐はまた息せききって朝倉と浅井に、信玄の勝利を伝えている。それを聞くなり、長政も信玄の一族である穴山信君に、鄭重な祝い状を送っている。大げさにいえば、日本中に飛札が飛び交い、それがいまやすべて信玄を中心に吸いこまれたり吐きだされたりしているといった状態なのだ。

そう思って、今残る書札類を眺めると、一見月並みな文字の裏にそれぞれ政治的ゼスチュアや

思惑を秘めていて、ドラマそのままのおもしろさがある。たとえば、この時期、大和の松永久秀は、こっそり本願寺の末寺に信玄の勝利を祝う手紙を送っている。これは元亀の冬を越えて、天正と改元される翌年になってからだが、

「春早々の吉報は何ともうれしい」

と書き、徳川も敗け、織田軍の名ある部将も戦死したというから近江に対陣中の織田勢も間もなく崩れ立つだろう、と言っている。このとき、久秀は正面切って信長に反旗を翻していない。彼が謀叛を起すのはもっと先のことだが、虎視眈々、機会を狙っている彼の本心をのぞかせておもしろい。中でひとり、信長だけは、

「遠州の信玄のていたらく、一向不首尾」

と、信玄のライバル上杉謙信に書送っている。もちろんこれは強がりである。

三方原の勝利の後、信玄は遠州刑部で年を越し、翌年二月、徳川方の野田城を攻略した。その報が伝わればまた都はどっとどよめき、ひとしきり飛札が飛びかう。まさに世間は信玄の一挙手一投足を窺っている感じである。もっともその中で、朝倉義景だけは、うかつにも、前年の暮に近江を引揚げて越前に戻ってしまっている。信玄もこれには驚き、

「おいおい、駄目じゃないか。今一息で信長をやっつけようという所まで来ているのに、そんなのんきなことでどうする」

と文句をつけている。たしかに朝倉義景という男、当時で一人だけ波長のあわない感じである。彼にはどうも時代の動きというものが摑めなかったようだ。ともあれ信玄の進撃によって、信長

包囲作戦は筋金が入った。輪は一段と縮まった感じである。

——時こそよし！

躍り上ったのは義昭だ。彼は信玄に呼応して、まず西近江で光浄院遍慶に兵を挙げさせた。この遍慶は近江の勢多の豪族、山岡氏の一族である。このとき信玄の先鋒はすでに美濃に侵入していたから信長としては、うかつに動けまい、と義昭は踏んだのだ。

果せるかな、信長はうって変って低姿勢に出た。

——何でも将軍家の仰せはすべて承ります。

先に十七カ条をつきつけた時とは、何という変り方であろう。信長はさらに自分の子供を人質に差し出す、とまで言って来た。

「ふむ、さすがに泣きを入れたな」

義昭は思わずにんまりした。が、どうやら彼の見通しは少し甘かったようだ。たしかに信長は表面下手に出ているが、その実逸早く柴田勝家や明智光秀に命じて、西近江の遍慶や、これに同調した一向宗の門徒に一撃を加えている。勝家や光秀はやがて西近江を平定し、石山本願寺を降し、堅田に拠った一揆も抑えこんでしまったのである。

義昭としてはこれは甚だ面白くないことであった。

——ともかく、それでは。

と、四方に手を廻して二条城の堀を深くしたり、竹や鉄砲の火縄の原料を徴発したりして、合戦の準備をすすめた。いざとなったらここを本拠に、信長討伐の宣言をしようというのである。

西上する信玄と都の義昭で信長を挟み討ちにする作戦だ。

三月七日、義昭は、信長の差出そうという人質をも斥けた。いよいよ宣戦布告である。

——どうだ、信長、手も足も出まい。

この綿密な作戦はどうだ、と鼻高々の義昭の処に、やがて思いがけない知らせが届いた。

信長が、岐阜を発って都へ向った、というのである。

「信長が来ると？」

義昭はわが耳を疑った。いや、信長は気が狂ったと思った。

——信玄をどうするのだ？　美濃を踏みにじろうとしている信玄を……。美濃を明渡して、信長めは都へ出てこようというのか。

義昭はまだ気づいていなかったのだ。美濃における情勢の重大な変化が信長に上洛を決意させたということを……。

朝倉滅亡

人間は一生に一度か二度、「運」としか呼べない何かにぶつかるものだ。くじに当るとか、偶然大災害を免れるとか、現われ方はさまざまだが、自分の力ではどうしようもない要素が働いているという意味で、やはりこれは「運」としか言いようがない。

のちに天正と改元される元亀四年（一五七三）の春、織田信長がめぐりあったのも、まさにそんなものだった。

武田信玄が再起不能に陥ったのだ。当時、信長の周囲に張りめぐらされていた包囲網の強力な一環として、あたかも、空を蔽う大竜巻のような無気味さで、信長に迫りつつあった甲州の怪物は、いま一歩で信長の後衿（うしろえり）をひっ摑みそうになったところで、ふいに活動をとめてしまった。やがて四月十二日、彼は陣中で五十三歳の生涯を終えるのだが、それに先立って、逸早く、

——信玄、病む。

の情報を嗅ぎつけ、一気に上洛に踏みきったとき、信長の運は開けた。

もし、あの時点で信玄が死ななかったら？　信長の一生は全く違っていたかもしれない。自分ではどうにもできない相手の生理的な生命の帰趨に信長の未来はかかっていたわけで、これは「運」と呼ぶよりほかはないものであろう。

そして、その「運」を嗅ぎとって、一挙に将軍義昭との対決に出たのは、信長の武将としての「才」だ。三月二十九日、疾風のように岐阜から上洛して来た信長は知恩院に陣取って、火を洛外に放って義昭を威嚇した。そうしておいて、わざと和睦を申しこんだ。

が、義昭は、まだ信長が奇蹟的な「運」を摑んだことに気づいていない。

——和睦だと？　何を馬鹿な。

世の動きを見る眼のないくせに、策謀好きのこの男は、年頭以来の信長包囲作戦に、我ながら惚れ惚れとしている。いよいよ準備のととのった都にのこのこ出て来るとは、飛んで火に入る夏の虫のようなものだ、とせせら笑った。

と、信長は義昭の鼻先で上京を焼きはじめた。なおも強気でいると、今度はひしひしと義昭のいる二条城を取囲んでしまった。こうなると、堀を深くし、竹矢来を組んだ二条城の守りも、いささか心細くなる。しかも気脈を通じている三好三人衆や本願寺の動きが思ったほどでもない。仕方なしに義昭は、一応信長の和睦を受入れるふりをする。これも天皇を動かし、その勅旨によって、やっと和睦をするという形をとった。

——まあ、天皇のお言いつけだから、事を荒立てないことにしましょう。

ということにして、ともかく、名誉ある和平をとりつけた。

その直後、信長はたちまち行動を起した。また風のような早さで都を去ってしまったのだ。途中義昭に通じている六角の鯰江城を攻め、その足で、さっと岐阜へ引揚げた。

義昭が、信玄の死を知ったのは、その後間もなくである。

「そ、そうだったのか、うむむ……」

さすがに、手足から血の引く思いがした。包囲作戦中最も頼みにしていた一角が崩れたのである。

——信長め！

何と運のいい奴だ、と舌打ちしたが、もう遅かった。それでも義昭は諦めない。

——作戦は変えねばならぬな。

東の信玄寄りから、西へと方向転換だけはすばやかった。信玄が来ないとなれば、二条城は決して安全な砦ではない。信長に囲まれて、その脆さが身にこたえたのか、義昭はあっさりと、これを放棄する決意をする。一つには、ごく近くに、二条城よりも堅固な城があったからである。

——山城、宇治の槇島城。

今日では幻の城になってしまったが、当時の世評も高かったし、義昭の眼には、難攻不落の名城のように思われた。

やがて七月三日、義昭は三千七百余の兵力で、この槇島城に立籠る。

——どうだ。信長、来るなら来てみろ。

義昭の意気は盛んであった。が、このときも、信長は、義昭の意表を衝いて、四日めにはもう

都に現われている。当時としては信じられないほどの速さだが、じつは、都の動静を嗅ぎつけて、中途の拠点の佐和山まで出かけて来ているのだ。しかも京都には信長に尻尾を振る公家がいた。吉田神社の神主の吉田兼和（のちの兼見）がそれで、義昭挙兵の報を聞くと、その日のうちに都を出発し、途中勢多で一泊、四日には信長のいる佐和山に駆けつけている。しかもこのときまでに、信長は、佐和山の港口、松原で琵琶湖を横断するための、足の早い大船を作らせていた。長さ三十間、幅七間、百梃櫓という今までにない大きさのものだったという。

「動いたか、そうか」

兼和の報告を聞くなり、信長は、総動員体制に移った。六日、風波を衝いてこの大船で佐和山を出発、途中坂本で一泊して、七日には入京した。二条城では、義昭の家臣三淵藤英が留守を守っていたが、またたくこれを降し、直ちに槇島に向った。いよいよ、本気で義昭と対決する構えを見せたのである。

こうなっては、義昭は手も足も出ない。戦いをやらせたら、大人と赤ン坊ほどの差が両者にはある。

「許してくれ」

今度は、全くの無条件降伏だった。

「二つになる吾子を、人質に出そう」

と義昭は言った。

「城も出よう」

つい数カ月前、信長の差し出した人質を昂然と拒否した面影はどこへやらである。かくて二十一日、義昭は槇島を出て、三好義継の河内若江城に移り、足利将軍家は終焉をつげる。

年号が天正と改元されたのは、その直後である。まさにその改元とともに、正真正銘の信長時代がやって来たといってもいい。

そして、おもしろいことだが、天正と改元された時点から、歴史の回転は、ひどく速くなる。信長の気性そのままに時間が動きだすのだ。そして、ひときわその速さに不安を感じていたのは、ほかならぬ、小谷城のお市なのであった。

速すぎる。

何もかもが、あまりに速すぎる。

いまのお市には、それが恐ろしい。未来が、大きな黒い口をあけて、ぱっくり自分たちを呑みこむ日が、ついそこまで来ているような気がする。このすさまじい時の流れに乗って、いよいよ、浅井の家の命運が定まる日が近づいて来たらしい。

信長が将軍義昭を追ったという知らせを、お市が聞いたのは、八月の始めだった。そのまま兄は岐阜へ戻った、と聞いたが、数日後には、もう兄の軍勢は、小谷城に近づいていた。

——何という速さか。

心中うろたえざるを得ない。

これまで何度も織田勢は小谷城下に攻めこんでいる。が、そのつど、浅井勢は激しくこれを撃

退した。北近江に一段高くそびえる小谷山は、ちっとやそっとの攻撃ではびくともしないのだ。戦さ上手の兄はそれを知りぬいている。だから、時々揺さぶりはかけるが、これ以上は無理、と見ると、さっと引揚げてゆく。

が、今度は違う。今度の攻撃は、ただごとではない。それは数や装備の問題ではなかった。なによりも、

——速さが違う。

という気がする。彼ら織田勢は、あたかも自分たちと全く違う時間の感覚で歩んでいるかのようであった。

浅井側も、もちろん、手を束ねて織田勢のなすにまかせていたのではない。

——いよいよ、来るか。

形勢は不利であったが、むしろ長政は、その中で、凛たる決意を固めたようだ。朝倉には急使が飛ばされた。残り少なになった味方には、度々、使がさしむけられた。

「退屈（油断のこと）無ク、御粉骨専一ニ候」

といった、鉄の連帯を確認する文書が、今も幾つか残っている。

たしかに属城の幾つかは攻落された。しかし、小谷は全くの裸城ではない。背後には大規模な城砦を構えた大嶽城が詰の城として控えているし、その真下には、小さいながら焼尾の堅塁がある。またその周辺には丁野城が、さらに北には山本、月ケ瀬の諸城が小谷城によりそうような形で連なっている。

このうち、大嶽、丁野には、去年の冬以来、朝倉側の斎藤民部や、平泉寺から派遣された玉泉坊、宝光院らが詰めている。それだけ浅井側が手薄になっている、ということでもあるが、長政は、

「あてにならぬ奴らは、かえって足手まといだ」

と言いきった。それでもなお、焼尾には浅見対馬、山本から月ケ瀬には、阿閉淡路（貞征）がいる。

「彼らのほかはいてもいなくても同じことよ」

しかも、今度は朝倉の動きも例になくすばやかった。なかなかみこしをあげなかった総帥、朝倉義景が、すでに七月十七日、早くも一乗谷の居館を後にしたという。

もっとも、このとき、義景の出陣が、なぜか甚だ意気あがらぬものだったことまでは、長政の耳には届いていない。どっちかというと戦国武将というより地方貴族の感のある義景は、今度の出陣がなにやら不本意げで、義景の母、広徳院は暇乞に来た息子と対面したとき、思わず涙を流してしまったという。

ともあれ朝倉勢は、江州柳ケ瀬まで進出して来た。と、陣中で、

「ここは、陣形、甚だよろしくない」

という意見が持上った。

「後は山、前は何の遮蔽物もない狭い平地。いったん信長勢に踏みこまれたら、身動きがつかなくなる」

すると、これに反対するものも現われた。

「合戦は陣形如何によるものではない。漢の高祖はたった二十八騎で出発しても、後に項羽の百万騎を破った。源頼朝は旗揚げの合戦に敗れたときはたった七騎になったが、逆に平家を滅ぼしたではないか」

人数が多ければ、必ず意見はまちまちになるし、ちょっとした変更もすぐには決められない。その上、物知りというのが口を入れて意見をかきまぜる。よほど肚のすわった大将の独裁でもないかぎり、小廻りがきかなくなる。どうやら朝倉勢は戦わないうちから、早くもその短所をさらけだしてしまった感じである。

一方の信長勢はそうした要領の悪い軍勢とは全く違った「時間」を歩いている。そして彼らは、長政らが息をひそめて立籠る、小谷城を無視して、その脇を通りぬけて、どんどん北進してしまった。

——いったい、どこまでゆくつもりか。

小谷の城兵は呆気にとられている。この先に進めば、山本城、月ケ瀬城が控えている。それに一撃を加えるというのだろうが、もしその間に、小谷の城兵が、背後から攻撃を加えたらどうなるのか。

——勝ちに驕って作戦を忘れたのか。

みすみす自分らに背後を見せて進む織田勢に、

——好機到来！

とばかり城兵は勇み立った。

ところが、である。

やがて、彼らを震駭させる情報が伝わって来る。

「阿閉淡路が寝返った」

「そして浅見対馬も……」

長政が最後に頼りにしていた江北の部将たちは、いともあっさりと、これまでの盟約を破棄してしまったのである。進撃を始める前に、阿閉淡路との間に、信長が密約を交していたことを彼らはこのときやっと知る。つまり信長軍は、阿閉淡路という呼び水に誘いこまれるように、一気に湖北に突走ったのだ。このときの作戦目標は小谷の城にあるのではなく、いかに速かに湖北まで到達し得るかということにあった。ここまで一気に突走ることによって、越前から出陣して来た朝倉勢と小谷城との連絡は断切られる。信長がこのとき布陣したのは小谷の北の山田山付近だった。かくて朝倉と浅井の間には、黒々とした線が引かれてしまったのだ。おかげで、せっかく出陣して来た朝倉勢は、空しく田部山、木之本あたりで足踏みしなければならなくなった。

浅井側はみごとに虚をつかれたのである。心から信頼しきっていた阿閉、浅見といった有力武将に裏切られたと知ったとき、お市は、さすがに長政の顔を見ることができなかった。

これほどあからさまな失点を、自分の前にさらけ出さなければならない夫に、言うべき言葉を持たなかったのだ。人一倍自尊心の強い、勝気な夫が、いかに苛立ち、怒りを爆発させるか……。信長の謀略、戦略の勘どころのよさと比較すると、その格差は、あまりにも歴然としている。

かつて肩を並べていたはずの信長との差を見せつけられる度ごとに、夫は屢々怒りをお市に向けた。そのことが辛いのではない。責めさいなまれることは覚悟している。が、いまや満身創痍となった浅井勢を背負って立たねばならぬ夫が、屈辱に身を震わせるのをみるのが辛かったのだ。

しかし、なぜかこのとき、長政は、日頃のように怒りを爆発させなかった。

「去る者は去るだけよ」

淡々とした口調でそう言い、瞳の色さえも変えなかった。その声を聞いたとき、お市の胸に、ふいに衝きあげてくるものがあった。

――お変りになった、この方は。

夫の内部には、あきらかに変化が起っている。彼はもう、今までの長政ではない。激しやすく苛立ちやすかった長政の姿は消え、別人のように冴え冴えとした男が、そこにはいる。

何がそうまで彼を変えてしまったのか。これは聞くまでもないことであった。そしてこの事は、お市自身の身にも、否応なしに迫って来るもののことを考えさせずにはおかなかった。

山田山まで進出して朝倉の進撃を阻んだ信長は、反転して焼尾から大嶽に向った。かねて前進基地としていた虎御前山は、

「信忠、そなたに預ける」

と、同行した長男信忠にまかせ、風雨を衝いて、みずからが先頭に立って大嶽に攻登った。この間に風雨はさらに募り、激しい雷鳴さえこれに混った。大嶽は小谷の背後にそびえる大城砦だ

が、ここに籠るのは朝倉方の斎藤民部以下五百に過ぎない。いわば、義景の入城に備えての留守居役だから、本隊との連絡を断たれては、何程の力もなかった。

——それ、行けっ。

——一揉みぞっ。

信長の叱咤をうけてひしひしと登って来る織田軍を見て、斎藤民部は、いさぎよく死を覚悟した。と、そのとき、

「斎藤どのっ、斎藤民部どのっ」

大声で呼びながら近づいて来る男がいる。

「おっ、あれは……」

たじろいだとき、稲妻が、思いがけない近さに、一人の男を浮上がらせた。兜の眉庇から滝のような雫をしたたらせながら大股に近づいた男は叫んだ。

「俺だ、前波吉継だっ」

かつて朝倉を裏切り、虎御前山を攻めると見せて、そのまま信長の陣営に走り込んでしまった前波吉継だった。

「お？　そなたはっ」

「間にあったな、やっと」

息をきらせて、そう言い、

「もういい、もういいぞ民部」

「何と」
「小勢ながら命を賭けての防ぎよう、あっぱれだと、殿は仰せられている」
「……」
「な、後は、この俺にまかせてくれ」
「と、申して――」
「いや、いいのだ、死ぬには及ばんよ、民部」
やっと吉継は微笑を見せた。
「それだけ働けば十分だ。城を明渡して降りるがいい。身辺の警固は俺が責任を持つ」
言われて、斎藤民部は、
「それほど言ってくれるなら」
降伏の覚悟をきめた。同様に丁野の砦を守っていた平泉寺の玉泉坊の所にも、織田勢の中から陣僧が派遣され、降伏を勧告した。
「今、降参すれば、御命はおろか、恩賞の御沙汰もあろう」
聞くなり守備兵は戦意を喪失し、城を明渡してしまった。
この間、義景は全く手も足も出なかった。もしこれが他の武将だったら、こうまで無気力ではなかったであろう。山田山の織田勢に攻撃をかけるとか、及ばぬまでも大嶽、丁野の味方への援軍派遣の努力をしていたであろうが、結局、義景は何もせず、二城が陥落して火の手があがるのを、あれよあれよと見守っていたのである。そして、

「もう、これ以上は進めぬ」

簡単に見切りをつけてしまった。こうなると、もう近江に滞陣している意味もない。そこへ、

「どうせの事なら自国内で力いっぱいのお働きを遊ばされては――」

臆病風にもったいぶった戦術論をまぶしつけて進言する者が現われた。義景は、渡りに船と、この策に従った。八月十三日の夜、かくて、朝倉の主力は戦いらしい戦いもしないうちに退却を開始する。と、あたかもそれを見透したかのように、

「追えっ」

信長の命令が飛んだ。佐久間、柴田、滝川、木下、丹羽――。ほとんど織田軍の総力が、黒い雪崩のように、朝倉勢の後を追った。越前への退き口はいくつか考えられるが、これも、信長は、一瞬のためらいもなく、

「刀根口から疋田へ行けっ」

と命じた。朝倉勢が、ひとまず敦賀の金ケ崎城を頼ってゆく事を彼は見透していたのである。

このあたりが「運」のついた者の強さであろう。

早くもその夜のうちに織田勢は退却する朝倉勢を捉えた。悽惨な殺戮が繰返される中で朝倉勢は潰滅、三千余の死骸を残した。義景は命からがら木ノ芽峠を越えて越前に入り、一乗谷の館に辿りつくが、ここにもやがて織田勢は近づいて来る。やむなく義景は一乗谷の館を焼いて大野に立退くが、すでに信長と一戦を交える気力もなく自刃して果てた。かくて百余年朝倉氏の本拠となった一乗谷の館は灰燼に帰するが、これが発掘復元されたのは戦後のことだ。すばらしい石組

を持つ庭が三つまでも発見され、我々は、都にひけをとらない朝倉氏の実力の程を、この眼で確かめられるようになったわけだが、それにしても、これだけの力を持ちながら戦うこともなく滅びていった姿は、運に見放された者の無気力さをさらけだしていて、何とも痛ましい。

義景の首級を得た信長は、八月二十六日、虎御前山に帰陣した。

いよいよ最後の決戦は近づいた。いや、すでに戦いの帰趨はきまっている、といってもいい。勝ちに乗じた織田勢に対して、手足をもがれた浅井勢が、勝利を得ることはまず不可能である。お市が否でも応でも、今までと全く違った局面に向きあわねばならないときは来たのである。

長政の瞳の色を見てしまって以来、お市も覚悟を定めている。いや、いつかはこうなると思っていたことが、いよいよ形をとって現われて来ただけのことなのだが、そうなってみて、お市は、むしろこの数年、

——もし、兄が滅んだら?……。

と、そのことをしきりに考えていたことに気がついた。兄が滅んだら、どんなに自分の気持が楽になるだろう、とさえ思った自分だった。

——そんなことを考えたのは、やはり、迫って来る事実から顔をそむけようとしていたことなのか?

が、いまはもう逃避は許されない。さしあたって考えねばならないのは、子供のことだ。こんなとき、女の子はまだいい。戦国の世の習いとして、女の子は、最終的には、非戦闘員としての扱いをうける。それも名もない庶民の娘なら凌辱をうけることもあるが、城主の娘とわかれば、

敵も手荒なことはしない。が問題は、こんな場合、男の子の命である。

——お兄さまに命乞いをしたら、聞いて下さるだろうか。

月の出の遅い八月下旬のある夜、庭に向って、とつおいつ考えていると、ふと、背後に人の気配がした。ふりかえると長政がそこにいた。

「何を見ている……」

とっさに返事をしかねていると、続いて尋ねた。

「何を考えている」

「は、はい……」

長政は微笑した。

「多分、いま俺の考えていることも同じかもしれぬ」

静かな口調であった。庭前の萩が露をふりこぼしたのか、かすかにそよぐ音がした。

訣　別

——眼前に深い海のひろがりがあり、今にも波のうねりに呑みこまれてしまいそうな孤島に、長政とたった二人でとり残されているような……。

天正元年（一五七三）八月二十七日の夜、二人で対しあっている間じゅう、お市はそんな気がしていた。

すでに兄、信長は越前の朝倉を倒して、虎御前山に戻ったらしい。本陣のあたりに松明らしい灯が行きかうのは、明日にも始まる総攻撃の打合わせをしているのだろうか。戦機はすでに熟してはいるものの、遠く明滅する灯の動きはむしろ緩慢で、幻のようにさえみえる。そして小谷城の二人を取巻いているのも、奇妙な真空に似た静かさであった。

お市は焦っている。語らねばならないことがいろいろあったからだ。というより、語らねばならない時期に来ているからだ。ひしと織田勢に周囲を取りまかれた今、二人きりになれる時間は、もうほとんど残されてはいないはずなのである。

お市の口は、しかし、重い。長政もまた、無言である。それはお互いに、口を開けば、二人の永遠の訣別について語らねばならないことを知っているからだ。

明日にも織田勢は総攻撃をかけてくるだろう。浅井勢は、これに対して、残された余力をふり絞ってぶつかるよりほかはないのである。しかも全く手足をもがれ、小谷山中に孤立したいま、勝敗の帰趨は、誰の眼にも明らかだった。

とすれば——。

戦いの前に残されているのは、お市がこの山を降りること。それこそ一切の感傷を排した戦国のルールなのである。

誤解のないように、この事を書いておきたい。ふつう政略結婚という形で嫁がされた女性は夫に殉じて死なねばならないように考えられている。これは後世の錯覚である。

当時にあっては、両者が決定的に対決しなければならないとき、妻は実家に戻ることになる。これが戦国の作法なのだ。

政略結婚と、単なる人質との微妙な違いはここにある。人質の場合は、一方が臣従のしるしとして親族を差出すのであって、受取る側との間に階層的な差がある。一方は支配し、一方はその前にひざまずいて、人身御供を差出すのだ。だからもし臣従した方が裏切れば、主人は人質を殺す権利がある。

が、政略結婚は、お互いの間に上下の差はない。信長は長政に屈伏してお市を差出したのではない。そのことは、尾張の小土豪にすぎなかった信長が、美濃一国の領主斎藤道三の娘を貰った

ことでもはっきりするだろう。政略結婚の場合には、実力の差はともかく、一応、お互いが同等のレベルにあるという了解のもとに行われるのだ。つまり現在のヨーロッパにおいて、国の違う王室の間で行われる結婚のようなものを考えたらいいかもしれない。

その意味で、戦国の大名の花嫁たちは、人質とは違う。その代り、いくら肌身を許しあおうとも、窮極的にはあくまでも実家の側の人間とみなされる。お市は浅井のお市ではなく、いつまでも織田のお市なのである。彼女たちは、いわば実家から派遣されたセックスを伴う女性外交官なのだ。そういえば、彼女たちは、現代の外交官が平和時には相手国との親善につとめ、対立関係に入ったときはスパイ活動に専念するのと似たような働きをしている。

今の常識から言えば、彼女たちはたしかに孤独だ。が、それに行きすぎた同情をしめすのは、決して歴史的な理解とはいえない。結婚が夫婦の合意に基づき、一つの単位、一つの原点とみなされるようになるのは近代社会がはじまってからのことである。

その代り、この孤独さとひきかえに、じつは戦国の花嫁たちは、嫁ぎ先に呑みこまれてしまわない独立性が保障されている。だから、お互いの間に戦争状態が起れば、実家側の人間として戻されるのが原則である。これも現代の外交官が、戦争が始まると、殺されることなく交換船に乗って引揚げてくるのとよく似ている。

このことを、現代人は忘れてしまっているが、じつはこうした例はかなり多い。

少し後になるが、荒木村重が信長に対して反旗を翻したとき、村重の息子に嫁いでいた明智光秀の娘は戦闘開始直前に帰されている。光秀は織田側の武将だったからだ。また、その光秀が本

能寺の変の後に秀吉に倒されたとき、細川忠興が、光秀の娘である妻のお玉を離婚し、光秀の旧領である味土野に送ったのも、光秀との関係を断ったことを形式としてしめしたものに他ならない。戦国大名といえば、妻の生殺与奪の権を握った暴君のように考えがちだが、彼らの間には、案外、騎士道的なルールが守られていたし、むしろ、それを守ることを、男の誇りとさえしていたのである。

——さあ、なまじ情にからんで鉾先を鈍らせるようなことは、お互いによそうじゃないか。身内がいると思えば、そちらも攻めにくかろう。俺も中に立って、女房の苦しむ顔を見たくはない。この通り、傷ひとつつけずに返すぞ。

いわば、そうした精神のさわやかさのあかしとして、夫は妻を実家に返すのだ。激情に任せて殺しでもしたら、それこそ男の恥なのである。

お市は、この夜、冴え冴えとした長政の瞳を見たとき、すでに夫が、そこまで決心をつけていることを感じとってしまっていた。

考えてみれば、六年間の短い結婚生活だった。両家の間が平和だったのは、はじめのほんの一、二年にしかすぎなかった。それからは、嫁いで来た身の孤独をいやというほど思い知らされた。勝気なお市にとって、その中で感情を鎮めて生きることは、どんなに苦しいことだったか……。

が、強いて胸の思いを押え、冷静な仮面をつけることを身につけたとき、むしろ夫は苛立ってお市を責めさいなんだ。とはいうものの、それからの二人の間に、憎しみだけしかなかったとい

えば嘘になるだろう。人間の心は、それほど単純にできてはいない。冷酷にお市を無視できないからこそ、夫は責めさいなむのだ。そして、責めさいなまれながらも、兄の信長が攻めてくれば、無意識に身構えてしまうお市は、その分だけ織田の人間ではなくなっているのかもしれない。それでいて、長政が侍女のお蘭を愛していると知れば不信の炎に身を焼かれもする。愛と不信のないまぜになった、このやりきれなさを味わうためには、六年の歳月は、決して短いものではなかった。

——もし、夫が、心から私を憎んでいたのだったら……。

お市はふと思う。

——どんなに心軽くこの城を出てゆけることだろう。

いま、しきたりどおり、城を出たとして、六年の歳月がお市のからだにしみこませたものは消えてなくなるものではないのである。が、事態はもうぬきさしならないところに来ている。夫の冴え冴えとした瞳は何よりもよく、そのことを物語っている。

そこには、お市を苦しませつづけた、あの苛立ちの影もなければ、怒りの色もない。その瞳を見たとき、お市の胸に、ふしぎな平安が訪れた。この静かさ、この豊かさ。

——これからもこんなふうにしていられるのだったら。

ふと、そう考えかけて、たちまち、その思いは打消された。

——これから？

いや、もうそんな時間はない。時間のないことが、夫の瞳からすべてを拭わせてしまっている

のだ。「今」という時間のすぐ隣りにあるのは「死」でしかない。いま、これまでのどんなときよりも身近にいる夫は、すでに「死」という、かぎりなく遠い世界に離れて行こうとしているのだった。

——心涼しい死を選びたい。

夫はそう思っている。最後まで死を恐れ、逃げまどった朝倉義景のような死にざまをさらすまい、と心に決めているのだ。

——もう何を言う必要もない。

お市は悟った。すべての別れの言葉は、今の二人にとっては空々しい。

——この方の瞳を私は見ている。そしてこの方は、それを知っている。

それでいいのだ。

ただ一つ、語りあうとすれば、それは子供のことである。

これも三人の娘のことは、きまっているといってもいい。当時、女の子は母親のもの、男の子は父親のものというしきたりがあったからだ。古く溯(さかのぼ)れば、鎌倉時代にできた「貞永式目(じょうえいしきもく)」に、奴隷たちの子分けの法として明文化されたのがはじまりだが、このころには、これが一般の男女の場合にも適用されていた。

六つになるお茶々。四つのお初。そして、二つのおごう。彼女たちは浅井の娘ではあるが、お市とともに城を出れば生命の安全が保証されることは確実である。問題は男の子の万福丸だ。ふつうなら彼は長政の許においてゆかねばならないのだが、お市は思いきってたずねてみた。

「万福丸も、連れてまいりましてよろしゅうございましょうか」
長政の瞳の色が、かすかに揺れた。
「私が、兄に、命をかけて頼みます」
「しかし」
長政は静かに言った。
「しきたりというものがある。俺の子を信長が許すとは思えぬ」
「でも、万福丸も、私の子じゃございませんか」
母の眼からみれば、お茶々も万福丸も、同じく乳房を含ませた子だ。それを男の子だからという理由で引離されるということが、お市には納得がゆかない。というよりお市自身の乳房が納得しない、といった方がいい。今まではそうしたしきたりの中で生き、それを当然のこととして来たのだが、自分自身が、ぬきさしならぬこの場に立たされたとき、それが何とも承伏できないものに思えて来た。なぜ、わが子を救えないのか？　かつてなぜに？　とものごとを問いつめてやまなかった幼い日の魂が、ぎりぎりの瞬間になって、突然、お市の中によみがえったのだ。
「万福丸も連れて行きとうございます」
あの子も私の子だ。命にかえても私が守ってやろう。それが母のつとめではないか……。
「それに……」
ふとお市は口ごもった。この際どうしても言っておかなければならないことがあった。それはもっと前に尋ねなければならなかったはずなのに、どうしても口に出せずにいたことである。い

まも、それを口にするには躊いがある。

——でも、もう時間がない。

時はいよいよ速く過ぎつつある。

「もう一つだけ、申しあげたいことがございます」

「何だ」

お市はじっと長政をみつめた。そのことを言いだすには勇気がいった。が、時が、お市に決意を促した。

「お蘭のことでございます」

「む……」

思わず視線を避けようとする長政の眼を、お市はひたと追った。もう余裕はない。思い違いをされては困るのだ。しかし言わねばならぬ。お市よりややおくれて、側室のお蘭も身ごもったことは知っている。とすればすでにその子は生まれているはずである。

「お蘭の子は……どうなりましたでしょう」

堅く結ばれていた長政の唇が、かすかに開いた。

「生れた」

「それはいつ？」

「二月ほど前に……男の子だった」

お市は膝を乗りだしていた。

「その子も、連れてまいりたいと存じます」
「な、なんと……」
「私に預からせて下さいませぬか」
唇をひきしめ、きっとお市は夫をみつめた。
――誤解はしてほしくない。
いや、もうそんな余裕はないのである。ぎりぎりの今になって、お市の中にあるのは母の思いだけだった。戦いは武士のならいとはいえ、何の罪咎もない子供まで犠牲にしてよいものか。
――今まで私はあなたの裏切りに苦しみました。でも……。
切れの長い眼をひたと夫の顔に向けて、お市は言葉短かに言った。
「お蘭とのお噂を伺ったとき、たしかにお恨みもいたしました。悩みもいたしました。でも、今は違います。母親としてのお蘭の思いは同じでございましょう。私もその嬰児を、万福丸とひとしくあなたさまの子と思えるようになりました。そして、いまはあなたさまの血のつながった幼い命を一つでも多く助けたいのでございます」
お市はいまや、いかに傷つこうとも、翅をひろげて雛鳥たちを守ろうとする母鳥であった。
「その嬰児に……何という名をおつけになりましたか？」
「万菊丸」
「まあ……」
万福丸の弟にふさわしい名ではないか。

「その子ども助けるように、私から兄のところへ使を出してもよろしゅうございましょうか？」

長政は腕を組んだまま、しばらく無言だったが、やがて、

「考えておこう」

ぽつりと言った。

「あの……ほんとにわかっていただけたのでございますね」

「うむ」

お市は必死だった。信じてもらえたのか、もらえなかったのか。訣別のときの近づいたいま、はじめて口にしたことに、何の嘘いつわりもないことを、夫はわかってくれたのだろうか。

「私は決して……」

そう言いかけたとたん、思いもかけない近さで、どっとどよめきが起った。

「殿っ、殿っ」

転るように駆けこんで来た武者が、長政の足許に手をつかえた。

「破られましたっ」

「何とっ」

「御本丸と京極丸の間を破って敵が――」

「騒ぐなっ」

長政は言うなり、太刀をひっ摑んで立ち上っていた。

静寂は一瞬のうちに破れた。

手痛い奇襲だった。

虎御前山の緩慢な灯の動きから、織田勢の総攻撃は早くとも明朝と思っていたのだが、これはいわば目くらましの作戦で、敵はひそやかに背後からしのび寄っていたのである。先鋒を命じられた木下藤吉郎の率いる一隊が虎御前とは別の方角から隠密裡に行動を開始したのだ。彼らは、小谷城の北、焼尾にいた。ここから裏街道を通って、ひそかに城下に近づき、道なき道をよじ登ろうとした。

もしそれだけだったら、堅塁を誇る小谷城がたやすく敵の侵入を許すはずはなかったのだが、このとき、搦手を守っていた三田村左衛門尉と小野木佐渡守が秀吉に内応して、ずるずると敵を城中に引入れてしまったのである。そうなったとき、守りに堅い小谷城の複雑な構造が、かえって裏目に出た。

小谷城は山の中腹あたりに東に向って大手門があり、ここを入ると、本丸にあたる広大な中丸、小丸がある。ここも何層かの出丸に左右をかこまれた堅固な砦だが、さらに小丸の裾がえぐれて、自然の空濠の体をなしている。しかもその背後、西北に向って一段高い台地が拡がり、ここが京極丸と呼ばれており、さらにその上部に山王丸が築かれている。が、下から攻上って来る敵からは、そんなに奥深くまで何層もの城砦があるようには決してみえない。しぜん本丸攻勢に総力をあげるわけだが、もし、本丸に突入して来ても、京極丸から鉄砲をあびせかけられればひとたま

りもない。そこへ山王丸の城兵がなだれこめばまさに守りは鉄壁のはずであった。

ところが、三田村、小野木に先導されて侵入して来た敵は、小丸の裾の空濠にどっとなだれこんだ。城は完全に分断されてしまったのである。しかも城攻めの常識に肩すかしをくわせて、秀吉は、本丸よりも京極丸攻撃を目指した。

京極丸にいるのは、浅井のいわば第二軍である。長政の父、久政が手勢を率いて籠っている。人生のほとんどをこの城で過した彼は、本丸の守りの堅さを信じて疑わなかった。

――俺が起つのは、よくよくのとき。

と油断をしていた。

そこへどっと秀吉の手勢は殴りこんでいったのである。

「あっ」

「うぬっ」

突きあい、殴りあい、最初からすさまじい肉弾戦になった。不意をつかれて、久政の手勢は浮足立つ。

「早く、御援兵をっ」

が、本丸の兵が繰出そうにも、京極丸との間は木下勢によって隔てられている。しかも京極丸にとりついた彼らは、早くも本丸めがけて鉄砲を打込んでいた。

「集まれえっ」

「出撃！」

一団となって具足を摺りあわせるようにひしめきあって飛び出していった京極丸の兵士もばたばたと倒れていった。手勢の少ない久政勢はみるみる孤立した。野獣じみた木下勢の咆哮が、京極丸を押しつつんだ。

「久政さま御自害――」

悲痛な知らせがもたらされたのは、翌朝のしらしらあけであった。

この間、お市はまんじりともせず本丸の局曲輪で子供たちと息をひそめていた。

「さ、誰もここから離れてはなりませぬ」

母鳥にできることは、一羽の雛鳥も残さず、自分の羽根の下にかくまうことだけであった。

「こわい、おかあさま」

四つのお初は、日ごろの陽気さに似ず、唇を震わせている。

「大丈夫、こわがらなくていいのですよ」

ふっくらした小さな手をとって膝に抱えこむようにした。

勝気なお茶々はお市の脇にきちんと坐っている。矢叫びの声と弾丸の音が怖いにはちがいないのだが、無理にも昂然と首をあげて、恐怖を押しかくそうとしているのは、いかにも彼女らしい。

やや離れた所に、万福丸はゆったりと坐っている。大柄な彼は一つ違いの姉のお茶々より肩幅も広く、すでに幼児というより、少年の俤をのぞかせている。その俤の中に、思いがけないくらい夫に似た眼差しを発見して、お市はぎょっとした。

――こんなにこの子はあの方に似ていたのだろうか。

もし夫と別れても、この子がそばにいたら……。ふいに胸をしめつけられて、お市はあえいだ。

——何としてもこの子は助けねばならない。

祈るような思いで眼を閉じた。眼裏で万福丸と夫の俤が重なりあい、嫁いで来たころの、さわやかな若武者の幻が明滅した。

子供ながら、さすがにまんじりともしないで一夜を明かした年上の三人とは違って、昨年生れたばかりのおごうは、かかの腕に抱かれて、すやすやと寝息をたてている。姉たちに比べてひどく見劣りする顔立ちが、それなりに哀れでいじらしい。お市はふと万菊丸のことを思った。彼もまた城内のどこかの隅で誰かの腕に抱かれているのだろうか？

それにしても、もうすべては遅すぎるのだろうか。ふいの敵襲にあって中断されてしまった夫との会話の先は、もう自分で答を出すよりほかはないのか。といって、独断で織田の陣営に交渉することはできない。すでに織田勢は館の近くまで押寄せて来ている。手をのばせば届くところに実家の軍勢の剣戟の響きを聞きながら、お市には、兄信長が手がかりもないほど遠くにいるように思われる。

そして夫も……。会話を中断させたまま、太刀を摑んで座を立った長政との間も、今はかぎりなく遠い。

気がつくと、まわりには、無気味な静寂が戻って来ていた。京極丸が陥落した後、敵はいったん攻撃を中止したらしい。重苦しい睨みあいの中で、時は刻々と過ぎてゆく。

と、そのとき、ひそやかな足音が部屋に近づいた。

「奥方さま」
戸が繰られ、見なれた近習の一人が具足姿でひざまずいていた。
「殿のお召しでございます」
「殿の？」
「はい」
「参りましょう」
廊に出たお市の後から彼は囁いた。
「織田の使が参っております」

落城

すでに月は落ち、夜は更けていた。

その日、搦手口を突破して小谷城になだれこんで来て、執拗な攻撃を見せた織田勢も、いまは沈黙を守っている。

そして、城の半分を攻めとられ、城主の父久政を失った小谷城にも寂として声はない。

織田の沈黙は、鋭い刃物を無言で投げだしたような、無気味な沈黙だった。小谷のそれは、半死のけものが、すでにうめき声さえたてられずにいるような、悽惨な沈黙だった。その二つの沈黙の接点を、いまお市は歩いてゆく。この対照的な二つの沈黙を包みこむ闇は深い。

夫からの使をうけて、本丸の広床へと急ぎながら、思わずお市は足をとめた。

——何とおそろしい闇の深さ！

日頃見なれた庭の石組のありかさえさだかではない。滅びゆく城に先立って、すでに庭も石も崩れはてて、永却の闇に呑みこまれてしまったというのか。そしてまた、自分のこれから先、歩

むべき道も、この深い闇の中以外ではないような気がする……。

本営にあてられている広床には、灯がともっていたが、人影はなかった。奥まった一角に屏風が引きまわされ、その中に夫はいるらしい。織田の使を迎えて、すでに人払いされているらしく、お市を案内して来た近習も、

「これにて」

言葉少なに言って会釈すると引返していった。屏風の中で、黙然と腕を組んでいた長政は、お市が近づくと眉をあげた。傍らには、赤尾美作、浅井石見といった生残りの老臣が数名並んでいる。長政の前にかしこまっているのは、織田方の使者だった。その横顔を見るなり、お市は、

「あ」

思わず声をあげてしまった。

「そなたは、不破河内――」

お市の輿入れの時に、輿脇について来た不破河内守光治がそこにいるではないか。

「お久しゅうございます」

不破光治の顔にも、複雑な翳があった。

「で、使の趣は？」

夫の顔を見上げたが、長政はしばらく無言であった。

思いのほかの近さで鈴虫が鳴いたのは、このときだ。戦いのさなか、踏みつけられもせず、草むらにひそんでいた彼らには、この無気味な静寂も、平生の静かさと何の異なるところもなかっ

たのであろう。しばらくその音に耳を傾けているかに見えた長政は、ややあって口を開いた。

「戦いをやめよう――と言って来た」

「まあ――」

思いがけない夫の言葉だった。

「戦いをやめる――と、兄が？」

「左様でございます」

不破光治が引取って答えた。

「もとはといえば、御両家は御姻戚。久政どののお裏切りこそ遺恨に思え、浅井のお家に対しては何の含むところもございませぬ」

だからこそ、京極丸の久政をまず攻め、彼を敗死させたのだ、という言い方を不破光治はした。

「これ以上の戦いは、信長の本意ではない、と殿はみずから仰せられました。浅井の御家中の勇武のほども、とくと拝見した。これにて鉾を収めんにはいかが？　と」

――そうだったのか……。

胸にあふれる思いを、お市はやっとこらえてうなずいた。余所目には短気で容赦のない男にみえる兄は、むしろ我慢強く寛容でさえあるのだ。そのことを、私は忘れていた、と思った。

頬に血の気がよみがえって来る思いで長政を見あげたそのとき、しかし、夫の視線は、静かにお市を逸れていった。腕を組み、半ば眼を閉じるようにして、ややあって長政は、ゆっくり言った。

「織田からの申し出は、いま河内が申した通りだ。しかし――」
言葉を切って眼を開くと、改めてお市にじっと視線を注いだ。
「俺は断わる」
「まあ、何でございますって」
「いまさら、さしのべられた手にすがるほど、俺は卑劣な男ではない」
「でも、兄は戦さはやめたいと……」
「そうだ、だから俺が戦いをやめさえすれば、事はおさまるかもしれぬ。が、誰の眼にも勝敗はあきらかだ。戦いの終った後、信長が俺をどうするか、河内の話を聞け」
「いや……」
不破光治は首を振った。
「決して、面目にかかわるようなことはお願いいたしません。小谷の城は、ひとまずお明渡しを願いますが、御妹婿として、いずれしかるべき御領地を――」
長政の頬に嗤いに似たものが走った。
「それにつられて城を出るほど、俺は甘くはないぞ」
それから、頬をひきしめ、ぴしりと言った。
「俺は、この城とともに命を終えるであろう、と信長に伝えよ」
他の何者にも口を挟ませないきびしい口調が、お市を沈黙させた。それは、
――お考え直し下さい。

という余地を与えないものであった。

鈴虫がまた身近でしのびやかに鳴くのを耳にしながら、お市は長い間うなだれていた。

余所目には、いま、さまざまの可能性が残されているように見えるのかもしれない。命を助けられて、近江の一郡の領主として生きる道、あるいは出家してその後の人生を余生として送る道……。じじつ戦国の武将の中で、そうした道を選びとった者は少なくない。

が、真の選択とは、あれこれの可能性の中から、迷いながら、そのどれかを手にすることではない。人間は生きはじめたとき、すでに一つの道を選びとっているはずだ——と長政は言おうとしているかのようだった。

——兄の言葉を伝えるよりも、この方は、そのことを私に確かめさせるべくお呼びになったのだ。

妻と夫の間でしか通じあえない、言葉にならない言葉で、長政は自分に語りかけているのだ、と思った。それが、いまお市には痛いほどわかる。また、長政も、お市がすべてを理解したことに、まさしく気づいている。が、これまでのいかなるときよりも深く理解しあえた、と思ったそのときは、二人にとっての別れのときだったのだ。

不破光治はいかにも残念そうだった。

「では、何とあってもお受入れにはならぬので？」

「もう遅い。ただ一つだけ、望みがある」

このお市と娘たちを、信長の許に返したい、と長政は言った。

「承りました。かくなる上は、やむを得ませぬ。わが殿にも、御異存はないと存じますが、立帰りましてその旨を言上、御意向を承ってふたたび参上いたします」

不破光治が足早に立去った後、二人はしばらく無言であった。やがて赤尾美作、浅井石見らも一礼して退くと、城内のこの一角を残して、闇はさらに濃密になった。

お市は、つと顔を上げた。吊り気味の勝気な眼を、ひたと長政に向けて言った。

「殿」

「何だ」

「御供はかないませぬか」

「何を申す」

驚いたように、長政はまじまじとお市をみつめた。

「御供をさせて下さいませ」

私が、いや、私だけが、あなたさまのすべてを知っております。その私のいのちこそ、あなたさまの人生に重ねあわされるべきもの、離れて生きることはむしろ不自然とはお思いになりませぬか……お市はそう叫びたかった。が、長政は首を振った。

「そなたには、そなたの進むべき道がある」

でも——と言いかけてお市は口をつぐんだ。長政の冴え冴えとした瞳の色に行きあたったからである。

——わかっている。

その瞳はそう言っていた。

——が、死を選ぶことは、むしろたやすい。俺とて、そなたをいとしむあまり返すのではない。生きのびることは、そなたにより苛酷な運命を強いることになるかもしれない。が、人間は、時として容易な道よりも、苛酷な道を選ばねばならぬものだ。な、そうではないか……。

冴え冴えとした長政の瞳は静かにそう言っていた。

——そうだ、生きなければならぬ。この方のこの眼差しを、娘や息子たちに語り伝えるためにも……。

お市の双の瞳からは、大きな涙の粒があふれていた。白磁のような頬をぬらし続けるそれをぬぐおうともせず、お市は長政の顔をみつめ続けた。

局曲輪に戻ったときは、すでに夜半を過ぎていた。さすがに子供たちは疲れて眠りこけている。その中で、勝気なお茶々だけは、両手を膝に端座していたが、お市の顔を見るなり、

「母上……」

さすがに子供らしい安堵の声をあげた。お市のいない間は、母代りに、あたりを見張っていなければ、とけなげに気を張っていたものと思われる。が、そのお茶々の声は、たちまち、いぶかしげな調子を帯び、

「万福丸は、ごいっしょではありませんの？」

お市の後を見やるようにした。

「え？　何ですって」
お市が異変に気づいたのはそのときである。手洗いにでも立っているのかと思った万福丸の身の上に、ただならぬことが起きたらしい。
「万福は、どうしたのです？」
「は、はい」
お市の顔色を見て、侍女のかのは、おろおろと答えた。
「半刻ほど前、父君、母君からのお召しだという使がまいりまして……」
「まあ……」
お市は絶句した。
「では、万福は、母君のお傍にはゆかなかったのですか？」
お茶々は、きっとお市を見上げた。
「ええ、それに、私たち、万福を呼んだ覚えもありませぬ」
「まあ、それでは――」
言うなり立ち上ろうとしたお茶々を、
「静かに」
お市は制した。
そうだったのか……。
なぜか万福丸のことについてぼかした言い方しかしなかった夫の言葉に、今になって思いあた

るものがあった。

——お茶々をはじめ、娘たちはそなたに任せるが、万福丸は渡しはせぬ。

それが夫の無言の答えだったのだ。娘は母のもの、息子は父のもの、とするしきたりは、当時一般的なものとなっている。が、お市はあえてその枠を踏みこえたいと思った。

——万福も、その異母弟である万菊も助けたい。兄に命乞いをしたい。

夫にそうも言ってみた。が、あのとき彼はその申し出に答えなかったのは、すでに心に深く期すところがあったからなのだ。多分お蘭の産んだ万菊丸も、いまは闇にまぎれ、側近に守られて、小谷の城を下ったに違いない。

——あんなに心を通わせあったはずの夫婦でも、やはりそうなのか。

「待ちなさい。騒いではなりませぬ」

言いながら、お市は立ち上っていた。

「どこへおいでになります」

かのの声がすがりついてきた。

「もう一度、御本営へ」

——聞きにゆかねばならぬ。それも自分が。

と、お市は思った。不破光治に会わせておいて、その間に万福丸をひそかにつれ出すというのが、長政の真意だったのかどうか……小袖の褄を掻取って、お市は小走りに廊下を走った。

少しの間に広床の空気は一変していた。大篝が軒近くに焚き上げられ、具足をつけた武者に満

ちていた。それまで城のどこにひそんでいたかと思われるほどの群れ方である。しかも、無秩序に右往左往しているかのように見える彼らが、ある一定の流れを作って、広床を流れ動いていることに、お市は気がついた。が、あえてお市は、その流れを突切ろうとした。

「や、奥方さまだぞ」

流れに小さな混乱とどよめきが起った。

「どけ、奥方さまをお通し申せ」

「寄れ、道を開けろ」

波動のように口伝てが渡っていって、道が開けた。

「殿に早く申し上げろ」

が、その囁きより先に、長政はお市の姿を認めた。

「支度はととのったか」

「いえ、あの――」

その口を開かせず、長政は床の柱を指さした。

「俺の葬いをしている」

「え？」

指さす所に、

天英宗清大居士

と書かれた紙がはりつけられてあった。息を呑んで立ちつくすお市に彼は言った。

「あれが俺の戒名よ」

先刻から流れていた家臣の列は、その前に香を手向けるためのものであった。

「そなたも手向けてくれ、香を」

お市は言うべき言葉を持たなかった。すでに夫は幽明境を異にするところにあった。

——その夫に、万福丸をわが手の及ばぬところにかくした事を問いつめることができようか……。

それをいまさらなじったり、行方をたずねることは死者にものを言うに等しい。夫は、それが万福丸や万菊丸のために最上の道と信じて、二人を小谷城から逃れさせたのだ。よくも悪くも、すでに賽は投げられたのである。

黙々と焼香の列は続いている。

織田信長からの使者がふたたび訪れたのは、暁近くになってからだった。

不破光治に連れ立ってやって来たのは、藤掛三河守永勝。彼もまたお市の輿入れに随って来た織田家の宿老の一人である。

「お久しゅうござりまする」

あのときに比べてより皺の深くなった顔に、彼は人のよさそうな微笑をうかべていた。戦陣の間にあることを忘れさせるような、ゆとりのあるその微笑が、お市のそれまでのこわばりきった気持をいくらかやわらげてくれた。

輿入れについて来て、またこれを引取りにくる。しかもその後に待ちうけているのは、夫たる浅井長政の敗死しかない……。が、藤掛永勝はそのことにまるきりふれず、

「お輿は四つととのえてまいりました」

まるで、かりそめの旅に出るような、さりげない言い方をした。

「一番は先払いの女房衆、二番は奥方さま、三番はお茶々さまとお初さまがお乗り下さいますよう。四番はかのどのが、おごうさまを抱きまいらせて……」

四台の輿というのは、あるいは万福丸を迎えとる心算で用意したのかもしれない。が、永勝は、万福丸がいないことに全く気づかぬように、おだやかな口調でそれだけ言った。

そこへ、お茶々がお初の手をとって現われた。

「おお」

永勝は目を細めた。

「お茶々さまにお初さまでいらせられますか。お美しい姫君でいらっしゃいますな」

お茶々は、永勝の微笑を、にこりともせずにみつめ返し、お初は姉の蔭にかくれようとした。その二人を抱きとらんばかりに腕をさしだし、感に耐えたように彼は言った。

「奥方さまのお小さいころによく似ておられます」

そのうち、かのが、おごうを抱いて現われた。

「さて、そろそろ、よろしゅうございますかな」

やおら、藤掛永勝は立上った。まるでこれから名所の花や月を見物にゆこうとしているような

趣であった。

その声が、お市の心をしだいになごませていった。

——そうだ、この声だった。輿脇について、何くれとなく気を使ってくれたあの声が、自分をゆったり包んでくれている。

二十七日の夜以来、ほとんど一昼夜、一睡もしていないお市は、その声に、からだのすべてを預けたかった。

ふと錯覚が脳裏をよぎる。

——あのとき、私は、藤掛三河を供に輿に乗っていた。ひょっとすると、今まで、私はその輿に乗りつづけていたのではないか？　そう思わせるほど、この六年足らずの歳月は、夢のように過ぎてしまった。

行く先は等勝寺実宰庵。信長の本営となっている虎御前山の東の平地にある。当時寺院は中立地帯として、軍兵の足を踏みいれることのできないところとなっていたから、非戦闘員と認定されたお市たちの身柄をあずけるには、最も適した所だった。中でも、この寺が選ばれたのは、浅井家ゆかりの女性がここの庵主をしていたからである。

「さ、参りましょうか」

藤掛永勝が促したとき、なぜか、お茶々はその場を動こうとしなかった。

「お茶々さま、こう渡らせませ」

さしのべられた永勝の手を激しく拒んで、お茶々はかぶりをふった。

「父君の所へ行ってからでなくてはいや」
「え、何と」
「御挨拶がしたい」
六つの童女とも思えないりんとした響きのこもった声であった。
「これはしたり。さて、何としましょうぞ」
永勝はなだめるように言った。
「父君は只今御評定中でございますゆえ」
さすがにいささか苦しげだった。永勝としては父と子に別れの対面をさせることは気が重い。幼い子にとってそれは印象が強烈すぎるからだ。さりげなく輿に乗せて連れだしてしまうのは、そのときの処置としては薄情のようにみえるが、後になってみればかえってその方がいい。たださりげなく生きることを信条として、地味に世の中を歩いて来た男の、それは独特の哲学のようなものであった。
永勝は、お市に問いかけるような眼付をした。
——奥方さまからよしなに……。
おだやかにそう頼みこむ瞳の色を見て、お市は肯いた。
「さ、お茶々、輿へお乗り。もう、ゆるりとしているわけにはゆきませぬ」
お茶々はまだ不服そうである。
「御挨拶は御遠慮しましょう。が、この輿が動いてゆけば、必ず父君のお目には止ります。父君

は必ず見送って下さいます」
「じゃあ、母君」
やっとお茶々は妥協案を出した。
「簾はあげたままでよろしいですわね」
そうすれば、父の姿を見ることはできる、というのである。
やがて輿は動きだした。お茶々の乗った輿だけは、簾をはね上げている。本丸の広床の傍を通りぬけたとき、お市は、黒い具足に身をかためた長政らしい人影が、じっとこちらをみつめているのを見たような気がした。
輿は、本丸から総門に到る間に群れている兵の間をすりぬけていった。
「何だ」
「何の輿だ」
見知らぬ武士につきそわれて城を出ようとする輿を、軍兵たちはとげとげしく咎めた。決戦を控えて、彼らは殺気だっている。
「此の期に及んで城ぬけは許さぬぞ」
「そうだそうだ」
罵声が輿を取巻くごとに、
「控えられい」
藤掛永勝は錆びのある声で叱咤した。

「城主、備前守どの御内室および姫君方、これより実幸庵にお移り遊ばされる」

今までのおだやかさとはうって変った毅然たる声音を、お市は輿にもたれて聞いた。永勝の気魄に押されて、軍兵のざわめきは、またたく間に静まった。

輿にもたれたお市は、今までの疲れが体じゅうにあふれる思いであった。六年間の小谷の暮しの中で、常によろい続けて来た堅い鉄甲のようなものが、ぼろぼろに朽ちてからだから剝がれてゆく。

夫から引裂かれてゆく悲しみと、この奇妙な安堵感とが交錯し、一人の女をひきちぎる、辛うじて自分がばらばらにならずにいるのは、藤掛永勝の声が守ってくれているからである。

——もういい、すべてを放りだして死んでしまいたい。

そうなったら、どんなに楽だろう。なげやりに、そう思ったそのとき、かすかな囁きを、お市は耳にしたような気がした。

「生きてみなければわかりませぬ」

ああ、聞きなれたその声は……。

錯覚だったのかもしれない。が、その瞬間、お市は、まごうかたなき、その声を聞いた、と思った。

——お義姉さま。

久しく遠ざかっていた兄嫁——信長の妻の濃姫の、おっとりとした呟きだった。蝮といわれた斎藤道三の娘として生れ、信長に嫁ぎ、やがて道三の非業の死にあい、故郷をも失った義姉——。

その悲境の中で、彼女はさらりとこう言ったのである。

父を亡き者にした義兄の義竜やその子竜興が、夫の信長によって滅ぼされ、皮肉にも占領軍の大将の妻として故国に乗りこむことになった義姉は、いつも心静かにその宿命を受取って来た。

——そうなのだ。生きてみなければわからないのだ。今はくたくたに疲れているけれども、与えられた生命を大事にしよう。

このとき、輿脇で、藤掛永勝の声がした。

「御内室さま」

「はい」

「実宰庵に到着つかまつりましてございます」

すでに永勝の声音はいつものそれに戻っていた。

輿を降りると、藍色の暁がしのびよっていた。草も木も、庵の建物も、みずからの色を鮮明にするには程遠く、すべては大海の底のような藍の単色の中に浸りながらも、徐々に形だけは浮きあがらせて来る、ある不可思議さを秘めた時間が始まろうとしていた。

「お足もとにお気をつけ下さりませ」

いたわりをこめて永勝は言った。歩みはじめた足の先に、ぼうっとかすかに白い草むらのようなものがみえた。

「白萩でございますかな」

足をとめて永勝は言った。

「このようにして、梅の盛りをごらんに入れたことがございますな」
輿入れの折の垂井の宿のことであろう。
「あれは夕暮の庭の白梅でございましたが」
微笑んでいるらしい永勝の表情はさだかでない。が、足許の萩の白さだけは、それと知られるほど、あたりは明け近くなっているのであった。
「どうやら霧が深いようでございます」
小谷の山のありかを探しもとめているお市を察してか、永勝はさりげなく言った。

陽が上りはじめたとき、小谷山の前後の攻防戦が始まった。夜陰にまぎれ、信長はみずから占領したばかりの京極丸に乗りこんでいた。
「撃て！」
至近距離から砲先を揃えての一斉攻撃が始まった。と同時に、けものじみた喚声とともに、大手へ攻撃軍の本隊が押しよせた。
「何っ、くそっ」
「うぬっ」
浅井方も最初から肉弾戦を覚悟しての、激突ぶりであった。しかし、
——今日を限り。
と覚悟を定めた浅井勢は、最初から気魄が違った。織田軍が揉みに揉み、押しては突き、引い

ては突きしても、遂にその日、浅井勢を屈伏させることはできなかった。

「執念の鬼だな」

さすがの信長も舌を巻いた。

小谷の山じたいが火を噴き、怨念の炎で信長勢を焼き殺そうとしているかのようであった。

――必ず勝つ。何のこれしき。

戦略上では勝利は明らかなのに、それがいっこう現実のものにならないことに信長はじれた。

――敗けるとわかっていながら、こんなに本気で手向ってくる奴があるか。

みるみる増えてくる死傷者を前に、信長は不機嫌になった。こんな効率の悪い戦いはない。

――阿呆な奴だ、長政も。

傷ついた虎より始末が悪い、と思った。とうとう、戦さ上手の信長勢も何ほども戦況を進展させることはできなかったのである。

とはいうものの、浅井側の出血はより大きかった。死、それのみをみつめて戦って来たとはいえ、残る手勢は二、三百。大勢はすでに明らかである。

翌九月一日、意を決した長政は言った。

「俺についてこい。いいか、死ぬのだ」

長政みずから白刃を馬上にふりかざし、大手門を押開いて敵陣に躍り込んだ。戦国の武将多しといっても、これだけ陣頭指揮に徹し、最後まで勇敢に戦った城主は珍しいであろう。朝倉はぶざまな逃亡を重ね、精根つきはてて自害した。それに比べて、長政の戦いぶりは、壮烈の一語に

尽きた。

あるいは、長政の不幸は彼がいささか強すぎたことにあったのかもしれない。このとき彼は斬って斬って斬りまくり、敵陣に斃れるつもりだったが、どういうわけか、ほとんどかすり傷も負わなかった。が、気がついてみたとき、従うものは十数人になっていた。

しかも、この間、京極丸を占領した織田の手勢の柴田、木下らの一隊が、手薄になった本丸におめき叫んで侵入して来ていた。長政は帰るべき本拠さえも失ってしまったのである。そこで彼は本丸から一段低い所に構えられた、赤尾美作守の館に入り、ここで自害して、二十九歳の生涯を終える。これを長政の作戦の拙劣さのように言うのは誤りだ。彼はもう本丸には帰らないつもりで斬り死の道を選んだのだ。それが幸か不幸か敵の陣中に屍をさらすことができずに、戻って自害したまでのことなのである。

かくて難攻不落を誇った小谷城は遂に陥ちた。その知らせを、藤掛永勝を通じて、お市は実宰庵の一室で聞いた。

「浅井石見、赤尾美作は生虜(いけどり)の上、斬られましたそうな」

報告に肯きながら、お市はふと、あの広間の一角で、夫の後に控えていた二人の顔を思いうかべるのだった。

――それにしても、いま、ここで自分が生きているということは、いったい何なのか。そして……。

自然に、思いは万福丸の行方に行きついてしまう。

——あの子は無事なのか。どこにどうしているのか。

が、それを問うことは許されない。おそらく探索は執拗に続けられているだろうし、捕えられれば、そこに待っているのは悽惨な運命でしかない。うかつに口はきけないのである。

お市は藤掛永勝に対してさえも、かつてのように心は開けないことに気づきはじめている。城をぬけたあの夜、心身の疲労から、そのやさしいいたわりに酔ったのは、かりそめのことでしかなかったのだ。かつての鎧(よろい)はぼろぼろに砕け落ちたものの、彼女は、また織田の家にあって、新しい鎧を用意しなければならないのかもしれなかった。

薄濃（はくだみ）

浅井長政が自決し、小谷城が完全に沈黙したその日から、江北の秋は急に深まった。空の碧さが俄かに冷たさを増したのだ。今しがたまで繰りひろげられた血みどろな戦いとは何のかかわりもない、とでも言いたげに澄み渡った空は、戦いに敗れたものにとっては非情すぎた。

とりわけ、実宰庵に籠るお市には、蒼空（あおぞら）も風のそよぎも、すべてが嫌わしかった。

――何も見ないで過したい。ひたすらわが心の裡（うち）にのみ眼を向けて……。

敗者の妻から勝利者の家族の一員へという環境の激変に対応するには、いましばらくの時間が必要だった。しかし、周囲は、それだけの余裕をお市に与えなかった。

「虎御前山にて、殿がお待ちでございます」

一夜明けたとき、庵の庭前の白萩を掻きわけるようにして姿を現わした藤掛永勝は、そう言ったのである。

心が重かった。が、いつまでもこうしてはいられない。お市は自分の体をひきずるようにして

輿に乗った。続いてお茶々とお初が一つの輿に、最後の輿にかのがおごうを抱いて、という具合に、城を脱けて来たときと同じような形で、一同は虎御前山の信長の本陣に運ばれた。

戦後の殺気を残している虎御前山の信長の本陣近くで輿を降りたとき、お市の眼に、ぬけるような蒼空が映った。その蒼空に突刺さるような形で小谷山がひどく不機嫌に聳えていた。長政の死も、浅井の敗北も、そしてお市が命長らえてここにあることも、——それらのすべてが気にいらない、といっているようだった。

思わずお市は顔を伏せた。

そんな彼女を、信長は、きわめて無造作に迎えた。

「疲れてはおらぬか。どこか痛むところはないか」

ちょっとした旅から帰った者に言葉をかけるような言い方をした。六年間の歳月をわざと無視したようなその態度が、自分に対するいたわりなのだとわかっていながら、すなおにそれについてゆけない。

——私はまだ浅井側から完全に織田側へ移りきっていない。

ほんのひとまたぎのようで、橋を渡りきることはなかなかむずかしかった。

「茶々でございます」

娘をひきあわせるとき、思わず声が堅くなったのは、わざと自分と浅井をつなぐ絆を兄に確認させようという気持が動いていたからかもしれない。

「いい眼をしている。そちの子供の頃にそっくりだ」

信長はお茶々をまじまじとみつめてそう言った。

「次がお初。こちらがおごうでございます」

一々信長はうなずく。その眼差しが、ちらと流れて来た瞬間、お市は急いで眼を逸らせた。兄の瞳の中にある、かすかな問いかけを感じたからである。つとめてさりげなく、屈託なげにうなずきながらも、その瞳が、

——もう一人は？　万福丸は？

と言っているように思えたのは、気のせいだろうか。とっさに眼の隅で、

——存じませぬ。

軽く応じたお市に気づかぬ兄ではない筈である。今は早く席を起つべきだった。これ以上顔をあわせていることは危険である。すべてが終ったかに見えて、浅井と織田の戦いはまだ続いている。とりわけ、お市にとっては戦いは決して終ったわけではないのである。その意味で織田の陣営は彼女にとって最終的な休息の場ではあり得なかった。

とはいうものの、お市自身、万福丸の行方を知っているわけではない。

——どの道をどう通って逃れたのか。

いま、お市の気がかりは、それだった。

——お蘭の産んだ万菊丸は、一緒に逃げたのだろうか。

——供には誰がついていったのか。

小谷城から南は織田勢に押えられているから逃げるとすれば北へ向って走るよりほかはないだ

ろう。とすれば、いずれにしても峠道を越えねばならぬ。が、越前の朝倉の滅びた今、兄の手は北の方へも伸びていると見なければならない——。

あれこれ思いをめぐらしていると、人が近づくのにも気づかないときがある。とりわけ、眼をあげて、庭先に藤掛永勝の姿を見出したときなど、お市は、危うく叫び声をあげそうになる。

——あっ！

彼に、胸の裡を気取られなかったか……思わずどぎまぎして、頬を押えたりしてしまうのだが、こんなとき、永勝は、

「お障りもなく御過しでいらっしゃいますな」

さりげなく言う。実直な彼は、日に一回、必ず見廻りに来る。

「御不自由のことは何なりと仰せられますように。すべて三河の計らいにまかせる、と殿も仰せられておられます」

主君と自分の双方のいたわりをこめた、あたたかい言い方であった。

「有難う。さしあたって、何も不自由はありませぬ」

お市が答えると、永勝はやっと少しくつろいだ表情になって、菊の蕾のふくらんだこととか、朝夕の霧の深くなったことなどを話題にして、やがて去ってゆく。が、老練な彼が、お市の胸に去来するものに全く気づかないでいるとは思えなかった。

数日後、同じように訪れて来た永勝は、

「時雨れてまいりましたな」

鈍色に垂れこめた空を仰ぐようにして言った。
「この分では、今年の紅葉は早うございましょう」
それから、つと縁にいるお市を見上げて言った。
「木村喜内之介という男を御存じでいらっしゃいますか」
「木村？」
とっさに心当りが思いうかばなかったし、永勝の問いかけの意味もはかりかねた。
「さあ……」
かぶりを振ると永勝は軽くうなずいた。
「浅井の家中では、ひとかどの侍でありましたそうな」
と言われてもはっきり顔が浮かばなかった。
「名前は聞いたことがありますが……」
「備前守（長政）殿の御信任は厚かったとか承っております」
「その、木村が、どうかしたのですか」
「切腹あるいは打首の中に混っておりません。生虜になりましたものに確かめさせましたので、これは間違いはないと思われますが――」
「それで？……」
永勝は、ためらいがちに言葉を切った。
「若狭に所縁のある男だとも聞いております。おおかた、つてを求めて逃れたのではないかと存

じますが――」

言いさした三河は、ふと頬を翳らせ、それから、意を決したように、お市をまともに見た。

「おそらく、万福丸さまのお供を仕ったものと思われます」

館ごと大地がぐらりと揺れるような衝撃に、お市は必死で耐えた。

――ここで、倒れてはならぬ。

気力をふり絞って体を支え、唇をひき結び、じっと永勝の顔を見すえた。

永勝のその言葉は、残酷な宣言だったのか、それとも、お市の身辺に探りを入れるための罠だったのか。ともあれ、このことはお市に、彼女をとりまく織田勢の間には、なお越えがたい溝のあることを痛いほどに感じさせた。

万福丸の周辺に、それだけ探索の手が伸びていることは胸の潰れる思いであったが、彼の行方を知り得たことは、お市に一縷の望みを抱かせるものでもあった。朝倉を降したことによって、若狭は信長の版図に入ったとはいうものの、征服してから日はまだ浅い。それから西の但馬、出雲にはまだ信長の手は及んでいないから、うまくそこまでまぎれこんでしまえば、彼を捕えることはまず不可能であろう。

――そこで、一年、二年、三年と月日が経てば、世の中も変って来るし、兄の万福丸に対する気持もなごんで来るだろう。その間に自分が時間をかけて説得すれば、命を救うことはできるかもしれない。

今はただ時間が欲しかった。小さい命を守るのは、刀でもなく槍でもなく、時間なのだ。

――どうぞつかまりませぬように……。

お市は必死で祈った。万福丸を奉じて逃げている木村なにがしという男の顔も思い浮かばないのが頼りなく不安だったが、夫が、これと選んで万福丸をまかせたからには、腕も智略もたけた男に違いない。

――吾子をよろしく頼みます！

せめてその声がその男に届いたら……と、思わずにはいられなかった。

信長の本陣に、ふたたびお市が呼びだされたのは、その翌日である。

輿を降りたとたん、ある慌しげな雰囲気が彼女を押しつつんだ。戦いの終った直後の、殺気だったざわめきとは違った、はずみのついた気合が、走り廻る雑兵たちの足音にも感じられた。

「来たか」

幕舎の中に信長は突立っていて、

「陣払いをする」

前置きなしにそう言った。例の手早さで、戦後処理は、すでに済ましてしまったのである。

「ついては」

信長は早口につけ加えた。

「そなたと娘たちは、なるべく早く岐阜へ戻れ。ただし、岐阜はそなたにとっては馴染みが薄い。勝手の知れた清洲に住んだ方が気楽と思うがどうか」

「有難うございます」

お市が浅井に嫁ぐとき、岐阜では、ちょうど城造りが行われていた。美濃斎藤氏の居城だったこの城に移るにあたって、信長は徹底的な改築を行ったのだが、城造りに追われてごった返す岐阜の町で、柴田権六に出会った日のことを、なぜかお市はよく覚えている。しかし、織田の本拠とはいえ、馴染みの薄い岐阜へ住むより、なつかしい清洲へ戻った方が、何といっても気持が落着く。そこまで気を配ってくれる兄には、やはり感謝しなくてはならない。

さらに信長は言った。

「ただし、清洲も今は人少なだ。暮しに不便があってはならぬ。小谷で召使った女たちも、望みにまかせて連れてゆけ」

「重ね重ねの御心づかい恐れ入ります。で、兄さまも、岐阜へ？」

「いや、俺は後からゆく。しのこしたこともあるのでな」

次の計画に心を奪われているのか、彼は、早くもそそくさと歩きだし、通りかかった小者に性急に何かを命じたりした。

信長の行動は、いつも風のように素早い。そのことを思えば、今度の陣払いもさほど不思議ではないのだが、お市は、今日の兄が、話の間じゅう視線をあわせるのを避けていることにこだわった。

――この前は、私が兄さまの視線を避けた。なのに、今日は兄さまが……。

それはなぜか。一方的に喋って、一刻も早く会話を終らせたがっているように見えたのは、性

来のせっかちのためだけだろうか。

——でなければ……。

行きつく思いは一つである。

——万福丸について触れるのを避けておいでなのでは？

何やら胸騒ぎがした。

——兄さま……。

思わず後を追いかけようとしたが、すでに右往左往する雑兵に遮られて、信長の姿はどこにも見えなかった。

どうやら、母としてのお市の予感は、はずれていなかったようである。彼女は知らされなかったが、すでにこのとき、万福丸は、木下藤吉郎の手勢によって捉えられていたのである。信長がお市に急遽旅立ちを命じたのも、じつはこのためだった。お市が清洲に入ったころ、捕われた少年は、関ケ原で串刺しにされた上で、磔にされた。そのことがお市の耳に入ったのは、それから暫く経ってからのことだ。信長は、お市にこの残酷劇を直視させないために出発を急がせたのであろう。それは兄としてのせめてもの思いやりだったのかもしれない。

万福丸虐殺を、しかし信長の冷酷さのなせるわざと一概に決めてしまうわけにはゆかない。いってみれば、それは織田・浅井両家の確執の線上にある事件であり、浅井は滅びたものの、まだ両者の戦いは、完全に終ってはいなかったのだ、といった方がいい。つまり、それほど、両者の

間の感情のしこりは深かったのである。

信長は長政の裏切りを心の底から憎んでいた。かりにも義兄弟の縁を結んだ長政が、朝倉攻めの際、後から挟み撃ちにしようとしたことは許せなかった。

浅井側にも言い分はある。浅井と朝倉のよしみの長さを思えば、その縁を断ち切ることは不可能だったのだ。もっとも、一説にはお市の輿入れに際し、浅井は、「朝倉を独断で攻めない」という条件を信長に申し入れていた、としているが、ここまでいうのはいささか不自然である。戦国の常識からしても、もしそんな約束を義理固く守っていたら、とうてい勝利者にはなれないし、はじめから信長の呑める条件ではないのである。

むしろこれは、浅井が織田を裏切った後で、

「約束を裏切ったのは織田の方だ」

というための、こじつけにすぎない。第一、織田の朝倉攻めに際し、表面同盟者の立場にありながら、ひそかにその背後を襲おうとしたのは、あきらかに裏切りである。そしてそれだけに、信長の浅井一族に対する怒りは深かったのだ。

小谷が落城したとき、信長は毛利輝元と小早川隆景に対し、いち早く浅井父子の首を挙げたことを通報し、

「これ（首をさす）また洛中洛外の見物のため上せ遣し候」

と書いている。彼はまず何よりも浅井父子の首を洛中洛外に誇示して、思いを晴らしたかったからなのだ。さらに続けて彼は、

「それというのも、甲斐の武田、越前の朝倉をそそのかしたのも彼らだし、足利義昭の敵対行動もこれに基づいている。一方ならぬ遺恨を存じていたところ、此の度彼らの首を得たことは、この上のないよろこびである」

と高らかに凱歌を奏している。

しかし、長政もしぶとかった。

——たしかに俺は負けた。しかし子供までは渡さぬぞ。獲れるものなら獲ってみよ。

いってみれば、死の世界から、彼は信長に挑戦したのである。信長には、その不敵なせせら笑いが聞えたはずだ。彼としてみれば、生虜った万福丸を串刺しにしても、なおあきたらない気持でいたかもしれない。

が、お市にとって、わが手でこの世に送り出したかけ替えのない生命を、兄の手によってひねりつぶされたことは疑うべくもない事実である。いかに兄としての思いやりがあろうとも、そこに戦国武将としての彼の鉄壁の意志と、浅井一族に対する限りない憎悪を感じないわけにはゆかない。

お市の耳には、死してなお挑み続けようとする夫の声が聞える。そこに複雑なお市自身の愛憎の思いがからみつく。小谷の城においてもお市は孤独だったが、こうして迎えとられた織田の家も、昔の織田の家ではない。とりわけ、万福丸を兄の手で虐殺されたいまは……。

やがてお市の耳に、小谷の城が織田方の手によって取りこわされた、という話が届いた。噂をもたらしたのは、浅井の遺臣の忘れ形見のちかという少女である。信長のすすめによって清洲に

つれて来た浅井ゆかりの女たちの一人で、いまはおごうの遊び相手をつとめている彼女は言った。
「お城は跡かたもなくなりましたそうな。何でもお館の建物はすべて今浜に運ばれ、新しいお城が築かれるとか。今浜は名前も長浜と変りました由」
その長浜に縁者がいて、そこからの便りに聞いた、とちかは言った。
「そのお城には誰方が入るのか」
「羽柴筑前守とか――」
「羽柴？……聞きなれぬ名ですこと」
「木下藤吉郎というお方が、城持ちになられて改名なさったそうにございます」
ちかの言葉が終らないうち、お市はさっと席を起った。
「奥方さま……」
かのの声にもふりむかず、奥の居間に入ると、ぴたりと障子を閉ざした。急いで後を追って来る足音に、お市は言った。
「入ってはなりませぬ」
――誰にも顔を見られてはならぬ。
両の手で乳房を押えた。
――藤吉郎めが、浅井に代って城主になる。あの、万福丸を捉えた藤吉郎めが……。
もちろん木下藤吉郎の近江攻略の功績はこれだけではなかったろう。が、万福丸を死に導いた彼を後釜に据えたことに、お市は、あきらかに兄の浅井に対する憎悪を見た。そしてその憎悪を

あおるかのように、忠義顔をして走り廻っている藤吉郎が憎かった。

——あの男は、これみよがしに、小谷城をずたずたに切りさき、館を土足で踏みにじっているのだろう。

お市が浅井に嫁ぐころ、一介の小者でしかなかった彼が、一躍城持ちになって鼻うごめかしている様子が眼に浮かぶようだ。彼が万福丸の命を犠牲にして城主にのしあがったことだけは一生忘れまい、とお市は思った。

それにしても、万福丸の非業の最期を思い出すごとに頭に浮かぶのは、万菊丸のことだった。その日以来、その消息は杳として知れなかったが、初冬のある日、

「旅商人の噂でございますが……」

かいのがそっと囁いてくれた。

「あの日、万菊丸さまは中島なにがしと小川なにがしとか申す侍に連れられて、福田寺にお入りになられましたそうな」

その寺の名を聞いた瞬間、お市は思わず、

「では、助かったのですね」

と言ってしまった。同時に、

——なるほど。さすがは、長政どの。

夫の才覚に舌を巻く思いがした。福田寺は小谷城から程近い琵琶湖畔の寺だ。寺が当時の治外法権だったという以上に、福田寺が屈強の隠れ家であるのは、この寺が本願寺系の近江十カ寺中

でも有力な反信長の拠点の一つだったからである。度重なる敗戦によって非力になった浅井一族を陰に陽に支えて来たのは、本願寺勢力であり、浅井が滅亡した後も、彼らは信長に降伏はしていない。本願寺が信長に屈するのは、ずっと後のことである。

しかも彼らは全国に組織網を持つ。万菊丸はそのルートに乗って、おそらく安全な所へ連れ去られてしまったに違いない。こうなれば、信長の力をもってしても、彼を奪いとることは不可能だ。

——どうだ、信長、思い知ったか。

こう叫ぶ夫の地底からの哄笑を、お市は聞く思いがした。それと同時に、

——これが二人の子供の運命の岐れ路なのだ。

と思わざるを得なかった。信長の妹である自分の産んだ万福丸では、とうてい福田寺は受入れてくれなかったろう。お蘭の子だからこそ、彼らは万菊丸を預かったのである。

「何でも、お蘭どのは実家に逃れた後、病みついて亡くなられたとか申しますが……」

というかの囁きを、お市は遙か遠くのもののように聞いた。万福丸が死に自分が残り、お蘭が死んで万菊丸が残る——これも運命というものなのか……。

その翌年の正月、信長の居城、岐阜では賑やかな新年の宴が行われた。勝利の年の賀宴は、活気にみち、盃が幾度となく一座を廻った。新参の他国衆が退出し、馬廻り——すなわち親衛隊だけの水入らずの宴席になったとき、異様な飾りものが床に据えられた。薄濃にした朝倉義景、浅井久政、長政の首がそれである。これを肴に、その前で人々は盃を酌み交したという。

薄濃とは、頭蓋骨に漆を塗り、さらに金で彩色したものである。都で彼らの首を晒した信長は、これを岐阜でも誇示したかったのだ。ひどい残酷趣味のように見えるが、晒し首の延長と思えば納得がゆく。これを単なるしゃれこうべにせず、金を塗ったところが彼の「戦いの美意識（？）」かもしれない。

それを清洲で聞いたとき、もうお市は心を動かさなかった。

――長政どののしゃれこうべは、まだ笑い続けているかもしれませぬ。

お市は口の中で呟いた。彼女の耳には信長の憎悪の叫びと、長政の死後の哄笑が二つながら聞えて来る。

清洲往来

尾張の野には冬晴れが続いている。紺玻璢のようなその色が、お市にはひどく冷たいものにみえる。さんさんとふりそそぐ陽も、なぜか自分のまわりでは温みを失っているかのように思われる。

物心ついて以来、住みなれたこの清洲城なのに、そして考えてみれば、ここを留守にしたのは、たった六年ほどのことなのに、お市には、まるきりなじみのない場所に連れて来られてしまったような気がする。

それに比べて、子供たちは、またたくまに、この新しい環境になじんでしまった。

「まあ、このお城では冬でも雪はふらないのね」

冬じゅう鈍色の空の下で雪に閉ざされて過して来たお茶々には、それがまず珍しいらしい。お初は、城の中をあちこち歩き廻っては、奇妙な宝探しに余念がない。

「お母さま、このお手毬は、お母さまのですって？」

色糸かがりの古ぼけた毬を納戸の隅からひっぱりだして来た。
「そうそう……」
お市にも見覚えのある手毬である。
「お初ぐらいのときに、京みやげだといって、どなたかからいただいたのですよ」
「ふうん、お母さま、これで遊んだの？」
「そうですとも」
「ふうん」
母親にも、自分と同じような少女時代があった、ということが、どうにもふしぎでならないらしい。毬を手始めに、お初は、お市の遊んだ雛道具やら、手習いの硯やらを、次から次へと引っ張り出して来る。しかし、お初が、
「これは何？　これは？」
しきりに話しかけても、お市はぼんやりしていて、返事をしないことがある。
「ね、お母さま！　お母さまったら」
お初のかん高い声に気づいて、やっと我にかえるらしい。
「はい、はい……」
「どうなさったの？　お母さま……」
長女のお茶々は、ふしんそうにその大きな瞳をじっと母に向けた。
「いいえ、何でもありませぬ」

強いて微笑をうかべたが、正直いって子供たちの相手になるのもわずらわしかった。清洲の城もまた、お市にとって心の安まる所ではなかったからである。

小谷城にあって、お市はひとり余所者だった。その中で弱味を見せまい、と肩肘張って生きて来た。が、織田一族に迎えとられたいまでも、まだお市は余所者である自分を感じざるを得ない。婚家と実家の間で戦いが開かれたとき、女が実家に引取られるのは、このころの定めではあるものの、いったん引取られてしまえば、婚家で染められた色がさらりとぬけて、実家の色に戻れるというものでないことを、お市は思わないわけにはいかなかった。

ときにはお市を苦しめ、さいなみ続けた長政が、むしろなつかしく思い出されるのは、別れをつげた日の彼が、あまりに凛々しかったせいだろうか。あどけないお茶々、お初、おごうたちを見るにつけても、ふと、お市はそこに夫の面影を重ねあわせてしまうのだ。

が、頑是ない子供たちは、心の痛手をすぐ忘れてしまうのか、屈託のない笑声を城いっぱいに響かせている時の方が多い。

「お母さま、お母さまったら」

お初の賑やかな声が高くなりすぎると、

「お初、少し静かになさい」

お市は小声でたしなめる。それは自分の心をかき乱されないためでもあるが、一つには、すでに夫に死なれて清洲に戻って来ている姉のお犬のためでもあった。

尾張大野の佐治家に嫁いだお犬は、さきに一向一揆との戦いで夫が戦死した後、信長にひきと

られて清洲へ戻って来た。お犬は夫との間に与九郎という一児をもうけていたが、お茶々と同じ年のその少年は佐治家において来ている。

男の子は男親のもの——というこれも掟に従ってのことであったが、やはりお市としては、わが子を置いて来た姉の心を思うと、気を遣わずにはいられない。

もっとも、当のお犬は、ここに姉妹で住んでいたときと、ほとんど変らない。清洲にお市たちが着いたときも、

「道中御苦労でありました」

ゆったりとそう言い、まるで旅から帰った人間でも迎えるように肯き、

「よいお子ですこと」

ゆるやかにお茶々たちの髪を撫でた。大きな瞳、ぽってりとした唇、造作がすべて大ぶりで、牡丹のように華やかな顔立ちは、夫を失った今も全く変ってはいない。

——佐治の義兄上は、織田家のために戦って死なれた。おひとり身になられても、だから姉さまには、迷いがおありにならないのかもしれない……。

兄と夫が敵味方に分れて戦うという、なま身を引裂かれるような苦しみを味わった自分と、この姉とは、清洲の城の住み心地も違うのかもしれなかった。

お茶々やお初は、この伯母にすぐ馴れた。お犬は手先が器用で、お茶々たちのために、小袖の残り布などで雛人形の衣裳を何の苦もなく縫いあげてしまう。小さいくせにおしゃれ好きのお初は、伯母の手管から出て来る小切れに眼を輝かせ、それが、またたく間に人形の帯や小袖に変る

のを、まるで魔術でも見るように、うっとりと眺めている。

そのお初が、お市たち母娘の中では、いちばん世の噂に通じていた。

「岐阜の伯父さまは、近く安土に新しいお城をお作りになるんですって」

誰も知らない話をお市たちに披露したのは、おおかた、お犬の侍女たちの話を聞きかじって来たのであろう。信長が敵を制すると直ちにその本拠に進出するのは、彼の方針であり、予想しないわけではなかったが、それが安土ときめられたことに、お市は複雑な思いを持った。

――やっぱり……。

安土は六角氏の居城だった観音寺城に程近い。都と東海、東山、北陸を結ぶ交通の要地である。選ばれるのは当然でもあったが、それが小谷ではなかったことにほっともした。自分と夫の思い出の地に兄が君臨することは耐えられないからだ。

もっとも、すでに小谷の城は破壊されて、造作や石のたぐいは、羽柴秀吉の長浜城に運びこまれたはずだから、当初から信長は小谷に本拠を据える気はなかったのだろう。

が、それであったとしても、それなりにお市の胸は痛む。住む人とてない小谷城が荒廃の姿をさらすのを余所目に、それまで観音寺城の付属の地でしかなかった安土に壮大な城が築かれると思うだけで、敗北者の妻の心の中には凄然たる風が吹きぬけるのである。

信長が安土築城を正式に発表したのは、天正四年（一五七六）正月のことである。それまでに彼は家康とともに、信玄の跡を継いだ甲斐の武田勝頼と長篠で戦い、これを破っている。いよい

よ信長は天下人として乗り出したかに見えるが、彼をとりまく情勢は、しかし、それほど甘くも華やかでもなかった。

たしかに彼は近江を制した。越前の一向一揆が起ったのを機に越前に出兵し、一味の首魁を斬っている。信長の先鋒の羽柴秀吉、明智光秀らは加賀に進攻し、版図はいよいよ拡大した。が、信長がこの方面に進出すれば、おそるべき相手との遭遇は必至である。

その相手とは？　上杉謙信だ。信長は武田の勢力を牽制するべく、これまでかなり謙信に気を遣い、珍しく下手に出て御機嫌を伺う形をとっている。が、北陸路における信長の活躍を、謙信が快く思うはずはなく、天下一の雷名を持つこの武将との対決は、いずれ避けられないであろう。

この恐るべき強敵に対して、信長は柴田勝家を越前に入れてこれに当たらせることにした。

――権六は実直だ。粘りが強い。

部将中最も北国型と見たのである。信長は越前八郡を勝家に、大野郡を金森長近と原政茂に与え、かつ越前府中には、不破光治、佐々成政、前田利家をおき、今立、南条の二郡を割当てた。彼らは勝家の協力者であるとともに、勝家の動きを監視する目付役でもある。このとき信長は勝家に対し、かなり厳重な行政規則を交付している。これというのも、いずれ怒濤のごとく来襲するであろう上杉謙信の大兵団に備えて、急遽織田領としての体制を確立する必要があったからである。

が、もう一つ信長には恐るべき敵があった。各地に蜂起する一向一揆がそれだ。この執拗な抵抗集団との間の腕ずくの死闘は終ることなく繰返されたが、天正二年、信長はやっと長島の一揆

だけはねじり伏せることができた。

しかし、その宗本家である石山本願寺は依然として健在である。信長が長島を沈黙させ、越前に進出すると、本願寺の総帥光佐は、信長と和睦したが、これは一種の時間稼ぎにすぎなかった。果せるかな、信長が安土へ移転をはじめたころ、顕如はふたたび石山で兵をあげる。このときはすでに光佐は信長に逐われた前将軍義昭と連絡をとり、義昭を介して、中国筋の大実力者・毛利家との連繋を深める一方、越前の上杉謙信とも同盟を結んで、信長を包みこむ態勢をととのえていた。

包囲網はいよいよ強固になった。目前の敵、浅井・朝倉を降したものの、信長は、ますます強力な敵を向うにまわさなければならなかったのだ。

そんな中にあっての城造りである。わが世の春を謳う勝利のモニュメントとしてではなく、何が何でも、天下第一の強者であると、形の上で宣言してしまおうという、壮烈な宣伝政策でもあった。

安土城の規模の大きさ、装飾の華麗さは、清洲のお市たちの耳にも伝わってきた。お茶々やお初はどこで聞いてくるのか、口々に新しい噂をお市の許に運んで来る。

「お天守は七重なんですって」

「一番上はお座敷も金ずくめですってよ」

「いいえ、柱は黒漆よ」

「あら、みんな金だって聞いたわ」

「いいえ、黒漆の所もあるの」
言い争いをしながら小さな口は忙しく動く。
「ね、お母さま、見にゆきたいわ」
「行っちゃいけない？」
膝にもたれて顔を仰ぐ幼い姉妹に、お市は静かに微笑する。
「ええ、お招きがあったら、いらっしゃい」
「お母さまは？」
「さあ……」
浅井に輿入れする時と同じ道を通って近江に行く気には、とてもなれなかった。
と、それから間もなく、信長の息子で、この清洲のあたりを預かる信雄（のぶかつ）を通じて、
「城造りを見に来い」
という信長の内意がお犬やお市母子に伝えられた。娘たちが飛びあがって喜んだのはいうまでもない。
「いや、まだ出来上っているわけではないのですが」
父に似合わず鈍重な感じのする信雄は、もの言いも半ば口の中にくぐもって不明瞭である。そんな従兄を捉えて、姉妹は、
「ね、ね、お天守は？」
「みんな金ずくめ？」

口々に尋ねる。

「いや、まだ、お天守はでき上ってない」

ぼそりとした答は、幼い彼女たちをいささかがっかりさせたが、

「でも、いいわ。嬉しい。伺いましょうよ、お母さま」

お茶々は声をはずませる。

「ええ、でも、私はやめておきましょう」

お茶々はつと顔を曇らせた。

「まあ、なぜ」

「気分がすぐれませぬ。お犬伯母さまにつれていっていただきなさい」

結局、お犬が、お茶々とお初を連れて、城を見て来るということになった。大喜びで清洲を発った姉妹は、数日後帰ってくるなり、先を争って母に報告した。

「大きな石をはめた石垣がずっと続いてるの」

「ね、お母さま、黒坊主がいましたよ。バテレン坊主が連れて来たんですって。ほんとにまっ黒なのよ」

宣教師オルガンチノの連れて来た黒人が、ひどくお初には珍しかったらしい。

二人の面倒を見てもらった礼を言おうと、お犬の部屋を訪ねると、

「散らかっていますが……」

例によって、おっとりとお犬はお市を招じ入れた。言葉どおり、部屋じゅうには、あでやかな

小袖や織物が拡げられてあった。
「まあ、おみごとですこと」
ぬいとり、金箔押し、大柄の絞り……。安土みやげであることは一目で知れた。信長好みを反映してか、この一、二年の間に、世の中の衣裳の柄は、これまでになく華麗かつ斬新になっている。
「お気に入ったのがあったらおとり下さい」
おだやかな口調で言う。
「ありがとうございます。でも、これは兄さまから、姉さまへのお引出ものでございましょう」
お犬はさらりと言った。
「嫁入り支度なのだそうです」
「え？」
「お市どの」
他人事のように、ほのぼのと微笑した。
「また輿入れすることになりました」

お犬が再婚する——。
そう聞かされても、お市は俄かには信じられなかった。再婚するという事実よりも、再婚すると告げたお犬のことが、である。

若くして逝った夫の思い出を振り棄てても悔いないのか。佐治家に残して来た一人息子の与九郎といよいよ遠く隔ってしまうことを何とも思わないのか。

いや、それよりも、織田家の女として、他家へ嫁いでからの気遣いに、お市は身も心も疲れはてた。この先、兄がもう一度どこかへ嫁げといっても、もう金輪際いやだ。このまま三人の娘と、ひっそり清洲に籠っていたい。今のお市は、極端な人間嫌いになっている。そのお市の眼から見ると、お犬の生き方は、むしろ不可解でさえある。

——姉さまは、私のように、婚家と実家の板ばさみになっての御苦労はしておられない。

そういえば、佐治家に嫁いでいた間の数年間は、お犬の面貌に何一つ翳を落していないように思われる。

——それに比べて、私は……。

ちっともお変りになられぬ、と周囲は言ってくれる。が、お市自身は気づいているのだ。眼もきつくなったし、少女のころの、恐いもの知らずの明るさは消えてしまった。人の顔色を読み、言葉を選ぶ習性が、お市に慎重さを与えた代り、その性格に深い翳を落している。

が、お犬は違う。おっとりとした性格は昔のお犬そのままだ。今度お犬の嫁ぐ相手は、細川昭元——。足利幕府の重臣、細川家の流れを継ぐ名門の嫡子である。ときに三十二歳。長い間足利義昭に従い、一時は義昭のために信長と戦ったこともあるが、時勢の非と義昭の器のほどを見ぬいて投降した。義昭が信長に公然と戦いを挑んだとき、その拠点となった槇島城の攻防にあたって手柄を樹てた。将軍が有名無実の存在となってしまった現在、ある意味で名門の伝統を受けつ

ぐのは彼だといってもいい。信長は彼に丹波の桑田郡、舟井郡を与えて手厚く遇しているが、ここにお犬を嫁がせることの政治的効果は絶大である。

――それに、姉さまのお美しさならば……。

その美貌と貫禄を以てすれば、この名門との組合せにも決してひけはとらない。たしかに彼女には、将軍の御台所になってもふしぎではないような人間の大きさがある。

お市は、改めて姉の顔を見直す思いだった。ただ兄のいうなりに黙々と佐治家に嫁ぎ、またふたたび細川昭元の妻になろうとするこのひとは、一見、無意志の全く弱々しい存在のように見えて、その実、妹の自分などより、ずっと強い人間なのかもしれない。

――喜怒哀楽をどこかに預けてしまったような姉さまは、これからどんな運を摑んでゆかれるのか。

その前途をみつめるのが、なにか空恐ろしい思いさえするのであった。

安土の城が完成したのは、お犬が細川昭元に嫁いだ後である。そのころ、信長の三男の信孝が、ぶらりと清洲にやって来た。彼は信長が伊勢を版図に入れたとき、その地の豪族、神戸具隆の養子になり、神戸姓を名乗っている。このときすでに信長は岐阜城を信忠に譲っているから、勢・尾・濃三国を三人の息子の管理にまかせた形になっている。

「やあ、叔母上、お変りありませんか」

まだ二十歳を二つ三つ越えたばかりの信孝は、信雄と違って、もの言いも歯切れがいいし、明るくきびきびしている。

「久しぶりに御機嫌伺いにまいりました」
ひょいと頭を下げると、傍らの娘たちを眺めて、
「大きくなったなあ、お前たち」
大げさに驚いてみせた。人なつこそうな笑顔に、早速お初は飛びついた。
「ね、ね、安土のお城はできたの？」
「ああ、できたよ。今度見においで」
「お天守は？」
「うん、七重もあるぞ」
「あの黒坊主は？」
「ああ、元気だとも。あいつ、身のこなしが軽くてね。走るのが早いんだよ」
しばらく相手をしてから、娘たちが退ってしまうと、
「叔母上、ちょっとお耳に入れておきたいことがありまして」
口許に薄い笑いをにじませて言った。
「なんですの？」
「近いうち、お徳がこの城に伺います。一晩とめてやって下さい」
お徳――。
なつかしい名を聞くものだと思った。
――あの子がたった九つで、徳川家に輿入れしたのは、いつだったか。

日時ははっきり覚えていないが、

「叔母さま、お別れ申しあげます」

少女とは思えない、きっぱりした口調でそういい、骨の細い指を揃えて挨拶した彼女の顔は今もはっきり覚えている。一人他国へ嫁ぐ心細さなど微塵もなくて、涙ひとつみせなかったあの幼い花嫁のその後の消息を、お市は全く聞いてなかったが、

「また、どうして、お徳がここへ」

と問うと、信孝は、今度は、はっきりにやりとした。

「おもしろいことになりました」

その笑顔の底に、冷淡さと軽薄さの入りまじったものがゆらめいているのを感じて、お市は、はっとした。

この信孝という青年は人なつこくて明朗で、一番父親似である。勇気もあるし、決断力もある。が、信長のそれが、外面とはおよそ正反対の忍耐強さ、慎重さを秘めての行動力なのに比して、彼の場合には、とかく軽薄さがつきまとう。彼のおかれた状況が、父の青年時代とは全く違ったものであるための、苦労知らずのなせるわざと言ってしまえばそれまでだが、そこに、お市は神経を逆撫でされるようなものを感じるのだ。

「お徳は、なぜ来るのですか」

嫁いだ女が、実家に戻って来る、というのはただごとではない。

「徳川家と何かあったのですか」

あからさまに信孝は答えず、
「まあ、お徳の口からお聞き下さい」
またお市の神経を逆撫でするような笑い方を信孝はした。
お市はしばらく口を閉じてから、ぽつりと言った。
「お徳が徳川に嫁いで何年になりましたでしょう」
「十二、三年でございましょうか」
「子供は？」
「娘が二人おります」
いったいお徳の身に何が起ったのか。それに答えずに信孝が帰った後、しばらくしてから、現実に、お徳が清洲に姿を現わした。
「まあ、お徳……」
言うなり、お市は絶句した。
全く別人かと思うほどに彼女は面変りしている。
ただ少女が大人になった、というだけではない。吊り気味の瞳は苛立ちを含み、頬はこけ、髪はそそけ立っている。
左右に居並ぶ侍女には挨拶ひとつ返さず、足早に奥に通ると、お徳ははじめて口を開いた。
「叔母さま、お聞き下さい……」

覇星殞つ

窓の外には、春の陽ざしがあふれている。その光を斜めにうけた姪のお徳の顔を、お市は、いま、まじまじとみつめている。

正直いって、口もきけない、というところだった。今しがたお徳の口から告げられた事実に対する衝撃はあまりにも大きすぎた。

二十二のお徳は、寡婦となって、実家の岐阜城に戻るところだった。しかもそれは尋常な経緯からではなかった。夫である岡崎城主信康――徳川家康の長男は、非業の死を遂げたのである。

そのことについては、お徳は、

「腹を切りましたのは去年の九月のことでございます」

平然とした口調でそれだけ言った。

「まあ……それは」

それ以上に応える言葉がなかった。半年近く、この清洲で、お市は徳川家で起った事件を知ら

されずにいたのである。

——たしかに、世捨て人のような私たちだけれど……。

甥の信孝の意味ありげな言葉に思いあたったそのとき、お徳は、せきを切ったように語りはじめた。

「叔母さま、この十三年、私は針の筵に坐る毎日でございました。生きた心地もなく、心の安まるときとてなく……。徳川という家は、ほんとうにおそろしいところでございます」

お徳が信康に嫁いだのは九歳のときである。

「まことに——」

お徳は口を歪めた。

「嫁ぐということがあのようなこととは知らず、私は輿に乗ってしまったのでございます」

相手の信康も同じ年の九歳だったから、形ばかりの祝言はあげたものの、お互い、ほんの遊び友達でしかなかった。

「が、そのときから、恐ろしい人の眼が私の傍には光っていたのです」

その人とは？

家康の正妻、築山殿——。信康の生母である。

「鬼です。あの女は——」

言い棄てたとき、お徳の眼はきらりと光った。

「まるで箸のあげおろしから歩きかたまで、二六時中つきまとって文句をつけるのです。いえ、

私も嫁ぐとき、父から、舅君、姑君の言いつけをよく守れ、と申されました。そなたは、織田と徳川の大事な架け橋だ、とも言われました。私だって子供ですもの、知らないことが多うございます。できるだけ素直に、言うことを聞こうと思いました。でも、あの人は私のすることに全部文句をつけるのです。それもあの人の言われた通りにしても気に入らないのです」

喋りはじめたお徳の舌は、もうとどまりようがなかった。十三年間、こらえにこらえて来た事を、一度にぶちまけてしまわずにはいられないとでもいうように、眼の色までも変ってしまっている。

「私はじっとがまんしました。そういうことをとやかく言うのは負けることだと思ったからです」

勝気なお徳らしい言い分であった。

「でも、そのうち気がついたのです。あの女は、私がいることが憎いのです。どうしたら嫌気がさして出てゆくか、これでもか、とばかり意地悪を続けるのです」

なぜなら、築山殿は今川一族の娘である。家康がまだ今川家の人質となっているころ、義元のお声がかりで結婚した。

「だから、あの女は、舅君のことさえ見下しているのです。私のおかげで、やっと今川の親族なみの顔ができるようになったのだ、って……」

たしかに、結婚当時はそれも事実だった。家康は彼女と結婚することによって、今川傘下の部将として生命と地位の安全を保証されたようなものだったから……。

ところが、それからまもなく、事態が急変した。例の桶狭間の合戦で、信長が今川義元を倒し、以後、急激に今川家は没落の一途を辿る。

が、築山殿の胸の中には昔の夢がある。誇りも捨てきれない。そこへ、家康が、憎むべき今川の敵、織田との縁を結ぼうと言いだしたのだから、釈然とするはずがなかった。たしかに、彼女は、お徳が来る前から、この小雀をいじめていじめぬいてやろう、と手ぐすねひいて待ちかまえていたのである。いってみれば、お徳は、わざわざ築山殿という鷹の餌食になるべく、籠の中に投げこまれたようなものだった。

「まあ、それは大変なことでしたね」

やっとそれだけ言ったお市の上に、たちまちお徳は言葉を押しかぶせて来た。

「それだけじゃないのですの、叔母さま。姑君の御難題だけなら、我慢もいたしますわ。それより、どうにもやりきれなかったのは、信康のことなのです。あのひとは、まったく私の辛さをわかってくれないのです」

少女がたった一人、他人の家に来て苦労をしている。その心細さを思ったら、蔭に廻って慰めてくれてもいいではないか。男だったら、理不尽な母の言いがかりを、少しはなだめてくれてもいいではないか……。

「それを、あの人は、逃げてしまうのです。ほんとに、私はひとりぼっちでした」

やっと年頃が来て、事実上の夫婦になったとき、すでに二人の間には何の愛情も育たなくなってしまった。だからお徳は全く愛というものなしに、二人の間の子をみごもったのだった。

しかも悪いことに生れたのは娘だった。続けてもう一人娘が生れると、築山殿は嘲笑するように言った。

「どうやら、徳川家のおあとつぎの産めぬ体のようですね」

織田の娘になど徳川家のあとつぎは産ませるものか、という底意地の悪い挑戦のようにもとれる言葉であった。

生地獄ともいえるすさまじい女どうしの戦いの話を聞いているうちに、お市はだんだん息苦しくなって来た。

「でも……、あなたのお父さまさえ、言っておられたそうではありませんか。信康どのは立派な男だ。ゆくゆくは海道一の弓取りになろうと……」

「ほ、ほ、ほ……」

ほとんど声を立てずにお徳は笑った。

「戦さは強いのかもしれませぬ。でもそれはそれだけのことです。人間は外見と内側とは違うものです。信康は、私より、母親が大事なのです」

妻は敗北したのだ。が、そう語った後で、お徳は昂然と首をあげて、誇らしげに言った。

「でも、私、とうとうみつけてしまったのです」

「なにを？」

「動かぬ証拠を。あの女は淫乱で、妙な医者と密通していました。そしてその医者というのが、何と甲斐の武田の間者だったのです」

お徳が築山殿と信康の罪状、十二カ条を父の信長に通報したことから事態は急転した。当時信長は、まだ石山本願寺との死闘を繰返していた。石山本願寺の背後には強力な毛利勢が控えている。一方、それにつけこんで松永久秀や荒木村重が反旗をひるがえす、という状態で、何とかこれは鎮圧したものの、京畿、西国の情勢は一刻も目が離せない状態にあった。

幸い越後の上杉謙信は急死して、北陸路の恐怖は薄らいだが、油断がならないのは甲斐の武田である。長篠の合戦において、信長は、新兵器の鉄砲によって武田勝頼を敗北させたものの、信玄以来培って来た勢力は隠然たるものがあり、事実、本願寺はしきりに彼らをそそのかして信長の背後を脅かそうとしていた。

この恐るべき武田に対して楯の役目をしてくれているのが徳川家康だ。家康は終始変らず信長の味方になってはいるが、もしこの家康が武田とよしみを結ぶようなことがあれば、信長は腹背に敵をうけることになる。お徳の情報に信長がいきりたったのも、このためである。

――其許は織田を裏切る気か！

きびしい詰問をうけて、家康は築山殿と信康を自殺させるよりほかはなくなる。彼にしてみれば、いささか御荷物だった築山殿はともかく、信康だけは助けたかったようだが、信長は遂にこれを許さなかった。折から本願寺勢に敗色が見えて来たこともあって、

――さあ、旗幟を鮮明にしろ！

と高飛車に出たのである。それを裏打ちしているのが、お徳の夫と姑への憎悪だったことは、

お市にも容易に想像できた。

語りおえたとき、

「もう、すべては終りました」

さばさばとしたようにお徳はいった。

「で、娘御たちは？……」

お市が遠慮がちにたずねたときも、

「おいてまいりました」

答える顔に躊いの色はなかった。十三年間の歳月の落した翳を、残すところなくわが身から払い落したがっているようだった。

たしかに——。

この勝気な女にとって、十三年は屈辱そのものでしかなかったかもしれない。それをわが手ですべて圧殺し、それだけの時間がすぎたことさえも否定することによって、わずかにお徳は誇りを保とうとしているようだった。

が、慌しくお徳が去った後も、お市の胸の中には、重苦しい澱のようなものが重く残っていた。

これでさばさばした、というお徳の物腰は、あながち虚勢ではなかったかもしれない。十三年間が苦しみの連続だったとすれば、そう思うのも無理からぬことだが、しかしそれだけの間、生活をともにした男との仲は、そんなに簡単に割切れるものだろうか。

しかも、信康はすでにこの世にはいない。死さえも、お徳の中に煮えたぎった憎悪を払拭でき

なかったとすれば……。これは人間の業というよりほかはないかもしれない。およそ結ばれるべきでなかった二人を結びつけた運命――すなわち業なのだ。

が、業などという言い方はしらじらしすぎる。言葉の上では解決できても、それは何にもならないことなのだ、という思いが、お市の胸の中にたゆたう。あの思いきりのよさは、性格なのか、若さなのか。しかしそれが、すがすがしさではなくて、むしろ荒涼たる思いをさそうのはなぜか……。

お市は自分の身を思い比べざるを得ない。婚家先と別れ、夫を死なせたという意味では、二人はおそろしいくらい同じ道を辿って来ている。それでいて、今胸に残る思いは何と違うことか。

浅井長政は、お市の胸の中に、はっきり追憶の人として残っているし、それを消そうと思ったこともない。まして、浅井で過した愛憎の歳月を抹殺してしまおうなどとは到底思えない。二度とその苦しみを味わいたいとは思わないが、それなりに生きたあかしはあったと思う。その中で得たお茶々たち三つの生命をはぐくみ育てることに、いま、お市は生甲斐を感じている。

なのに、お徳は、二人の娘のことも記憶に止めたがらない。これはなぜなのか。そういえば、姉のお犬も、大野の家に息子をおいて織田に帰り、ふたたび細川昭元に嫁いでいるではないか。

同じ織田の家に生れた三人の女たち――。すべて同じような運命を与えられながら、何とその生きざまの違うことか。お犬はほとんど感情の振幅を見せない。どこか捉えどころのないような大きさがあって、与えられた運命のまま、ゆっくり人生を歩んでゆく感じである。至極柔順で、意志を持たないように見えるかわり、いかなる非運もすべて彼女の傍をすりぬけてしまう。何が

起ろうと、彼女は全く傷つかないのだ。

これに比べると、お徳は憎悪に徹した戦いの女だ。個性が強く、傷つくことも大きいかわり、それを撥ねのける勝気さがある。

――そして、自分は？……。

とお市は思う。自分はそのどちらでもない。お徳のように勇ましく過去を否定することもできないし、お犬のように、過去の翳を全く止めようとしない人間でもないようである。

――では、この子たちは？

お市はそっと三人の娘たちをかえりみる。このごろひどく大人びて来たお茶々にはどちらかというとお徳に似た勝気さがある。三女のおごうは、おっとりしていて、お犬を思わせる。お初は、そのどちらにも似ていないが、さりとて、自分とは全く違う性格だ。甘ったれ上手の、人に好かれるたちで、気働きがある。一番当世ふうであり、思いのほかのたくましさも秘めている。

――成人した暁、この子たちには、どんなふうな運命が与えられるのか……。

お徳の頬のやつれが、他人事とは思えなくなるのである。

お市がそんな物思いを続けていたある日、また信孝がひょっこり顔を見せた。

「石山本願寺が片づきましたので、御報告に上がりました」

長年信長をてこずらせた一向宗の総帥光佐と講和したのだ。実際は本願寺側の敗色濃く、踏みつぶすことも不可能ではなかったのだが、政治的な配慮から、正親町天皇の勅命による講和という形をとった。

一方で、明智光秀、細川藤孝らによる丹波・丹後の経略も終り、秀吉の播磨・美作進攻も順調に進んでいる、と告げた信孝は、

「これからはいよいよ遠くへ参らねばなりません」

覇気満々の笑顔を見せた。

「忙しくなってまいります。出陣前に、ちょっと岐阜を見廻りましたついでにお寄りしたわけでして」

「岐阜では、お徳は元気にしておりましたか」

お市がたずねると、

「はあ、顔色もよく、少し肥えたようです」

答えてから、信孝は声を低めた。

「お徳は、よくやりましたな。なかなか働きのあるやつです」

「え？」

いぶかるお市の前で、したり顔にうなずいてみせた。

「信康のことですよ」

「信康を？」

「いいとき殺したということです」

「……」

「父上も御安心でしょう。あいつが生きていると小うるさい事になります。今のうち家康の手足

はもいでおいた方がよいと、思われたのではありますまいか」
薄い唇に冷酷そうな笑いが浮かんでいた。

お市の推測はどうやら逆だったらしい。娘かわいさに信長は激怒したのではなくて、真相は、お徳の築山殿への憎悪をあおりたてて、信康に詰め腹を切らせたのだとすれば、父は娘をうまうま利用したことになる。

信孝の男にしては紅すぎる唇からお市は、そっと目をそむけた。

――兄さまはお徳を利用したのか。娘夫婦の幸いなど踏みにじっても平気なのか。

そうだとしたら、十三年間、操られ続けたお徳は、あわれな存在ということになるが、そう簡単に言いきれるかどうか。

今にして思えば、あの父と娘には、奇妙な相似がある。自分の意識の届かないところで魅きあうようなものがあって、それと気づかず、お徳は父の心そのままに動き、また父も娘と同体になって、激しい憎悪をこめて信康を打ち倒したのではないか……。

そしてその結果もたらされた信康の死は、たしかに信孝の言うとおり、織田家にとっては、まさに望むところだったかもしれない。

が、そういうことを軽々しく口に出す信孝に、お市は好感は持てなかった。そしてお徳にも、同じような思いを持たずにはいられない。あの日清洲を発っていったお徳の姿に、何か荒涼たるものを感じたのは、そのためだったのかもしれない。

覇者の道というのは、常にこうしたものであろう。

世捨て人のように、こうして清洲で過していると、そのありさまが透けてみえてくる。しかし、それを眺めることは、いささか、お市にとっては気が重いのである。

渦中にある信長や信孝には、ためらいはないかもしれない。お徳にしても、それは同じことだ。当時の大名の娘は、嫁いだ後も、婚家の中に融けこまず、あくまで実家の利益代表者としての立場を保ち続ける。この事は、お市も経験したし、その限りにおいて、浅井と織田の双方を傷つけまい、と命をすりへらしもした。が、お徳はそれをさらに割切っているし、信孝のそれは、いささか軽薄でさえあった。

信孝自身は、お市の心を知ってか知らずにか、その後も時折り手紙で中央の消息を伝えて来る。信長が老臣の林通勝や佐久間信盛を追放したのを知ったのも、彼の便りからである。

林通勝は、かつて信長の弟、信行を擁立しようと画策した男だが、今度の追放はそのためではない。信長は彼の行政能力の不足にあいそをつかしたのだ。

佐久間信盛にしてもそうだ。彼は本願寺攻めの最高責任者だったが、その間、何の戦功もないことが追放の原因となった。

たしかに、このあたりから信長のやり方は手きびしくなっている。もっとも、彼に言わせれば、もう我慢も限界に達した、ということなのかもしれない。

お市は兄の我慢強さを知っている。だからこうした話を伝えられたときも、

「俺は待った。待ちくたびれたのだ」

そう言っている信長の声が聞えるような気がした。

が、老臣追放の事実は厳然としている。しかも、彼は、これより先、謀叛を起した荒木村重側の子女、数百人を殺している。このときも、じつはそれまで信長はかなり我慢強く村重の帰参を待っていた。しかし、村重が遂にこれを拒んで居城を脱出したために、それを怒って報復手段をとったのだが、この残虐さは、世の人々に大きな衝撃を与えた。

信康の死は、ちょうど荒木一族の虐殺と、老臣追放の間に起っている。

覇者の道を、ひたすら信長は走っていた。

――それも、ひどく早足に……。

そのことはお市を時折り不安にする。が、若い信孝は、かえってそれに勢いづけられているかのようであった。

「私もここで大働きをしなくてはなりませぬ」

手紙の最後には、いつもこう書いて来る。じつは彼は嫡男の信忠、次男信雄とは母を異にする。とりわけ信雄とは年齢もほとんど同じなので、異常なまでに競争心をかきたてられるらしく、いつかは鈍重なこの異母兄を出しぬいて、鼻をあかせてやろうと、逸りに逸っているようだった。

その彼が、父から四国出陣を命じられた、と言って来たのは天正十年五月のはじめのことだ。このころまでに、信長は、宿敵である甲斐の武田氏を滅ぼしている。中国筋の毛利との対決も大詰に来ていた。この方面で総力をふり絞って戦っているのは羽柴秀吉だが、彼からの報告をうけて、信長が中国へ向って安土を出発したのは五月の末であった。

この出陣の噂を追うようにして、急使が清洲城に走りこんだのは、その数日後――。

使者の伝えたのは、本能寺における異変であった。

覇王信長は、その階段を登りつめようとしたときに斃れたのだ。

「兄上が――」

「はい、嫡男信忠さまも二条城にて……」

使の口上を聞くなりお市は絶句した。頭の血がすうっと引いてゆくような感じの中で、ひとすじ、自分でもふしぎなくらい、その知らせを驚いていない部分があることに、お市は気づいていた。一瞬、

――来るべきものが来た。

という感じがしたのである。信長の足どりの中に、ひそかに抱いた不安とは、このことだったのだな、と思った。

ふいに、お徳が清洲を去っていったときの、あの荒涼たる思いが、胸によみがえって来た。そしてそのとき、ひどく鮮かに、血しぶきの中に倒れふしている信康らしい若い武士の姿が、お市の眼裏をよぎっていった。いや、それは、信長かもしれず、あるいは夫、長政の幻であったかもしれなかった。

清洲評定

信長斃る――の報を追いかけるようにして、お市母子の住む清洲城には、虚実さまざまの知らせが、洪水のように流れこんで来た。

明智光秀が安土の城を占領し、金銀財宝を奪い、城に放火したとか、信忠の妻も殺され、岐阜城も陥落したとか……。明日にも清洲の城下に明智軍が殺到するであろうという噂まで流れて、お市たちは慌しく城ぬけの準備をととのえた。

「お母さま……」

おびえきって両の袖にとりすがろうとするお初やおごうに、

「何も心配することはありませんよ」

お市は微笑してうなずいてみせた。

「お母さまがそなたたちくらいのとき、こんなことはよくあったのです」

近隣の織田一族との血みどろの戦い、それに続く今川義元との対決の折には、お市はちょうど

この娘たちくらいの年頃だった。

——それと同じ思いを、またここで味わうことになろうとは……。

すべては振出しに戻ったような感じである。汗みずくになって斎藤と戦い、朝倉に続いてお市の嫁ぎ先の浅井を滅亡させ、遂には石山本願寺をも沈黙させ、今や右大臣の肩書まで得ている信長の覇業のすべては、一瞬にして霧消してしまったかのようである。

「ね、そんなとき、お母さまは、どんなふうにしていらっしゃったの？」

お初は不安げに母をのぞきこむ。

「そうね……ただ黙ってじっとしてました」

「黙って？　それだけでいいの？」

「ええ、いざというときは、この母にしっかりついて来ればいいのです」

しかし、娘たちをおびえさせるような事態は遂に起らなかった。誤報はやがて打消され、織田信孝や羽柴秀吉が光秀と対陣していることが伝えられ、続いて光秀の敗死が報じられた。と、同時に、清洲の城内が俄かに慌しくなって来た。

「御城内で御評定が開かれる由でございます」

表の動きを聞きつけて来た侍女の一人がこう言った。

「御評定？　何の……」

「さあ……くわしいことはわかりませぬが、何でも、右府さま（信長）のお跡継ぎを決めるための御評定とか……」

そうこうしているうちに、早くも、京都で信長と同時に光秀に攻められて自刃した長男信忠の忘れ形見の三法師丸が、守役の堀秀政に護られてやって来た。数え年三歳の三法師は、秀政に手をひかれ危なげな足どりでお市の部屋に入って来ると、

「大叔母さまには御機嫌うるわしゅう」

誰かに教えられたのか、それでも、ちゃんと小さな手をつかえて挨拶した。

「ほんとうに此の度は思いがけないことでした」

お市の悔みに対して、

「はい」

と答えた瞳は、しかし無邪気に澄んでいて、父の死を含めた事態の急変を、まだ何一つ理解できないでいる様子であった。

「何しろまだお三つでいらっしゃいますから」

と秀政は取りなすようにつけ加えた。

続いて、羽柴秀吉、三七信孝、三介信雄、柴田勝家らが次々に到着し、城の内外に、彼らの率いて来た軍勢が溢れ、ひどくものものしげな雰囲気が昂まって来た。

お市の許に挨拶に来た秀吉は、

「お子様方もおすこやかにて」

わざとのように如才ない挨拶をしていった。主人の死の直後にしては愛想のよすぎる笑顔が、お市には何となく不快だった。この男の顔を見るのは、わが子万福丸を串刺しにされて以来のこ

とである。そのことをすっかり忘れたような顔をしていることが、お市をより苛立たせたのかもしれない。

信孝も、父や兄の死を悼む心を忘れている一人だった。

「お元気ですか、叔母上」

彼は本能寺の変当時、丹羽長秀と共に四国へ渡ろうとして大坂にいた。変報を聞くや否や光秀の娘を妻にしていた従兄の信澄を襲ってこれを殺し、とって返して秀吉と共に山崎で光秀と戦った。従兄の信澄の父は、かつて信長に殺された信行である。変事に際し信澄が反旗を翻す可能性は十分あったから、信孝の敏速な処置は、まず褒められていい。しかも信長の遺児の中で、光秀討滅に参加したのは彼一人である。

——われこそ武功抜群！

という気負いが軽忽なまでにむきだしになっていることに、お市は、ある危いものを感じないわけにはゆかなかった。

これに対して、信雄は卑屈でおどおどしていた。伊勢にあった彼は、父の弔い合戦にも間にあわず、完全に出る幕を失っていた。

「この度は、その……まことに……」

あのような事変が起ろうとは思わなかった、と言いわけがましく繰返し、上目づかいでお市を見上げた。信長の威光で、辛うじて面目を保って来たこの男は、後楯を失った今、みじめに凡庸さをさらけだしてしまっている。

——これが兄上の子か。

形の上では次男だから、織田家の総帥になってもいいはずのこの甥の腑甲斐なさに、お市は失望せざるを得ない。それらに比べて、信長という存在が、全く異質の輝きを放つものであったことを、改めて思い知らされた。

——この子たちは、父親のその偉大さが、全くわかっていない。

親と子のつながりということは、人格の連続でもなければ、才能の継承でもない。むしろ、兄を理解しているのは、息子たちではなくて、この自分なのだ、という気がした。浅井の家から戻って以来、正直いって、お市は信長から遠ざかりたい気持が強かった。やみくもに突進してゆくような彼の生き方に違和感があったし、それが次第に冷酷な色彩を加えてゆくことに嫌悪すら感じていた。

しかし、今は、その兄に、言いしれない懐しさを感じるのはなぜか。死が、すべての思いを和らげてくれたからか。いや、それだけではあるまい。後に残った子供たちは、父の死を嘆くどころか、自分たちの利害だけに汲々としている。しょせん兄は孤独に人生を突走ったにすぎない、という思いの中で、はじめてお市は、今までと違ったある共感を信長に対して感じたのであった。

そのお市の耳に、信長の築いた織田王国が音をたてて崩れてゆくのが聞える。群がる織田一族を斬りなびけ、美濃の斎藤一族との死闘を繰返し、叡山、本願寺と血みどろになって戦い、将軍を樹て、そして廃し、さらに中国へ四国へと手を伸ばし、憑かれたように突走った兄——。そして自分もまた、その兄の片腕たるべく浅井に嫁いでいったのではなかったか。が、それらは今、

見るもむざんに崩れようとしている……。

清洲を訪れた諸将のうち、比較的お市に近い思いを持っていたのは柴田勝家だった。

「惜しいお方であられました。もう二度とは出られない名将でおわしましたものを……」

お市の前に武骨に両の手を突いて、勝家はそう言った。

「お言葉の数々が、今も胸によみがえってまいります。無念なのは、この勝家が、あのときお傍にいなかったことでございます」

北陸路の経略をまかされていた彼は、上杉謙信の跡を継いだ景勝の軍勢と合戦中で、どうにかやりくりをつけて都に向ったとき、すでに秀吉は光秀を倒してしまっていた。

「勝家さえお傍におれば、むざむざ光秀めに殿を討たせるような事はいたしませんでしたのに――」

そうかもしれない。が、この男はいつもこんなふうに要領が悪いのだ。がむしゃらで強いが、力こぶの入れかたがどこか見当はずれだ。北陸路でぐずぐずしていたことじたいがその要領の悪さの象徴でもある、とお市はやや突放した思いで、髭の濃い、いかつい顔を眺めていた。

――まっ正直で、むきになる。が、それだけのこと。急の間にはあいはしない。

結局、清洲に集まった誰に対しても、お市は不機嫌にならざるを得なかった。

――ほんとに、誰も彼も……。

心の中で呟きかけて、ふと、彼女は、亡き信長そのものの眼で、あたりを見廻している自分自身に気がついた。

六月の末から七月にかけて行われた清洲の評定はかなり紛糾した。秀吉、勝家、信雄、信孝に加えて、丹羽長秀、池田恒興、堀久太郎がその座に加わったが、信長の跡目相続についても、領地分割についても、それぞれの思惑がからんで、結論はなかなか出なかった。

もちろん、お市の許へは、会議の模様は何ひとつ伝えられては来ない。ただ慌しい人の往き来や周囲の重苦しい雰囲気から、会議が難航していることだけは、はっきりと感じられた。その間じゅう、お市の胸の中には、

——どうせなるようにしかならないのに。

人々のいがみあいを冷たく嗤いすてようとする思いと、

——誰も彼も、みんな小粒で卑しげな者ばかり！

立っていって苛立ちを投げつけたい思いとが交錯した。いってみれば彼女の中で、お市自身の眼と、信長の眼とがぶつかりあう感じなのである。そしてその中にあって、兄信長の死のもたらした欠落感のみが、しだいに深まってゆく。

そんなお市の許に、数日後の夜ふけ、声をしのばせた来訪者があった。

「まだお眼ざめでしょうか、叔母上」

ひそかに障子をあけて入って来たのは信孝であった。数日前やって来たときの意気軒昂たる面持は全く消えてしまっている。

「無念です」

坐るなり彼はこう言い、唇を噛んだ。おそらく評定の間、ろくに眠ってもいないのか、髪はそそけ立ち、頬には憔悴の色がありありと見える。

「謀られたのです、秀吉に」

押し殺した声の調子の中にも忿懣はかくしようもなかった。

「いったい、どういうことなのです」

「ずるい奴です、あいつは。長秀や恒興を抱きこんでいたのです」

「もっと順序をたてて話してごらんなさい」

こんなに感情を先走らせては話にならない、とお市は思った。一本気で激しやすい彼の短所がむきだしになっている。ともすれば激昂しがちな彼の、きれぎれの話をつなぎあわせると、事の経過はこうであった。

清洲に乗りこんでくるまで、信孝と秀吉の間はきわめてなめらかだった。山崎の合戦についても、信孝は、秀吉が彼のために光秀を討ち、忠義を尽した、と思っていた。ついで六月下旬、美濃、尾張に入って光秀の残党を掃蕩するまで、彼らの連繋は、きわめて緊密だった——と信孝は思いこんでいたのである。

この時点で、彼が、

——天下は俺のものだ。

と強気になったのも当然かもしれない。兄信忠は父と共に死んでいる。次兄信雄は弔い合戦に遂に間にあわなかった。もともと信孝と信雄は腹ちがいで、庶腹のために三男とされている信孝

も、じつはほとんど同時の生れである。それやこれやで、とかく反りのあわない二人だったが、この弔い合戦で、愚鈍な兄に完全に差をつけた、と信孝は思った。

が、いよいよ会議が開かれてみると、事は意外な方に展開した。

「信孝さまはたしかに戦功はあるが、三男である。信雄さまは合戦に参加されなかったが、次男であることに変りはない。幸い信孝さまは合戦に出られる地点にいたにすぎず、信雄さまは不運にもその場に居あわされなかっただけのことで――」

そして、信雄、信孝の対立が激化したとき、これを調停するような形で、奇妙な「正論」が、盲点を衝いて躍り出た。

「御長男は何といっても信忠さま。そのお忘れ形見の三法師君こそ正嫡ではないか。信雄、信孝さまはこの年若な御正嫡を補佐する立場に立たれるべきだ」

目の前の食膳に手をつけようとした瞬間、それを攫われるような無念さを、二人の兄弟は味わわされた。

「ちっ！　三つの小童に何ができるというんです」

信孝はいまいましげに舌打ちした。

「げんに、父の仇を討ったのは、この私なのですぞ、叔母上……」

その功さえも秀吉は横取りしようとしている、と彼は怒りをこめて訴えた。

「席上、正論を吐いたのは勝家だけです。柴田は信孝さまこそ功績第一、と言いました。が、どいつもそれを認めようとしない。秀吉めが後から手を廻して、三法師を推すように工作していた

のです」

しかも秀吉は相続問題と領地分割を巧みに量りにかけて、絶妙の手を打って来た。安土焼失後、織田の本城となった感のある岐阜を信孝のものとして、三法師を一応そこへ預ける形をとって、彼の怒りをなだめる策に出たのだ。これで信孝は織田随一の城のあるじにだけはなったことになる。これに対して信雄は一格低い清洲のあるじたるにとどまった。次男としての面目は失ったが、戦場で功績がなかった以上文句はいえない。

この分割に従って、尾張は信雄のものとなり、美濃は信孝領となったが、しかし、見様によっては、尾張こそ織田氏発祥の地であり、そこのあるじとなった信雄は、いささか自尊心を慰められ、その分だけ野心を後に繋いだ形になった。この巧妙な領土分割によって、兄弟の敵愾心はいよいよあおられたわけだ。

光秀の所領のうち近江北部と長浜城は柴田勝家が取り、光秀の本拠、坂本城及び志賀郡、高島郡は丹羽長秀が取り、大坂は池田恒興の領地となった。かなり気前のよい配分に見えるが、かんじんの山城とそれに続く丹波は秀吉が押えてしまったのだから、やはり清洲の評定は、すべて秀吉の作戦通りに運んだことになる。

「叔母上……」

話し終った信孝は、意を決したように膝を進めた。

「男として、このまま引退るわけにはゆきませぬ」

「それで？……」

言いかけたお市の前に、がば、と手をついた。

「お願いでございます。信孝を助けて下さいませぬか」

「まあ、私がそなたを助ける？　そのようなことができましょうか」

「できます」

「それはなぜに」

「この城を出て私の味方になって頂きたいのです」

「と申して……」

これは戦国の作法としては許されないことであった。原則として、城のあるじになった人物は、その城にいる人間から財宝のすべてを引継ぐ。信雄が清洲城主ときまった以上、お市母子は、信雄の監督、保護をうけることになるのである。

「評定でそうきまったものを、くつがえすことはできぬはずです」

「たしかに、それはそうです。が、ただ一つ、道はあります」

「それはどのような」

「叔母上の御決心ひとつで……」

うめくように、信孝は言った。

「決心とは？」

「ここを出て、ほかへ嫁ぎたいと……」

「この私が？　もう一度嫁ぐのですか」
お市は耳を疑った。若い甥の言いだしたことはあまりにも唐突すぎた。が、信孝はにこりともせずに肯いた。
「そうです。お嫁ぎになればこの城にいらっしゃらないですみます。そして、私を助けていただくことができるのです」
「……ということは誰に嫁げと言われるのです？」
信孝は一瞬口を噤み、それから声を低めて一語一語を歯の間から押し出すように言った。
「柴田修理（勝家）でございます」
「えっ、柴田と？」
馬鹿な！　と言いかけてお市は唇をひき結んだ。
――あの権六ごときに、なぜ私が嫁がねばならないのか。
お市の顔色の変るのに気づいたのか、信孝は、少しおどおどした言い方になった。
「お許しいただけませぬか……」
「……」
「じつは……柴田も……そう願えれば、と内々申しております」
いかつい髭面を思いうかべた瞬間、お市は思わず口走っていた。
「お断りします。お帰り下さい」
見る見る信孝は弱々しい口調になった。

「やはり、いけませぬか」
「申すまでもないことです」
「左様でございますか」
がっくりと肩を落して彼は呟いた。
「権六は私の元服の時の烏帽子親です。以来あの男だけは、嫡出ならぬ私を蔭になり日向になって支えてくれました。今度も……。頼りにできるのはあの男だけです」
あきらかに負け札を摑んだ彼は、自信喪失している。烏帽子親の勝家にすがりつくだけでは不安で、お市にその後楯になって欲しいというのである。
――何という意気地のなさ、それでもそなたは右大臣信長の子供なの？
叫びだしたい衝動を辛うじてお市はこらえた。と、さらに小さな声で彼は言った。
「秀吉も、どうやら叔母上のお世話をしたいとか申しているそうです。このまま清洲においでになりますと、多分、兄は秀吉の意を迎えようとして、叔母上にそのことをおすすめするかも知れませぬ。そして、もし、そのようなことになりましたら、この信孝は、孤立してしまいます」
「馬鹿な！」
ついにお市は口走ってしまった。
「私は嫌です。何を藤吉郎めなどに……。さ、お帰り下さい。私は誰にも嫁ぎませぬ」
清洲の評定の蔭でそれぞれがそのような思惑で自分の身の上について囁きかわしていたのか。想像するだけでも不愉快だった。

「失礼申し上げました」

悄然として座を立つ信孝を、お市は敢えてとめなかった。その瞬間、お市の耳にあったのは、信孝の去ってゆく足音ではなくて、壮大な織田王国の崩れてゆく音であった。

——ああ、崩れる。兄さまの築いた王国が……。

それをいま、兄になりかわって、自分は、兄の眼になって眺めている、と思ったとき、ふいに体の中から突きあげて来るものがあった。

それは何か。

憤り？　そうかもしれない。何とも名状しがたい猛々しい思いが、無意識に彼女を立上らせていた。

——同情では決してない。まして愛情などではあり得ない。

自分に言いきかせながら、彼女は廊を遠ざかってゆく足音を追った。

「信孝どの……」

足音は遠くでとまったようだった。

妙心寺供養

評定の直後発表された柴田勝家とお市の婚約は、清洲城に詰めていた諸将に少なからぬ衝撃を与えた。

「なに、あの髭の権六が、お市さまと？」

歎声と押し殺した囁きが小波のようにひろがったが、それはすでに老境に近づきつつある武骨な男が、美貌の女性を妻にすることへの単純な嫉妬ではなかった。

――ほう、これは……。流れが変ったぞ。

男たちはそれに驚愕したのだ。そしてこのとき、彼らが一様に感じたのは、

――信孝さまは巻返しに成功なされた。

ということであった。それまで清洲会議の中で信孝は常に押され気味だった。光秀誅殺の功は秀吉に一人じめされ、誰も彼の働きを認めてくれなかった。その上庶腹の出のために、ともすれば無能な兄、信雄の下風に立たされ、結局京都で死んだ長兄信忠の遺児、三法師が跡継ぎときま

って、跡目争いからは一歩も二歩も後退した感じだったのである。

が、お市が勝家に嫁ぐとなると、明らかに情勢は変って来る。勝家は信孝の烏帽子親だし、会議の席上でも露骨に信孝の後押しをした。

――そこへお市さまが加わるとなれば……。

諸将は急いで彼らの力関係を量りにかけてみる。

――つまり権六は織田一族なみの待遇を得たわけだな。

秀吉は信長の息子の於次丸秀勝を養子として貰いうけていることを楯に織田家の親族面をしているのだが、柴田勝家が浮上してくれば、その分秀吉の地盤は沈下せざるを得ない。それにお市は信長の世代の生残りの一人である。彼女と肉体的な交渉を持つことは、信長の息子を養子にするよりは数段格がいい。

そう見極めをつけると、彼らの反応はすばやかった。

「このたびのこと、心よりお祝い申しあげます」

先を争ってお市の許に祝いにやって来た。今までの息もつまりそうな主導権争いの雰囲気が、たちまちにして一変した。当の勝家も、いささか眩しげな表情である。

「何分急なことで……。早速帰城してお迎えの準備にとりかかるつもりでございます」

お市に対してどういう口のきき方をするべきか、戸惑っているようであった。秀吉も間をおかずやって来た。

「いや、おめでとうございます。御出発はいつごろ？　え？　十月でございますか。なるべくお

早くお移りなさいませ。越路は雪が早うございますからな」

この縁組によって、自分の勢力が後退する恨みなど毛筋ほども見せず、賑やかにしゃべりまくって帰っていった。

そのようなざわめきを、お市はまるで他人事のようにうけとめている。しかし、身辺に長く仕えるかのや数人の侍女たちは、彼女が目立って口数が少なくなって来ていることに気がついていたはずである。

時折りお市は遠くをみつめるような眼をした。何か目前のこととは別の思いに心を捉われているようであった。秀吉が陽気にしゃべりたてているときも、ふっとそんな眼をし、みずからそのことに気づくと、視線を秀吉に戻して、

「心づかいをありがとう」

さらりとそれだけ言った。彼の背負って来た騒々しい雰囲気を完全に無視したような静かなあしらいであった。

そして、じつは、新しく花婿となることにきまった勝家に対しても、お市の態度は秀吉の時とほとんど変らなかった。勝家の挨拶をうけて、お市は無言で頭を下げた。小さな口が、かすかに動いたが、言っていることは聞きとれなかった。そして唇とともに、このとき、眉のあたりが、さらにかすかに震えたことを見てとった者は一人もいなかった。それは突然に訪れた身辺の華やぎに対する羞恥とも、また、見様によっては、こみあげてくる嫌悪の情を、ひそかに押し殺すためとも見えるものだったが……。

いま、お市の周囲には奇妙な静寂がある。その静寂を芯に、清洲城内には一種の興奮が渦巻いている。信孝の巻返しに拍手をおくるもの、秀吉の無念さに同調するもの、さあ、これからが面白くなるぞ、と舌なめずりをするもの。その中で、静まりかえっているお市の存在はともすれば見失われがちだった。はじめのうちこそ、

「お市さまは権六の所へなど嫁ぐのはいやだ、と仰せられたそうな」

とか、

「信孝どのが袖にすがって哀願されたそうだ」

といった囁きも流れはしたが、人々の関心はすぐ逸れた。

ともあれ、すでに事は決したのだ。男たちは、

「お市さまは、結局、信孝さまびいきなのだ」

と簡単に納得し、それよりもこの先の事の帰趨に眼を奪われていた。

——さて、秀吉がどう出るか。

——後れをとった三介信雄どのは？

信雄が失地回復をはかって徳川家康と結びつきたがっているという噂もどこからか流れて、信長なきあとの主導権争いは、いよいよ混沌としていった。

お市と勝家の祝言は秋、岐阜城で、と定められた。集まった諸将が引揚げてゆき、嵐の去った後のような静かさが清洲城に戻って来たそのとき、お市の身辺では、再度の輿入れの準備が慌し

くととのえられはじめた。

そうなってからも、お市は依然として口数が少なかった。侍女たちが指図を仰ぎに来ても、

「よろしいように」

まるで他人事のように静かに言う。

年頃にさしかかっている娘たちは、母の再婚にそれぞれの反応をしめした。

「まあ、では家来筋のところへゆくのね、私たち」

いささか自尊心を傷つけられたように言ったのは勝気なお茶々だった。お初は、

「そのお城、ここより大きいかしら？」

と、まず城の大きさを問題にした。いちばん年下のおごうは、

「越前って、あのお山の向こう？」

と尋ねた。尾張の平野に立つ清洲城からは、晴れていれば北の方に続く山脈（やまなみ）がくっきり見える。その山よりもずっと向こうだとお市に聞かされ、おごうは何やら納得したように肯き、それ以上何も尋ねようとはしなかった。

輿入れの日が近づくと、お茶々は少し不機嫌になって来て、時おり少女に似あわぬ眉のひそめ方をすることがあった。その表情は、お市が勝家の前で、かすかに眉を震わせたときの面差しと驚くほどよく似ていた。

そういえば、この少女は、母の美貌を一番よくうけついでいる。丈ものびて俄かに女らしくなって来て、母娘というより、時には姉妹にも見えることもあるくらいだった。

都から蒔絵の手筥や注文していた繍つきの小袖が送られて来ると、お初は俄かにはしゃぎだした。

「まあ、これをお召しになるの？　いいわねえ。お母さま、私がお輿入れするとき、これ頂戴ね」

さすがにお市の唇許がほころぶ。

「いいですとも」

お初は美しいものが大好きなのだ。そういえば、姉のお犬がこの城から細川昭元に再嫁していったときも、その支度にまつわりついて離れなかったのは、お初であった。

お市はふとそのことを思いだしたらしい。

――姉さまはどうしておられるか。

しっかり者のお市に比べると、温和でものやわらかで、どこか頼りなげでさえあるお犬だが、見かけによらず芯は強くて、いったん嫁いでしまうと、めったにお市に便りもよこさない。べたべたと人なつかしげにすりついて来るような心情は持ちあわせていない姉なのだ。

信長の突然の死は、お犬の夫の細川昭元の身辺も危うくさせている。せっかく手に入れた槇島城も守りきれず、昔の本拠だった四国へ望みをかけ、長曾我部元親としきりに連絡をとっているらしい。

そんな中で、いったいお犬はどうしているのか。

――泣き言ひとつ言って来られないあたり、いかにも姉さまらしいなさりようだこと。

小袖を手にとったまま、一点に視線を据えて、お市はそんな思いに捉われているようであった。いよいよ、準備もととのい、お市が娘たちとともに、岐阜へ発つという前夜、夜がふけてからのことである。

「申しあげます」

かのが息をひそめて、お市の寝所の外でこう言ったのは……。

「お入り」

お市はまだ寝てはいなかった。褥の上に起きあがると、かのは蒼ざめた頬でにじり寄るなり、あえぐように言った。

「都よりの急使がまいりまして……。思いがけないことでございますが」

「どうしたというの」

「細川さまの御内室さまが、おかくれになりました」

「えっ、姉さまが」

ぎょっとして身を震わせたお市の耳に、かのの声が囁いた。

「突然の御発病にて」

「突然の？……そう」

二人の間にそれ以上言葉はなかった。いや、言葉以上のものを、二人の瞳は語りあっていた。

――姉の突然の死は、ただごとではあるまい。

この複雑な情勢の中で、何らかの意味で、お犬は不必要な存在になったのである。彼女がいて

は邪魔だと思ったのは誰か。夫の昭元か、それとも……。が、これは絶対に口に出しては言えないことであった。予感などというなまやさしいものではなく、確信に近いものを、お互いの瞳の中にたしかめつつ、お市とかのは、肯きあうことさえせず、長い間黙りこくっていた。

お犬の死は、信長の死に重ねあわされるべきものであった。何が起ろうと、顔色ひとつ動かさず、水が器に従ってかたちを変えるように、淡々と事に応じて来たお犬だったのに、有力な兄の支えを失ったとき、死は当然のことのように彼女の前途に待ちうけていたのである。

沈黙の末、かのは顔をあげた。

「あの……お願いがございます」

「何なの」

思いつめた口調でかのは言った。

「此の度の御祝言、おとりやめになさるわけにはゆきませぬか」

「まあ、どうしてそのようなことをいうの」

「……」

かのは答えなかった。が、彼女が何を言わなくても、お市には、唐突に言いだした理由が、わかりすぎるほどわかっていた。かのはお市が、お犬と同じく政争の渦に巻きこまれてその犠牲になるのを恐れているのである。

「案じるには及びませぬ」

お市は微笑をうかべた。

「でも……」
「いいの、もうきまったことです」
「それは、信孝さまへのお心入れは、わからないわけでもございませんが」
かのが遠慮がちにそう言ったとき、
「心入れですって、まあ、ほほほ」
お市は声をあげて笑った。久しぶりの笑顔であった。
「信孝への情にほだされて嫁ぐと、そなたまで思っているの」
「……」
「それだけのことでしたら、私は断っています。いえ、そなたも知ってのとおり、私はあのとき、信孝の申し出を、いったんは断ったではありませぬか」
「では、なぜ信孝さまをお呼び戻しなされたのでございますか」
かのの問いに、お市は答えなかった。言ってはならぬことだった。勝家に嫁ごうと決心させた心の底にあるものを絶対人にのぞかせてはならぬ。お市はそう思い定めている。その思いを胸の奥に沈めて微笑んだとき、その頬は、むしろそれまでより明るく見えた。
翌日、朝早く、お市は清洲を発った。
「さ、参りましょう」
促すようにして、お市はおごうと肩を並べた。
「あのお山の向こうにゆくのですね」

「そうです」

答えるお市の声には、凛たる響きがあった。

祝言は岐阜城で簡素な形で行われた。この城が選ばれたのは、それが信孝の城であり、二人の結婚は、あくまでも信孝の媒(なかだち)によるものであることを、天下に誇示するためであった。

祝言の席で見る勝家には、この前のような面映ゆげな表情はなかった。お市と二十歳あまり年の違う彼は、武骨ながら武将らしい決然たる風格をにじませて座についた。一方のお市も三十六とは思えないあでやかさである。白地に幸菱を散らせた裲襠(うちかけ)姿で座についたとき、列座の人々は、

——なぜ、十年もの間、このお方にやもめぐらしをさせておいたのか……。

と、ひそかな溜息を洩らしたほどだった。続いて祝宴に移ると、勝家はよく杯を重ね、豪快に笑った。信長麾下随一の猛将と気鋭の若武者信孝とが、がっちりした紐帯(ちゅうたい)で結ばれたことを、誰しも強く印象づけられずにはいられなかった。このとき、信孝は甥にあたる三法師を、安土城の修理が終るまでという名目で預かっていた。だから、それまでは正嫡はこの三歳になる幼児で、信孝はその守役のようにしか見られなかったのだが、この時点で比重は逆転した。信孝は柴田と結び、しかも三法師という駒を握り、それを生かすも殺すも自由自在、というような……。

明らかに風向きは変ったのだ。信孝は跡目争いの一番手にのしあがったのである。そのせいか彼はひどく上機嫌で、宴が果てた後、

「ま、叔母上もゆっくりご滞在を。いろいろお話も申し上げたい」

しきりにひきとめたが、お市は首を振った。

「いえ、そうもまいりませぬ」
「では、早速に越前に参るとするか」
勝家が口をはさむと、
「いえ、その前に――」
白い裲襠姿のまま、お市は二人を前にしてはっきり言った。
「都にまいりとうございます」
「なに都へ？」
男たちは虚をつかれた顔になった。
「なぜに？……」
「前から考えていたことでございます。が、あまり早くお話しして、他へ洩れても、と思いまして……」
男たちに答えるというよりも、自分の心にある決意に光をあて、それを確かめるような口調で、お市は言った。
「それは、いったいどういうことなのか……」
「兄の法要を営むのです。九月十一日は百カ日でございますから」
「う……む」
と男たちが唸ったとき、すかさず、お市はつけ加えた。
「その法要を私の名でとり行って頂きたいのです。よろしゅうございますね」

お市の突然の申し出は、最初、二人の男たちを口もきけないほどに驚かせた。その驚きが彼らの体のすみずみに行き渡ったとき、それは狂喜に変った。

「よくぞ、おっしゃって下さいましたっ」

信孝はお市の手をおし戴くようにした。彼女の申し出た信長の百カ日の法要の計りしれないほどの政治的効果に気づいたからである。

都で大がかりな追善供養をするのは、とりもなおさず、お市とその夫柴田勝家と甥の信孝が信長の正統を継ぐものであるということを天下に公表することである。

あの目はしのきく羽柴秀吉も先ごろからの政治的取引きにまぎれて百カ日のことはついぞ考えに及ばないらしいのもつけ目である。お市が事は隠密に、といったのも、じつはそのためで、あっと鼻をあかせてやろうというわけなのだ。

「では早速手配を」

飛び立つように信孝が出ていった後で、勝家はしげしげとお市の顔を見守って言った。

「花のような顔(かんばせ)だ」

それからゆっくりその手をとった。

「娘のように愛くるしい唇をしている。そしてこの小さな手」

お市は勝家の愛撫にまかせている。

「この愛らしいそなたのどこに、男も及ばぬ才覚がひそんでいるのだ」

じっとみつめられたとき、お市は軽く顔をそむけて眼を閉じた。それを勝家は恥じらいと見たようだった。促されて寝所に身を横たえたときも、お市は、むしろ処女のようにぎごちなかった。

「雪のような肌だな」

勝家は歎じた。武骨な指がこわれものにでも触るように、遠慮がちに、しかし丹念に愛撫を加えてゆく。お市は拒まなかった。ただ無言で眼を閉じ、時折り、眉を震わせ、かすかに首を振った。清洲で見せたあの表情である。我にもなく昂まりの波にのせられて漂いだしそうになりながらも、強いてそれを遠ざけようとするような動作だった。お市の中では明らかに何かが闘っていた。が、白瑠璃に似た華奢な肢体に身を埋めた勝家はそれに気づいた気配はなかった。

お市主催の信長の百カ日法要が行われたのは九月十一日、寺は山城の妙心寺が選ばれた。事は隠密裡に運ばれたが、しかし、ぎりぎりになって、秀吉の聞きつけるところとなったのは、やむを得ないことだった。

「なにっ、故殿の百カ日をお市さまが？」

彼もまた飛びあがるほどに驚いたが、如何ともなすすべがない。

「ええい、やむを得ん。百一日の法要でもやるか」

対抗上、喪主として表面に押したてたのは養子の秀勝である。大徳寺で行われた法要は、さすがにお市の妙心寺供養よりも大がかりだったが、二番煎じであることは蔽うべくもない。むしろ、慌ててお市をまねて法要を営んだことによって、秀吉は天下に恥をさらしたのである。

そしてそのころ、お市はさっさと都を発ち、近江を経て越前へと向っていた。彼女にとっては十年めの近江路だった。

「お母さま、小谷のお山が……」

なつかしげに声をあげたのは、お茶々である。

「ほら、あのへんにお城があったのよ」

落城の時、六つだったお茶々には、さまざまの思い出がある。が、お初はお城のこともうろ覚えだったし、おごうに到っては全く記憶はない。それだけ反応も乏しかったが、一番無表情だったのはお市だったかもしれない。お茶々に促されて、一度だけ輿を降りたが、ほとんど無表情に山をみつめ、何の感想も洩らさなかった。お茶々は、そんなお市に軽い失望を感じたようだった。

やがて一行は山路にかかり栃ノ木峠に出た。

「これはな、俺が越前入りしてからととのえた道なのだ」

やや誇らしげに勝家は言った。軍事的にも経済的にも安土や都に密着した態度をとるべく、彼はまず道路の整備に専念したのである。近江側はややなだらかに、越前側は急激に斜面をなだれ下りる感じのその峠には名前のごとく大きな栃の木がある。

「大きな葉ですこと」

枝をさしのべたその大木の葉が風もないのに静かに揺れるのを見て、お市はそれだけ言った。峠を降りかけると霧が巻いて来た。見る見るあたりの風物は姿をかくし、お市たちは乳色の海を泳ぐようにして道を下っていった。

北庄に着いたとき、北国はすでに冬の色を見せていた。城をとりまく足羽川の流れも、平野を蔽う空もすべて鉛色である。その中に九重の堂々たる天守閣を聳えさせ、北庄の城は、まさに武骨な武将勝家の本拠にふさわしい風貌をしめしていた。

それから間もなく、お市は秀吉がまたもや大徳寺で信長のための法要を営んだことを知った。その直前、朝廷から信長に太政大臣・従一位が追贈されたことを口実に「葬儀」を営んだのだという。百カ日法要の後の「葬儀」も妙なものだが、秀吉はやっきになってお市の営んだ法要を否定しようとしたのである。

この法要合戦を皮切りに、秀吉と信孝・勝家の間は日増しに険悪になった。偽りの和睦を結んだかと思うと、たちまち歯をむきだしていがみあったり、北庄に嫁いで以来、お市の身辺には一日も静かな日はなかったといっていい。

やがて北庄は雪に閉ざされた。と間もなく、お市は信孝の岐阜城が秀吉に囲まれたことを知った。勝家と切離された信孝は無力である。

「叔母上、お助け下さい」

お市は耳許で信孝の悲鳴を聞くような気がした。もっともこのとき、秀吉は信孝をとことんまで追いつめることはしなかった。というより信孝がそれ以前に手をあげてしまったのである。和睦の条件として、彼は岐阜城に押えこんでおいた三法師を安土城へ引渡し、その上自分の方からも人質を差しだした。

一方、勝家の領地であった長浜も秀吉に押えられた。城を預けておいた甥の勝豊が秀吉に籠絡

されて寝返ってしまったのだ。

「おのれ、春になれば、目にもの見せてくれようものを……」

雪に閉ざされ、出陣の自由を失った勝家は歯がみをするばかりであった。

賤ケ嶽

天正十一年、北陸路の雪はとりわけ深かった。北庄で、はじめての冬を過したお市の娘たちは、最初のうちこそ、雪の深さが物珍しく、大騒ぎしたが、そのうち、白い巨人に組みしかれてしまったような毎日に、少し恐れを感じはじめた。

「いつまで降るんでしょうね、この雪」

彼女たちが、何か落ちつかない日を過しているのは、雪のためばかりではなかった。お市の素振りが、何となく違うのだ。雪の照りかえしをうけてか、その顔色は蠟のように透きとおって血の気がない。何かほかの事に心を捉われているようで、話しかけても、はかばかしい返事がかえってこない。肯きながら浮かべる微笑は、前と同じようにやさしいが、それがすぐには頬に上って来ないのだ。

こういうことに、少女たちは敏感である。が、案外、新しい夫の勝家は、そのことに気づいていない様子だった。

「寒くはないか。風邪はひかぬか」

うるさいほどにお市の身のまわりを案じるくせに、お市の心の中の翳りには、思い及ばないらしい。いや、それどころか、生涯のほとんどを戦塵にまみれて過した彼は、今まで予想もしなかった若い美しい妻を手に入れ、突然の華やぎに戸惑い、頬を火照らせているのであった。

そんな彼にとって、むしろ雪にふりこめられた数カ月は天の賜物でさえあった。その間は戦いがない。いかなる敵も、この北庄を窺うことはできないのだ。

――万事は春が来てからだ。

彼は自分にそう言いきかせる。甥の勝豊が自分を裏切って秀吉に降り、長浜城を明渡したと聞いたときは、

「おのれ、勝豊め」

と歯がみもしたが、それについても、

「なあに、春になれば一揉みよ」

確信ありげにそう言う。こんなとき、お市は何か言いたげに唇を動かしかけるのだが、思い返したように、やめてしまう。しかし、勝家の口から、

「なあに、春がくれば」

二度、三度と繰返されたとき、思い決したように、お市は眉をあげた。

「春まで、信孝は持ちこたえられますでしょうか」

ほう、といった眼差しで勝家はお市を見た。

「案じるには及ばぬ。一応信雄さまとの和解も成立したのだから」
「と、見せかけて、羽柴筑前は、また戦さの準備をしているやも知れませぬ」
「ほ、これは……」
今度は声に出して勝家は言い、まじまじとお市を見つめた。
「なかなか眼力が鋭いな。が、筑前とて、かりにも右府（信長）の息男にたやすく槍はむけられぬ。それにしても」
言いさして、さらにお市の眼の中をのぞきこむようにした。
「よほど、信孝さまのことがいとしいとみえる」
「いいえ、そうではありませぬが……」
「いや、いや、そうであろうとも」
信孝の身を案じるものと決めこんで肯き、彼自身、それに満足しているらしかった。そんなとき、お市の頬には小波のように微笑に似たものが浮かんではすぐ消えるのである。
このころ、信孝の同盟者、滝川一益も、伊勢で苦戦していた。信雄と秀吉の連合軍に属城を次次と攻落され、見る見る手足をもがれてゆく感じであった。
じつは、勝家と、信孝、一益の間には密約がある。三者でいっせいに秀吉に戦いを挑み、美濃、伊勢、近江を走り廻らせ、兵力を消耗させて敗北に追いこもうというのだ。
が、この状態では、春になって勝家が出陣するまで、彼らが秀吉の鋒先をかわし得るかどうか、すこぶる怪しくなって来た。しかし、これについても、勝家は、決して悲観はしていない。

「案じるな。俺は勝つ」
むしろ確信をこめて彼は言う。夜の床で、それを言うとき、大きな手でお市の白い頬を挟み、しげしげとみつめて、
「この俺が、今まで一度だって負けたことがあるか」
問いかけるように言う。
「いいえ」
「そうだろう」
勝家は満足そうに肯く。
「俺はいつもそうだ。危うくなればなるほど負けぬのだ。まして、今度は負けられぬ。そなたと信孝さまのためにもな」
お市の睫がぴくりとふるえる。のびてくる勝家の手を思わず払いのけそうにする。
「いいではないか」
「でも……」
「いやか」
「そうではありませぬ。でも、雪の向うのことを思いますと」
「案じるな。それにこの雪では、出陣しようにもできないではないか」
お市の瞳の底がすっと冷たくなっている。その瞳は、勝家の妻のそれではない。天下人、信長の一族の誇りにみちた瞳が、家臣勝家を見ている。口実を設けての逡巡や怠慢は一瞬たりとも許

さなかった信長と同じ瞳の光がそこにあった。

が、その光は、勝家が気づかぬうちにたちまち消え、薄絹をかけたような、捉えがたい表情が頬に浮かび、それがじわじわと微笑に変ってゆく。勝家が気づくのは、その微笑だけである。彼は安堵し、お市を惚れ惚れとみつめてから、小さな唇の上に蔽いかぶさり、腕の力を強める。だから、その後で、ふたたびお市の頬から微笑が消え、何かに堪えようとするかのように眉が寄せられるのを彼は知らない……。

「案じるな」

勝家は体を離した後、いたわるようにもう一度言った。

「打つべき手はすでに打っている」

たしかに、勝家の言葉は虚勢でも何でもなかった。ふつう、この時点で、雪に閉じこめられた彼は、秀吉のなすにまかせて、焦慮の日を重ねていたように思われているが、彼は決して無策な男ではない。長年信長の側近にあって、その作戦を見聞きしている彼は、深雪の中でじっくりと戦力を貯えるとともに、さらにスケールの大きい作戦計画を樹てていた。すなわち、中国筋を押える毛利輝元と連絡をとり、呼応して秀吉を討滅すべく、まずこれに働きかけた。このとき、輝元の許には、流浪の将軍、足利義昭が身をよせている。勝家が義昭の京都復帰を迎える、という形で協力を誓う文書が今も残っている。

「三月二十日以前に必ず江北に出陣いたし、働きをお目にかけます」

二月十三日付の吉川元春あての手紙にはそう書いている。そして、じじつ、その計画は寸分の狂いもなく進められていた。

まず、二月二十八日、先発の前田利長が、雪の中を近江にむけて出陣した。このとき、前田利家・利長父子は勝家の麾下に属し、利家は能登七尾城を、利長は越前府中城を守っていたが、まず先陣を承って出発したのは、前田利長であった。

周知の通り、利家はかつて秀吉と同僚だった。出自や信長とのつながりからいえば、利家の方が一段上だったといっていい。その彼が、いまや秀吉に出しぬかれた形になっていることは心中はなはだおもしろくない。この時点で利家が勝家と組んで秀吉の行手を阻もうとしていたことはたしかで、だからこそ、娘を北庄城に人質として送りこみ、いよいよ同盟を堅くしてもいる。若い利長にいたっては、父親以上に秀吉への闘志をむきだしにしていた。

「ぜひ、この度は先手を仰せつけられたい」

気負いに気負って出発した。もちろん近江へ越える峠の雪は深い。これについて、勝家は、足利義昭の臣、真木島玄蕃あてに、

「雪が深く、とうてい馬の足の立つところではないのでありますが、無理にも雪を割って出発いたしました」

と決意の程を披瀝している。

利長が道をつけると、続いて三月三日、加賀尾山城（のちの金沢城）主、佐久間盛政を主力に、弟の勝政（彼は柴田姓を名乗っている）、原房親、不破光治、金森長近らが次々と出発した。中で

も盛政は勝家の姉の子で、二十九歳の若年ながら、猛将の聞えが高い。十二歳の権六のほか男の子のなかった勝家は、彼を息子同然に愛しもし、誇りにもしていた。

四日にはいよいよ勝家の本隊が北庄を発つことになった。すでに具足をつけ終っている勝家の前に、勝栗と昆布の膳を運び、お市は酒を注いだ。

「御武運をお祈り申し上げます」

「うむ」

勝家は一気に杯をあおった。髭の濃い頬はひきしまって、眼光も鋭い。あの夜惚れ惚れとお市を眺めていた彼とは別人のように見える。いまや羽うなりをたてて飛び立とうとしている猛禽(もうきん)にも似て、構えのどこにも隙がなかった。勝家をみつめるお市の眼にも、きびしい光が湛(たた)えられている。いつかの夜ちらりとみせた信長ゆずりの容赦のない瞳で、彼女は杯を飲みほす勝家をみつめていた。

北庄はまだ雪に蔽われている。ただ城の周囲の道だけが、人馬に踏み荒されて、薄汚れてみえた。

「さ、御出発です」

お市は娘たちを促して九層の天守に上った。

城内に群れた鎧武者たちの殺気立った興奮はお市たちの居間まで伝わって来ていたが、今ここから見送る出陣の列は、いやに物静かである。薄墨色の道を、一筋の人馬が、まるで影絵でも動くように、ゆるゆると流れてゆく。その影が雪の彼方に吸いこまれるまで、お市はじっと天守に

立ちつくしていた。

勝家の本隊と、前田利家の能登勢とあわせて、約二万。十二日には近江の柳ケ瀬に着陣した。すでに先発隊はその前面に散開し、木之本付近に放火し気勢をあげている。血気にはやる前田利長にいたっては、長駆関ケ原まで足をのばし、あたりを焼払って来たという。

このとき秀吉は伊勢に出陣していたから、勝家は、何ら抵抗をうけることなく、近江に進出することができたのである。

もっとも、それ以前に秀吉は、勝家の進出を予想して、北国街道沿いの丘陵に城砦を設け、味方の部将を配置はしている。が、勝家が柳ケ瀬まで来たときは、そこで早速戦闘が行われるという情勢ではなかった。

勝家側にとって事は極めて有利に展開したといえるだろう。彼らは長路の雪中行軍の疲れを癒す期間も持ったし、秀吉側の防備をつくづくと眺めて、おもむろに自陣を展開する余裕も持ち得たからである。

ここでやがて両者の戦場となる柳ケ瀬付近から、木之本周辺にいたる一帯を概観しておきたい。琵琶湖の東岸沿いにひらけた平地は、北へいくに従ってすぼまり、湖の尽きるあたりに来ると、東側からぐっと山が迫って来る。その平地の北限にあるのが現在の木之本町だ。一方、町の西側――つまり湖ぞいにも丘陵が折りたたまれ、東西の山地にはさまれて、細々と北国街道が一筋走るばかりとなる。

秀吉はこの木之本に本陣をおき、弟の秀長を秀吉の留守を守る大将格にして木之本の北方一キ

ロにある田神（上）山に陣取らせた。秀吉の胸算用としては、勝家が平地に進出する前に徹底的に打撃を与えるつもりである。野戦に強い柴田勢に平地に出て来られては、具合が悪いからだ。そこで秀吉は、

——されば。

と、さらに山地へ北進して、前進基地を街道の東側にある東野山におき、ここに堀秀政をおいた。一方、街道の西側にある天神山にも砦を築き、ここに勝家から寝返った勝豊の部将、大金藤八郎、木村重茲（隼人佑）、山路正国（将監）を入れた。街道の両側の高地から、進んでくる柴田勢を挟み打ちにしようというのである。

「むずかしい所だぞ、ここは」

と、秀吉は堀秀政に言ったという。悪くすれば山中に孤立し、全滅することになるかもしれない。そのときは彼は秀政を見棄てるつもりだった。

が、勝家もさるものだ。北国街道を南下して来るなり、秀吉の作戦を看破してしまった。

——ふふふ、むざむざ挟み打ちになる俺と思うか。

さらば、と彼も対抗策に出る。まず自分の本営は柳ケ瀬の西北、内中尾山（四六〇メートル）においた。そしてその東南に高くそびえる行市山を睨んで、

「あそこに盛政、勝政ともども入れ」

と命じた。この行市山は五五〇メートルで一番高い。ここなら本陣への連絡も便利だし、敵味方の行動が手にとるようによくわかる。とりわけ秀吉の築いた天神山の砦などは丸見えになって

しまう。さらに前進基地として、行市山の東南の、中谷山、林谷山、橡谷山（とちだにやま）などに原房親、不破光治、金森長近らを入れ、その間に通路を作り自在に行き来できるようにした。これらの砦と行市山の間にある別所山に前田利家父子をおいたのは、多少監視の意味もあったかもしれない。どうやら利家の許には秀吉から和睦の密使が来たらしく、しだいに疑わしげな色が加わって来つつあったからである。

この利家の動向を別にすれば、勝家の布陣は、後世の軍事専門家が見ても完璧なものであった。いかにも彼らしい堂々たる風格をもった正攻法の陣備えだ。彼はこのとき決戦を急いではいない。

――今はまだまだ。相手を威嚇すればこと足りる。

長期戦を覚悟していた。その間に中国の毛利も足利義昭を擁してやってくる。伊勢の滝川一益も、そうやられてばかりはいないし、岐阜の信孝も、もう一戦挑む準備を怠らないでいる。そうして、大きく包囲網をひろげて秀吉を包みこむ。それが彼の狙いだった。

一方の秀吉はどうか。勝家動く、の報が伊勢に到ると、

「来たか」

たちまち長浜にとって返した。最も気がかりだったのは、やはり勝家の動向だったからである。早速先鋒を柳ヶ瀬あたりに進出させ鉄砲を打ちかけさせたが、これに応ずる気配がない。一本調子の勝家がしゃにむに押し出して来ると思いのほか、とんとその手に乗らないのである。

――長期戦のつもりだな。

いささかあてがはずれて、相手の陣営をつくづくと眺めた秀吉は、やがて、

——これはまずい。

ひそかに舌打ちした。勝家の進軍に備えて作った天神山の砦は、行市山からまる見えではないか。

「こりゃあいかん、退れ」

山路正国や木村重玆を急いで南一キロほどの所にある堂木山と神明山に下げた。そうしておいて東野山の堀秀政の陣地との間に連絡濠を掘って防備を堅くし、さらに、第二線陣地として、数キロ後方の街道の西側の岩崎山と大岩山に陣地を作った。もし堂木山、神明山の備えが崩れたら、ここで防ごうという計算である。ここには高山右近と中川清秀をおいた。

これで街道沿いの守りは様相が変ってかなり堅固になったが、この大岩山の西には、じつは余呉湖という湖がある。琵琶湖の雫が一滴北に落ちたとでもいうような小さな湖で、周囲を山でかこまれている。この余呉湖と琵琶湖の間はごく狭く、屏風を立てたような山で隔てられている。この四二〇メートルほどの山が賤ヶ嶽である。ここに登ると、琵琶湖の北端も、余呉湖も一望のもとに見えるし、新しく陣地を築いた大岩山とは尾根続きである。晴れていれば、堂木、神明の諸陣から、柴田側の行市山、橡谷山、林谷山まで見渡せる。秀吉はここへ大岩山の後詰と物見をかねて桑山重晴を入れた。重晴は、秀吉の盟友丹羽長秀の部将で、長秀自身は海津にあって出動準備をととのえている。

このほかにも秀吉は蜂須賀正勝、生駒甚介らを遊軍として不時に備えるとか、諸部将を大幅に入替えている。

さて、公平に見て、ここまでの布陣で両者の勝敗を占うことはむずかしい。勢力は柴田四万四千、秀吉側六万六千といわれているが、どちらも実数はかなり下廻るのではないか。ただ、秀吉側の方が数においては優勢だったことはまちがいない。

しかし、戦いは、兵の数によってきまるものではない。秀吉側にはかなりの弱味がある。一つには彼が伊勢の滝川一益と交戦中で、兵力の全部を北陸路へ投入できなかったことだ。もう一つは、勝家側の布陣を見てからの陣地替えである。いわば敵前での作戦変更だから、これはかなり危険が伴う。おそらく行市山の佐久間盛政はこれを逐一眺めていたに違いない。俄か出来の陣地は、それだけ防備も手薄だから、秀吉側は、つけこまれるだけの隙を見せたことにもなる。もっとも、結果からみれば、盛政は、皮肉にも、

——隙を見つけた！

と思ったことによって、自らの墓穴を掘るのだが、しかし、この時点においては、少なくとも秀吉側は敵につけこまれそうな隙があったし、勝利の女神は勝家側に微笑みそうな素振りを見せていた。いや、これだけではなかった。女神は、第二、第三の勝機ごときものを、勝家側にちらつかせさえしたのである。

勝機らしきものが、ついで勝家側に訪れたのは、秀吉側の陣替えの行われた直後である。長浜城主、柴田勝豊が病死したのだ。その前の年の暮、彼は叔父の勝家を裏切って秀吉側についている。原因は、勝家がもう一人の甥の盛政を重用したり、実子の権六を愛して、養子となっていた

彼を疎んじたからだともいうが、ともあれ勝家側からすればいくら憎んでも憎みたりない忘恩の徒である。

その勝豊が、この風雲急な折に死んだのだ。

――そうれ見ろ、天罰てきめんだ！

誰もそう思ったに違いない。とりわけ、勝豊の部将で、さほど勝家を恨んでいるわけでもないのに、主人の命令で心ならずも秀吉側についていた連中の動揺は激しかった。

――やっぱりなあ……。

――明日はわが身？

ひそかに顔を見合わせる思いだった。あたかもこのとき、柴田勝家みずから兵を動かして、東野山の堀秀政を攻めている。このときは小手調べ程度で、勝家も砦を落すことはあきらめて、まもなく引退ったが、このことは、勝豊の家臣である山路正国たちを恐怖させた。

――いよいよ始まるか。

何しろ勝家は鬼柴田の異名がある。その猛攻ぶりは、これまでの合戦で十分見聞きしている。

――東野で小手調べをしておいて、今度はこっちに攻めて来られるのであろう。

彼のいる堂木山は、まさに秀吉側の第一線である。そこへ勝家の主力が襲いかかって来たら……。考えただけで足がすくむ。その上、自分たちは裏切者だという心の弱味がある。しだいに居ても立ってもいられない気持になって来た。

勝家はこれを見逃さなかった。彼を馬鹿正直な武辺一筋の男と思うのは大違いだ。戦国武将が

武力戦と同じくらい重視したのは諜報作戦で、血を流さずに行う戦いにも勝家はかなりの実績を持っている。げんに毛利輝元にしきりに働きかけているのもその現われだし、こうした大名相互の駆引から、正国のように動揺している武士の一本釣りまで利用できるものは何でも利用するのが戦国武将のやり方なのだ。

その山路正国と勝家のひそかな連繋がついたのは四月十日すぎ。勝家は正国を越前丸岡城十二万石の城主にするといって招いたらしい。このとき、正国は、神明山にこもる木村重茲にこっそり使いをやった。

「忙中閑、明朝、茶一服参らせようと存ずるが如何」

隼人佑重茲も勝豊の遺臣である。

いよいよ戦機の熟したいま、急造のこの砦をどう防ぐか、いろいろ談合もいたしたい、という申入れに、重茲は一も二もなく承知した。ところが、その夜遅くなってから、重茲の砦に足音をしのばせて近づいて来た男がいた。

「誰だっ」

見張りの男が一喝すると、

「しっ、静かに……」

暗闇から制しておいて、相手は一段と声を低めた。

「隼人佑どのに至急お目にかかりたい」

「誰ぞ、そなたは？」

「怪しい者ではない。野村勝次郎と申しあげてくれ」
勝次郎もまた柴田勝豊の遺臣のひとりで、現在は正国の手に属している。粗末な根小屋の奥に通されると、勝次郎は無言で刀を投げだした。害意はない、という意志表示である。そのまま、するすると重玆の小脇に近づくと、
「御用心めされ」
囁くように言った。
「明朝の正国の招きにお出あってはならぬ」
「なんと！」
ぎょっとする重玆の耳許で勝次郎は続けた。
「正国は御辺を討つつもりじゃ」
「げっ、この俺を」
「そうよ、そなたの首は手土産がわり」
「な、なにっ」
「気づかなんだか、正国め、寝返りをうつつもりで居るわ」
「う、む、む」
「首をあげるを合図に火の手をあげ、しめしあわせた北国勢を引き入れる、と手はずもきまっている」
「む、む、正国め！」

重茲は太刀を引っつかんで立上っていた。
「そうと知ったら、こっちから討ちにゆく」
「まあ待て、急ぐな」
それよりまず味方に知らせるべきだ、と勝次郎は提案した。
「それには、急に虫気が起って、明日はゆかれぬと言って油断させておけばいい」
が、重茲の伝言を聞いた山路正国はぴんと来た。
「さては、洩れたな」
あたりを見廻すと、つい今しがたまでいたはずの野村勝次郎の姿が見えない。
「む、む、勝次郎め」
今度は正国が唸る番であった。もうこうなっては一刻も猶予は許されない。即刻単身で砦をぬけだし、勝家の陣営に走ることにした。
「いいか」
正国は腹心の小者を呼びつけて言った。
「長浜にいる母者や女子供を、そっと連れだし、舟に乗せてお連れ申せ」
落合う場所を言いふくめて、取るものも取りあえず、同志二人と砦を脱走し、勝家の本営に飛びこんだ。このとき憐れをとどめたのは正国の母や妻である。小者の手引きで巧みに長浜はぬけだしたものの、琵琶湖上を舟で逃げる途中、秀吉側の見張りに捉えられ、秀吉の本営に突出された。戦陣における裏切りは、最も重罪である。

——見せしめのため。

として、彼女たちは、正国のいる柴田方の砦の近くで逆さ磔にされた。

正国の脱走は、半ば成功、半ば失敗というわけだが、ここでひとり秀吉側の人員が飛び込んで来たことは、勝家側に、一人の味方を増やしただけではなかった。正国はこのとき、柴田方が喉から手が出るほど望んでいた情報をもたらしたのである。

それは、秀吉の動静である。

「秀吉はいま近江にはいない」

彼はそう言ったのだ。

勝家の来襲に備えて陣替えを行った後、秀吉は慌しく伊勢に向った。後世の我々は各種の史料でそれを確かめ得るが、このとき、柴田側は、秀吉の動静が摑めていなかったのである。

行市山の佐久間盛政は、敵側の慌しい移動を見て、

——さては筑前めが采配を振っているな。

と見当はつけたものの、その後もまだ秀吉が木之本付近にいるのか、それともどこか他にいったか、そのあたりの様子がわからず、情報を摑むのに苦慮していたのである。

「まちがいはないな」

盛政は正国に念を押した。

「相違ありませぬ、木之本の本陣から様子は聞いております。只今、伊勢の形勢が芳しからぬ由で、ただちに出発したとか」

「よしっ」

盛政の決心がついたのはこのときだといっていい。敵の総大将の所在を摑むことができたというのは天佑だ、と思った。勝利はまさに我方にあり、と狂喜したのも無理はなかった。

この時代の情報戦のすさまじさが、あらわに見てとれるのは、その後数日間の両軍の動きである。

——秀吉、伊勢にあり。

その情報は、たちまちのうちに柴田側から岐阜の織田信孝の許にもたらされる。その途中に秀吉軍が頑張っているのに、どうして？　などと考えるのは当時の状態を知らない解釈である。現代の吾々は、電信、電話に馴れきって、それ以外の情報の伝達方法に信をおかないが、それがなければないで、当時の人々はさまざまな知恵を働かせる。そして情報は驚くべき速さで、目指す相手に伝えられるのである。いくら見張りがいようが、情報は風のように早く、影のようにするりと、その間を通りぬける。

そう考えなければ、このときの、謎は解けない。山路正国が柴田陣営に転りこんだのが四月の十三日。そして、その三日後には、岐阜の信孝が兵を挙げ、秀吉に属していた美濃清水城主、稲葉一族、大垣城主、氏家直通らの所領に放火しているのだ。

そのすばやさ！　伊勢、美濃で呼応して作戦行動を起し、その隙を狙って勝家自身が南下を開始する。慌てて秀吉が近江にとって返すとき、信孝・一益が呼応してその背後を衝く……。こん

なみごとな連携プレーはないであろう。もっとも秀吉の方も、これにも増して情報網が完備していて、

——信孝め、またやる気か。

予想通りだ、と素早くとって返して大垣に向った。と同時に約束を破ったのを楯に、安土に預けられていた信孝からの人質——母と乳母は、たちまち殺されてしまった……。

たしかに秀吉の切返しも鮮かである。が、この時点では、むしろ勝家の作戦計画が上々のすべり出しをみせた点に注意を払うべきであろう。勝利の女神は、ここでも勝家に向って微笑をしているかに見える。

さらにもう一つ。裏切者の正国は、盛政を狂喜させる情報をもたらした。

それは、余呉湖の東岸にある大岩山が、砦としてはひどくお粗末なこと。守りについている中川清秀の手勢も少ないし、山つづきの岩崎山にある高山右近についても同じことがいえること……。

——う、うっ……。

聞いているうちに盛政の喉が思わず知らず鳴った。

——これだっ！

と思った。柴田勢は戦線膠着にやや苛立ちはじめている。信孝の挙兵に呼応して近江の平野に打って出たいが、柳ケ瀬から南下する北国街道は、あまりに狭隘だ。一気に押し出そうとしても、道の両脇に頑張る東野山の堀秀政や、神明山の木村重茲らが鉄砲を打ちかけて来れば、莫大な被

害をこうむるであろう。

が、もし中川清秀のいる脆弱な第二陣、大岩山を奇襲し、これを陥落させれば、柴田側は、堀・木村らの背後を襲うことができる。虚を衝かれて色めき立つ彼らをはさみ打ちにし、反転して木之本の本営に殺到すれば、敵を潰滅させることは不可能ではない。しかも秀吉とその主力は、いまや岐阜に向っているのだから、急を聞いても、とうていすぐに踵を廻らすことはできないだろう……。

気負いこんだ盛政は、内中尾山の勝家の本営まで飛んでいって、滔々と意見を申しのべた。四月十九日の正午ごろのことである。はじめは勝家は、その案にあまり乗り気ではなかった。

「おもしろい。が、危険が多すぎる」

勝家の方針はあくまでも長期戦である。いたずらに攻めて兵力を疲らせるより、三月でも半年でも、損耗を防いでこの状態を続けたい、と彼は言った。勝つことよりも、むしろ負けないという手堅さで、秀吉を圧迫してゆく。そして、日本全国の反秀吉勢力と連帯して窮極の勝利を狙う。戦術家としてよりも政治家としての思惑に彼は賭けていたのだ。

が、盛政はきかなかった。

「戦いは機です。これだけの好機はもう来ないかも知れぬ。それを摑まないとは叔父上らしくもない」

敵の陣地は脆弱だ。しかも総大将秀吉はいない。正国の裏切りで、勝豊の旧臣たちは動揺しているに違いない。

「それに岐阜の三七殿（信孝）と協同作戦をしようというのは、かねてからの計画ではありませんか。その三七殿がいま筑前の大軍を向うに廻して戦っておられる。どうしてもここは打って出るべきです」

そうしなければ、勇将勝家の名がすたれる、というような言い方で、盛政は叔父に迫った。そして、勝家も遂に最後は盛政に説き伏せられた。盛政に言われるまでもなく、戦機は我に有利である。天性の戦術家である勝家の嗅覚は、はっきりそれを嗅ぎわけている。

――今、討たぬという手はないな。

やみがたい誘惑に体がうずく。遂に戦術家勝家が政治家勝家を圧倒する瞬間がやって来た。

「よかろう、やってみるがいい」

盛政は雀躍りした。

「では叔父上の本営も街道沿いにお進み下さい」

東野山の麓、街道沿いの狐塚まで進出して堀秀政を牽制することを要請した。このとき勝家が最初から最後まで盛政の献策に反対だったという説もあるが、これは一種の結果論であって、勝家を傷つけまいためにすべてを盛政の独断専行にしてしまおうとする見方にすぎない。じじつ彼は狐塚まで進出し、堀秀政の兵と接触している。勝家もまたこの一戦に賭けていたのである。

すべて戦機は自陣に幸いしている。勝家も盛政も負ける気がしなかった。そしてこのとき、勝家側が上げ潮と重なった分だけ、秀吉は不利な立場にあるように見えた。山路正国の裏切りについては、痛手は最小限に抑えはしたが、勝豊の旧臣の間に動揺が起り、戦意を喪失していること

はたしかである。とすれば、街道の西側の第一線はひどく脆くなっている、と見なければならない。

——堀秀政は見殺しにするよりほかはないな。

半ば覚悟をしたはずである。

その上、岐阜の戦線にも、思いがけない齟齬を生じた。伊勢からたちまち身を翻して大垣に駆けつけたものの、折悪しく豪雨のために合渡川が氾濫し、渡河できなくなってしまったのだ。

「ちっ、川さえ渡れば、三七の軍など一揉みなんだが」

歯がみしてもどうにもならない。が、岐阜戦線できわめて不利な立場に立たされたその事が、後に彼の運命を逆転させるのだが、そのことに彼はまだ気づいていない。まして盛政がこれを悟るわけもなく、彼の率いる奇襲部隊は、すでに行市山を出発していた。

佐久間盛政の部隊が行市山を出発したのは二十日の午前一時頃だった。不破光治、徳山則秀、原房親らもこれに従った。いわば主力を投入したわけだが、帰趨に怪しい所のある前田父子は、これに加わらせなかった。それでも別所山から南へ二キロほど移動させている。

このときの盛政勢の夜中行軍は、山を下って池原に出て、集福寺坂を越えて塩津谷に出て、さらに権現坂を越えて川並に達したといわれている。川並は余呉湖の西北岸のあたりである。そこから余呉湖の西岸の間道を通り、南から少し東に廻りこんで大岩山を窺った。このとき、盛政は弟の勝政の手勢を権現坂から峯伝いの道を南進させ、賤ケ嶽の西北の切通しに前進させた。賤ケ

嶽には前に述べた通り桑山重晴がいる。彼が盛政の進撃に気づいて動こうとしたら、彼らに圧力をかけさせようというのである。一方、前田利家の部隊は、川並の西北部にとどまり、佐久間勢の背後をバック・アップする形をとった。

これは大迂回作戦だ。

右に左に峠を越え、道なき道を強引に進んで、大岩山を背後から襲おうというのである。

夜のしらしら明けに、部隊は余呉湖の東岸に出た。朝霧はまだ濃く湖面を蔽っている。天女の伝説を持つこの湖は、さながら古代の夢をむさぼるかのように静まりかえっていた。

と、その中に墨絵のような影がにじんだ。近づけば、何やら話声も聞える。物見がしのび寄って耳を澄ますと、濁み声の男たちが、二匹の馬の脚をひやしてやっているのだった。幸い霧にかくれた佐久間勢の姿には全く気づいていないらしい。

「さあて、よし」

「来う、ほいほい」

馬を岸に上げて大岩山の方へ戻る気配である。

「帰って飯でも炊ぐかなや」

どうやら中川清秀の陣営の軍兵と知れたとき、盛政が無言で顎をしゃくった。先鋒の数人がばっと駆け出す。たちまち、

「ぎゃおっ」

けものじみた断末魔の声が霧をゆるがせた。不意をつかれた兵士は、あっけなく首をあげられ

ていたのだった。時をおかず、盛政の采が、さっと空を截る。

「かかれっ」

雄叫びとともに全軍は、ぐわーんと大岩山に突撃を開始したとき、俄かに霧がはれはじめた。たちまち大岩山の砦は大混乱に陥った。彼らは北国街道へは不寝番を立てるほど神経質になっていたが、背後から敵の襲撃をうけることなど、夢想もしないでいた。

「退くなっ、退くなと言うに」

清秀が声をからしてわめいても、態勢をたてなおす余裕さえもない。指揮をとりながら、清秀は、岩崎山を守る高山右近と、賤ケ嶽に陣する桑山重晴に援軍を頼んだ。が、右近の返事は至極冷淡で、

「それぞれ独自に働こう」

と言って来た。じじつ右近には援軍をさしむける余裕などはなかったのである。一方の桑山重晴は、早くも大岩山の形勢の非を見てとって、

「大岩山を棄てて、此方に合流せられよ」

と言って来た。しかしこのとき、大岩山の戦況は、峯伝いに逃げることすらできない処まで追いこまれていたのであった。それでも清秀はよく戦った。その間に背後に廻った佐久間勢が根小屋に火をかけたので、清秀は街道側に退却することもできなくなった。

「今はこれまで！」

悲壮な切込みを行うこと二度、清秀はじめ全員が討死をとげたとき、巳の刻（午前十時）に達

していた。史料には清秀の手勢千人とあるが、実際はもっと少なかったであろう。その彼らが四時間以上も休まずに戦いぬいたのである。

盛政の奇襲作戦はみごと成功した。清秀の惨敗を知ると高山右近は戦わずして岩崎山を放棄し、田神山の羽柴秀長の処まで後退していた。一方賤ヶ嶽の桑山重晴も浮足立って来た。勝ちに乗じた盛政は使者をやって退却をすすめた。二人はまんざら知らない間柄ではなかったので、かえって戦いたくなかったのかもしれない。

「もう大岩山も岩崎山も陥落した。次は御辺の陣を攻める順序だ。砦を明渡すとならば、わざわざ一戦を交えるにも及ばないのだが……」

と、重晴も鄭重に返事をよこした。

「御好意かたじけない。今、当方は無勢、御辺と戦って手柄を立てることもできないだろう。が、さりとて、戦わずして退くのも武士の一分が立たない。だから昼間の間だけ、お互いに空鉄砲を撃ちあって戦っているようなふりをし、夜になったら砦を降りる。明朝代って御辺がここに入られよ」

もうこれで賤ヶ嶽も制したも同然だ、と盛政は意気軒昂たるものがあった。こうなると、勢いというものはおそろしい。堂木山、神明山にいた柴田勝豊の遺臣たちは、とりわけ動揺がはげしく、先を争って内応を申し入れて来た。一方、あたりの土民たちも、盛政の許へ来て、旗差物をいただき一戦仕り、働きをお目にかけたいとしきりに申し出た。兵農分離の行われていないそのころ、勝者について手柄を樹てれば、末は大名になるのも夢ではなかったからだ。

つまり、誰も彼も柴田側が勝った、と思ったのだ。じじつ、街道の東に頑張る堀秀政勢を除けば、湖北、余呉のあたりは、まさに盛政に制圧されたも同然で、秀吉色はほとんど払拭されてしまっている。通説では、このとき勝家がしきりに盛政に退却を命じ、それを聞き入れないのを怒って、

「盛政め、俺に腹を切らせる気か」

と言ったことになっているが、これは例の結果論でしかない。天正十一年四月二十日、たしかに盛政は勝っていた。退却せよということからしておかしいので、いったいどこへ退けというのか。すでに陣形は変化している。大岩山攻撃は、局地戦ではなかった。ちょっと相手を叩いてすぐひっこむという戦いとは質の違う戦いが行われたのである。

むしろ唯一の失敗といえば、狐塚まで進出した勝家が、堀秀政を倒すことができなかったことだろう。彼が秀政を敗北させ、北国街道で盛政と合流し、勢いに乗じて木之本へ押しよせれば、秀吉到着より前に、この方面一帯を制圧することができていたかもしれないのである。

ここまでの秀吉は全く運に見放されている。盛政の進攻、中川清秀の苦戦の報は、二十日の昼過ぎ、大垣にもたらされた。

「――う、う、来たか」

さすがの秀吉も顔色を変えた。

が、この瞬間、「機」がわずかに動いた。こうなると、雨に阻まれて前進できず、大垣に止ま

っていたことが、かえって幸運をもたらしたのである。岐阜まで行ってしまっていたら、情報の伝わるのも遅かったし、反転して近江に駆けつけるにも時間がかかりすぎたであろう。

そして、距離にすれば、合渡川岸から岐阜城まで、時間にすれば一刻足らずのその時刻が、奇妙な巡りあわせで秀吉の運命を助けるのだ。このとき、通説では、盛政がまだ大岩山の辺にいると知って、

「これで勝ったぞ」

と大喜びして馬に鞭をあてて近江に向った、ということになっているが、これも真相とは程遠い。

ともかく秀吉は帰らなくてはならなかった。ぐずぐずしていれば勝家が近江路に押し出して来るからだ。勝つどころの騒ぎではない。身を挺してその進出を阻まねばならないのだ。幸い川があふれているから、岐阜の信孝が追尾してくる心配はない。今までの不運の条件だった川の氾濫が、僅かながら、秀吉の側に幸いした。

まず彼は先発隊に、美濃から木之本までの沿道にたいまつを用意させた。いずれ本部隊の出陣は夜になるから、その行軍を容易にするための処置である。一方、別働隊を長浜に走らせ、領内の百姓たちに、炊き出しを命じ、飯と豆を通過部隊が自由に食べられるようにした。これは一万五千といわれる本隊の出発にあたって糧食を用意する時間を節約したのだ。それに、到着と同時に戦闘開始するつもりだったから、それまでに腹ごしらえをさせてしまおうという計画だったのである。

このあたりのすばやさが秀吉の本領であろう。もっともこれを可能にしたのは、それまで十年間、彼が長浜を中心にした近江の地を本拠とし、勢力を培って来たことにあるのだが……。

秀吉はまず午後二時、数騎を従えて大垣城を飛びだした。一刻も早く木之本に着き、秀長以下に指示を与えるためである。本隊は四時ころ出発した。木之本まで約十三里の道を五時間で踏破したというから、かなりのスピードである。

木之本に着くなり彼は早速、盛政勢への反攻を命じた。

——ともかく食いとめろ。近江平野に出すな。

これが至上命令である。盛政勢は二十日の午前一時から行動を開始しているから、ほとんど一日近くろくに眠りをとってない。疲労の極に達したところへ襲いかかれば有利この上もない。

ところが、盛政もさるものだ。おびただしいたいまつの光を見て、

——これは?……。

とっさにぴんと来た。秀吉がとって返した、と直感したのである。

——ふうむ、さすがは。

早すぎる到着に舌を巻いたが、同時にぱっと方針を変更して全員に退却を命じた。すでに夜はふけている。二十四時間ほとんど戦いと行軍に過した兵士達だったが、盛政の鮮かな指揮に従って、もと来た道を通って後退を開始した。出陣の途中通過した権現坂まで部隊を引きあげたら盛政はここで態勢を立直し、秀吉と一戦するつもりだった。が、それより先に、早くも秀吉の先鋒は殿軍と接触しはじめている。秀吉は木之本に集結した後、息もつかずにその西方の黒田を突切

り、観音坂を越えて大岩山の近くの茶臼山に出て、攻撃を開始したのだ。しかも盛政勢も、これを相手に戦っては退き、戦っては退きして、整然たる撤収ぶりを見せた。

加うるにここの地形は複雑である。追撃は、一方面だけから行われたのではない。例の桑山重晴も、中途で海津から駆けつけた丹羽長秀に励まされて賤ヶ嶽にとって返して来ている。

このあたりから盛政の戦運には翳りが濃くなって来る。盛政の退却作戦をかばって、賤ヶ嶽方面からの秀吉方の攻撃を一手に引受けたのは柴田勝政である。が、相手方の軍勢は見るまにふくれあがって来た。黒田から茶臼山を経て秀吉の主力陣もここに進出して来た。秀吉自慢の旗本精鋭部隊が柴田勢のほんの一部にすぎない勝政勢に槍先を揃えて攻めこんで来たのである。勝政はよく戦った。賤ヶ嶽からなだれ落ちるように襲いかかる秀吉勢を小人数の手勢で防ぐこと数刻、しかししだいに敗色が濃くなって総崩れになる。盛政の後を追うもの、飯の浦から塩津へ向おうとするもの、急峻をころがり落ち、鎧も甲も投げ棄てて、笹の茂みにかくれるもの、さきに中川清秀が味わった以上の悽惨な敗戦を経験させられる。二十四時間経たないうちに、勝者は敗者の座に転落したのである。

一方主力の盛政は権現坂に到達したが、ここでも誤算が起った。このとき、彼は、側面にあった前田利家父子の軍勢と合体して反撃に出るつもりだったのだが、盛政の期待を裏切ってすでに彼らはこの地を棄てていた。盛政退却の報を耳にするや否や、彼らは早くも塩津谷に降り、疋田から木ノ芽峠を越えて府中へ逃げ帰ってしまったのである。このとき、利家らは隣りにいた神明山の木村重茲らの追撃をうけ部将を失ったりはしているが、どうも秀吉からの密使をうけ、計画

的に敗走したような臭いがする。

ともかく悽惨な戦いだった。『賤嶽合戦記』は、このときの戦いを、

「賤ヶ嶽近辺は、敵御方の死骸にて、駒のふみど（踏む所）もなかりける」

と書いている。その激戦地で秀吉の直属部隊の武士達が次々と手柄を樹てた。これが賤ヶ嶽の七本槍というのだが、実は感状を与えられたのは七人よりも多い。福島正則、脇坂安治、加藤嘉明、加藤清正、片桐且元、平野長泰、糟屋武則、桜井左吉、石川貞友、がそれだといわれ、後になると、誰と誰を入れるか入れないかなどと議論にもなったが、「七本槍」じたいが一種の俗称だから、それほど気にすることはない。なおこの中の加藤清正が討取ったのが、例の山路正国である。

もちろん手柄を樹てたのはこの数人だけではない。当時の戦闘に従った渡辺勘兵衛はこう書いている。

「手柄があったのは七人だけではない。自分もかなりの働きをしたのだが、太閤さまが、後に御手廻（親衛隊、すなわち正則・清正等）に槍を使わせて勝った、と仰せられたので、その他の面々は骨折損になってしまった」

と、やや恨めしげに書いている。この勘兵衛は、秀吉の養子、秀勝の配下で、直属部隊のように秀吉に親しい存在ではなかったから、せっかくの手柄も無視されてしまったのである。清正・正則らは、戦後二、三千石の加増があり、とんとん拍子に大名にのしあがってゆくが、運が悪ければ働いてもなかなか出世できない。そんな呟きがここにはある。

ところで、山中の盛政勢が潰滅すると、残るのは北国街道ぞいに進出して来ている勝家の本隊だけである。

「それ、追えっ」

秀吉は孤立した勝家勢に全兵力をぶつけた。戦わないうちから勝敗はすでに明らかなようなこの戦いだが、勝家にとって、生涯にこれほど不本意な戦いはなかったかもしれない。もちろん敗け戦さが不本意なことは当然だとしても、それ以上、やりきれない思いだったのは、この日彼は全力を出しきることなく、ずるずると敗戦に追いこまれてしまったからである。

——生涯に一度のときなのに、これは何としたことか。

どうしてそうなったか、自分でも納得がゆかない。はじめはたしかに勝家は勝機を握っているはずだった。が、狐塚までいって、堀秀政に戦いを挑んだとき、どうしたわけか、これがなかなか落ちなかった。

それでも彼はまだ、たかをくくっていた。というより局地戦で兵力を損耗させるより、勝負は木之本の秀吉本営との戦いにある、という思いが強かったのだ。そのため、戦さに身が入らなかったのだろうか、目の前の小砦にすぎない東野山はどうして落ちない。秀政の激しい抵抗に遭ってどうしてもその先へ進めないのだ。

——こんなはずはないのだが……。

首をかしげているうち、夜中から大岩山のあたりで鉄砲の音がにわかに激しくなった。これは？　と思ううち、秀吉の反攻と、盛政の潰走が伝えられて来る。遂に彼は盛政と連絡がとれぬ

うち、盛政勢は西北へ潰走し、彼のみが北国街道に取残されてしまったのだ。

気がつくと、七千の手勢はいつのまにか半数以下に減っていた。戦わないうち、臆病風に襲われて部下は逃げだしてしまったのだ。あれよ、と思う間もなく、足許の砂山が波にさらわれるような頼りない状態に陥り、不面目きわまる形で彼は自軍の敗北を認めねばならなかったのだ。

――これが負けるということだな。死ぬということだな。

どこか他人ごとのようにそう思う自分がいる。そして、もう一人の自分がそれに肯いている。

「もう逃れられぬ。ここで最後の一戦をするというわけだ」

全力を出しきっての戦いならこうではあるまい。もう少し悔みもし、憤りもするであろうのに、歯がみをする口惜しさが湧いてこない。それに代って、ごく自然なかたちで「死」が寄りそい、牀机を並べて自分に語りかけて来る感じなのだ。不本意な結末をつきつけられたことで、かえって勝家は一人だけ勝敗を超越した別の世界に飛び移ってしまったのかもしれない。が、周囲はそれを納得しなかった。

「お待ちを、しばらくお待ちを……」

飛び出して来たのは二十五歳の小姓頭、毛受勝介である。

「このようなところで討死をお覚悟遊ばしてはなりませぬ。かりにも柴田修理亮どのともあろう方が、御帰国も遊ばされぬということはありませぬ」

言いかけて勝介は涙を拳で拭い、きっと勝家を見あげた。

「お馬印を賜わりとうございます」

勝家になりかわって、ここを防ごうというのである。

「もうよい、勝介、それには及ばぬ」

勝家が首を振るのをききいれず、勝介は馬印をもぎとるようにして、勝家に出立を急がせた。

——心ならずも……。

という思いがふたたび勝家の胸をかすめた。

生き残ることは不本意だ。どのみち死ぬ自分ではあるが、しかし、この期に及んでは、勝介の志をうけいれてやらねばなるまい。それが死にゆく者どうしの共感と礼儀かもしれぬ……。

敗軍の列に押し流されるようにして、勝家は椿坂を越え栃ノ木峠を下った。あれだけ勝機をわがものにしていた柴田勢は、潰滅に近い形でいま北に向って走り続けている。

——戦いというものは、そういうものかもしれぬ。

馬上の勝家は黙念とそう思い続けている。

——勝介はもう生きてはいまいな。

死者が死者を思うような静かな親近性だけが、勝家の胸を埋めている。たしかに、そのころ、毛受勝介は兄の庄左衛門と共に三百の手勢を率いて、みずから鬼柴田と名乗って秀吉の大軍を二度、三度と突きくずしつつ、壮烈な戦死をとげていたのであった。

敗将

北庄の城にいるお市は、まだ勝家の敗北を知らない。隊伍を乱した柴田勢が、我勝ちに栃ノ木峠を越えて潰走を始めたころも、だから、

——勝つ。きっと勝つ。

しきりにそう思い続けていた。すでに勝家軍が行動を開始したことは、早駆けの使者で知らされている。

「いよいよでございますぞ」

奥へその知らせをもたらしたのは、中村文荷斎（ぶんかさい）という、勝家側近の法師武者である。

「なあに、殿は、信長公に従って出陣なされて以来、敗けた事のないお方でございます。おっつけ、よい知らせが入りましょう」

文荷斎がひどく確信ありげにそう言ったのは、ひとつには、この城に来て半年にもならないお市に不安を与えないためしかった。

――お輿入れ早々、殿の御出陣では、お心細くていらっしゃいましょうが……。

そう言いたげな表情はありありと読みとれる。お市はそれに対して、黙って肯いたが、内心その心遣いが煩わしくもあった。

――心細い？　まあ、そんなこと！

本当はそう言いたいところだった。この勝家の出陣こそ、お市のひそかに望むことであったのだから。もちろん、口に出して、出陣を強要したわけではない。が、自分がここにくれば、必然的に勝家が戦いに打って出なければならないことを見越した上で、彼女は勝家との結婚に踏みきったのだ。いや、実をいえば彼女は勝家を戦いに巻きこむべく、ひそかな決意をもって北庄に乗込んで来たのである。

それはなぜか？

甥の信孝が懇願したからか。その甥が可愛かったからか。

決してそうではない。お市はすでに甥たちの腑甲斐なさに絶望している。

――あの子たちは、兄上の血を一つもうけついでいない……。

いや、そう思ったからこそ、お市は自分が立つべく決意したのである。もし信雄なり信孝に、信長の跡を継ぐだけの器量があったら、お市は黙って世の動きを見ていたろうが、このままにしていたら織田家は音をたてて崩れてしまう。お市は誰よりもその事を感じずにはいられなかった。十代からすでに政争の波に揉まれつづけて来た彼女は、崩れつつある織田家を誰が狙っているかを、一瞬のうちに読みとっていたのである。

その男は、羽柴筑前守秀吉――。

表面は信長の長男信忠の遺児、三法師を押したてて、忠義顔を装っているものの、彼の野心は歴然としている。それが彼女には直感できる。

お市は秀吉を許せなかった。忠義面をして織田家を崩壊させるような男は生かしておけない、と思った。が、信孝にも信雄にも、正面切って対抗する力がないとすれば、それに替る者を、この戦さに引込まねばならぬ。

――亡き兄上のために、織田家のために……。

お市は、兄と共に半生を織田家のために戦って来た。その兄が亡くなったいま、素手で織田家を支えるのは、自分しかない。そして、女の身で織田の家を支えるためには、自分の身代りとなって秀吉と戦う人間を選ばねばならない。そう思ったとき、お市は躊いなく、勝家に賭けたのである。勝家には秀吉のような謀叛気はない。駑馬のごとく実直で、信長に対してはその死後も忠誠心は全く変らない。そして戦いと聞けば向うみずの強さでぶつかってゆくのは、この勝家だけなのである。

もちろん、これは誰の前でも言えることではなかったが、いまや、お市の描いた見取図は、期待通りの様相を呈しはじめて来たようだった。柴田軍移動の報に続いて、佐久間玄蕃（盛政）の大岩山での大勝利の報が北庄に到着したからである。

「殿は信長公の旗下で一番強いお方です、そして玄蕃殿は、柴田勢の中で一番強いお方でございますからな」

文荷斎は雀躍りせんばかりの足どりでお市の部屋に駆けつけて来ると、息をはずませてそう言った。

「これで、秀吉めの布陣は総崩れです。岐阜では信孝様も御奮戦の由でございますし、猿めの首を見るのはもう、間近でございましょう」

すでに戦いは終った、と言わぬばかりの口吻である。

「もうすぐ殿も御凱陣遊ばしますからな」

お市を慰めるように文荷斎は付け加えた。

「ありがとう、大儀でした」

このときも言葉少なに答えたが、実をいえば、お市はそれほど勝家の帰城を心待ちしているわけではなかった。これこそ文荷斎には絶対に知られてはならないことだったが、嫁いで以来、日が経つにつれて、お市はなぜか勝家がうとましくさえなって来ている。

——この人は、私にとって是非とも必要な人なのだから……。

無理にもそう思いこもうとしたが、しかしだめだった。粗野な動作、女心に対する鈍感さ、気になりだすと、近づいて息を吹きかけられるのも嫌わしかった。まして夜の床を共にするとき、お市は眼を閉じて、そのひとときの過ぎるのを待つよりほかはなかった。

抱き方に不満があるわけではない。むしろ勝家は逞しく、瞬時ふっと気を失いそうな眩惑を感じるときもありながら、そのことが、彼への愛着に変ってゆかないというのはどうしたわけか……。陶酔のあとに、お市を襲って来るのは果てしもない荒涼たる思いだったのである。

男と女の中には、理屈ではどうにもならない感情――いや、感覚のあることを、北庄に来てお市ははじめて知った。戦国大名家の女の常として、お市は自分の感情や感覚を抑制することに一種の自信を持っている。それは義務としての忍従ではなく、誇りを賭けた抑制でもあった。

これは大名家の娘が生れつき持ちあわせた本能のようなものだった。好きの、嫌いの、といって怒り、笑い、そして泣き、心のままに動くのは、庶民の男や女のすること、誇り高い名流の女はむしろそうしないことが生きるあかしなのだ、と、お市は信じていた。

これは女だけではない。男はもっとそうだ。たとえば、兄の信長は、いかにも自由奔放に生きているかに見えて、その実、常に許し、包容し、周囲に気を配って生きている。世に言われるような短気者では決してないことを、お市は誰よりもよく知っていた。自分に反旗を翻した荒木村重をも、彼は最後の最後まで許そうとしていたし、第一、自分の夫、浅井長政に対しても、その裏切りを何度か許そうとした。

――それが政治というものだ。

ということを、お市は皮膚で知っている。自分の感情をどこまで自分の力で制御できるか、それが、大名の運命を決定するのである。

お市はだから自分の感情に対する抑制力にかなり自信を持っていたといえる。どう仕向けたら男が喜び、自分を愛するようになるか、そのことはすでに浅井長政に嫁いで以来の日々に知りつくしている。

じじつ、勝家は簡単にお市に心を奪われた。むしろ、お市が呆れるほど単純に、ときには彼女自身が頬を赤らめるほど素朴に生一本に愛情を傾けて来た。その意味では、お市は完全に勝家を虜にしたといえるだろう。もちろん、女として愛されて不満があるはずはない。が、そうなった後で、お市は、身内から湧き出て来る一種のおぞましさに気づきはじめたのである。

——私としたことが……。

簡単に抑制できると思った感覚が思いのままにならないことに、お市は戸惑った。

このおぞましさはどこから来るのか。勝家をなぜ自分は好きになれないのか。顔か、態度か。それもあろう。しかし、そんなものだけではない。いってみれば、お市の中にあるこの違和感に気づかない、どうにもならない相手の鈍感さだ。

——この人は、私を愛し、そのことだけで満足している。人の気持などてんでわかろうともしない。

考えてみれば、彼は常にそうだった。ずっと以前、信長と弟の信行との間に、複雑な対立があったとき、信行側についていた勝家が、信行ともども頭を剃って降参して来たことがある。このとき、信長はやむなく信行を許したのだが、勝家はそれを単純な肉親愛と受取って手放しで喜んだ。もし信行が殺されることでもあったら、自分が代りに死ぬつもりだったと言ったが、じつは狡猾な信行は、それを計算に入れて勝家を連れて来たのであって、また信長は弟のその狡猾さを見抜きながら、やむを得ず、眼をつぶって彼の命を助けたのである。

——あの時も、この人は周囲の微妙な感情のからみあいをちっとも気づかなかった。

幼な心に、その鈍感さ、愚直さにひどく苛立ったことを、お市はいま思いだす。

——この人のそういう性分は全く変ってはいない。

自分が満足なら相手も当然そうだ、と思いこんでしまうこの単純さ。彼にあっては愛は自己満足以外の何ものでもない。

が、お市はその男に賭けたのだ。あるいはその鈍感さも、何分の一かの計算に入っていなかったとはいえない。そしてその賭けは、いま明らかに成功しようとしている。

——でもその代り、私は、ひきかえに、これから先、どのくらい、この男の鈍感さに耐えてゆかねばならないのか。

兄は勝家の愚直さに腹をたてながらも、それに耐え、みごとに彼を使いこなした。

——しかし、私は？……。

男と女の中には、どうこらえても我慢しきれないものがあるような気がする。佐久間盛政の勝利に酔いしれている文荷斎の前で微笑しながら、お市は頬が少しずつこわばりかけてゆくのを感じている。

もっとも、柴田勢の捷報は一時のことだった。やがて佐久間盛政が大岩山の砦を放棄して徹退を開始した、という知らせが、北庄にも、もたらされた。

「どうしたのでしょう。なぜ退くのですか」

お市は少し不安になった。

「さあて……」

文荷斎も首をひねるばかりである。

「戦略にかけては随一の玄蕃どののことですからな。何か深いお企みでもあってのことではないかと存じますが」

言いかけているところへ、矢継ぎ早に到着したのは、盛政潰走の知らせであった。文荷斎の顔色も変っている。

「これは容易ならぬことになりそうでございますぞ」

「それにしても、殿は？　殿はどうしておられるのか」

お市がたずねても、

「さ、その辺のことは何とも……」

自信のない答え方をする。

「殿と玄蕃は別の所におられる、とそなた申したではありませぬか」

「は、はい」

「では、なぜ殿は打って出られぬのか。むざむざ玄蕃を見殺しになさるおつもりか」

「いや、そのようなことは」

「それとも――」

言いかけてお市は言葉を呑みこんだ。悪い予感がしたのである。すでに勝家と盛政は連絡のとれない状態にあるのではないか……気がつくと、文荷斎は腰を浮かしかけている。

「文荷斎、どこへいくのですか」

「支度をせねばなりませぬ」
「何の？」
「殿や玄蕃殿を城内にお迎えする支度を」
早くも彼は事の重大性を感じとっているらしい。
お市はきっと唇を噛んだ。戦場馴れしたこの老武者の勘は、あるいは正しいかもしれない。
しかし……。
足早に立去る文荷斎には眼もくれず、お市は、部屋の一角を凝視した。
——勝つ。何としても勝たねばならぬ。

そのころ、勝家はすでに府中の城下を過ぎようとしていた。城には勝家の退却以前に逸早く戦線を離脱した前田利家、利長親子が帰りついている。退却にあたって、彼らの後尾は、秀吉勢に追いつかれ、多少の損害は出しているが、まず兵力はそのまま温存しての撤収だったといってよい。

これに比べて、勝家の姿はみじめだった。乱戦の中で親衛隊さえ散り散りになって、従うものは、僅かの七騎。気がつくと、勝家の手にした槍の柄さえも折れていた。向って来た敵と無我夢中で渡りあい、何人かを突き倒した覚えがある。ふりかぶって来た太刀を危うくかわした事も一度や二度ではなかった。

——その時、柄の折れたのにも気づかない俺だったのか……。

府中まで来て、やっと勝家はわが身をかえりみる余裕を取戻したようである。

と、それをひそかに窺っていた男がいた。利家の旗下の大井久兵衛直泰という侍である。彼は勝家の顔に見覚えがあった。たった七騎の供に守られて、人目をしのんで通りすぎようとする彼らの様子を見定めるなり、彼は城内に走りこんだ。

「殿っ、殿っ」

利家はそのとき、奥の書院で、息子の利長と二人、声を低めて何事かを語りあっていた。

「御免っ」

直泰は、敷居口に手をつかえ、修理めが、いま、御城下を、と息せききってそう言い、じっと利家を見上げた。

「討取るなら今でございますぞ」

長年勝家と行動を共にして来た主人が、北近江の陣払いをした瞬間から、心はすでに秀吉側に動いているのを、直泰は見逃さなかったのである。

その言葉が終らないうちに、利家はぬっと立上っていた。後姿を直泰の押殺した声が追う。

「供は七騎。鉄砲を持った者は一人もおらぬ、と見ました。槍の柄も折れ、落武者のていたらくではございますが、しかし、御油断は遊ばしますな」

それも耳に入らぬげに、利家は歩いてゆく。廊を過ぎ、広間を過ぎ、縁先に突立つと庭先に群れる侍たちをじろりと見やってから、割れんばかりの大声をあげた。

「門を開けっ」

侍たちの中にどよめきが起ったとき、さらにそれを圧する大声が彼らの頭上に轟いた。

「今、柴田修理殿、城下をお通りある。鄭重にお迎え申せ」

それだけ言うと、利家自身、足早に城門に向っていた。

やがて勝家主従は、府中城内に招じ入れられた。皆ひどく疲れきった様子をしている。額に血をにじませた者、具足の引きちぎれた者、足をひきずる者……。それでいて、眼玉が飛びだしそうに緊張しきった面持でいるのは、俄かに城門を開いて迎えいれてくれた利家の真意を量りかねているからである。

が、その中で勝家だけは、その枠外にあった。身なりもほとんど乱れてはいなかったし、あたかも、茶会か能見物にでも誘われたような落着いた足どりで、ゆっくり床を踏みしめてゆく。むしろ先導役の利家の方が、頬をひきつらせ、肩に力を入れて、一点を見据えたまま、こちこちになって歩いているのに気がついた侍も多かったのではなかったか。

やがて奥の居間に一行が招じ入れられると、襖はぴったり閉ざされた。中では何が語られていたか、それを知る者はほとんどなかった。

——首尾はいかに。

ひとり大井直泰は気を揉んでいる。何度も部屋に近づいて耳を澄ませたが、どちらの声も聞きとることができなかった。

と、しばらくして、襖がすっと開かれた。思わず駆けよった直泰の問いかけを無視するように、利家は言葉短く言った。

「湯漬けを」
「は？」
「急ぎ支度せよ」
直泰の眼を拒むように、再び襖はぴたりと閉ざされた。やがて湯漬けが運びこまれたかと思うと、しばらくして、人々が座を起つ気配がした。
ひとときの休息が、落武者たちに生気をよみがえらせたのであろう。どの顔からも、疲労の色は薄められて、廊下を辿る足どりも軽かった。中で来たときと全く変らないのは勝家だった。早からず遅からず、あたりの風物に眼をとめるでもなく、さりとて一点を見据えるでもない静かな視線の遊ばせ方をして廊下を歩み去った。白いもののまじった髭面には、漠たる清々しささえあって、彼一人は、何か別種の空気に包まれているようにも見えた。
さすがに利家はそれに気づいているようだ。そして、その空気の透明さが、彼を圧倒しているらしい。初めに勝家の一行を迎え入れたときとは又違った、ある苦渋をにじませた緊張感を背負って、むしろ足取りは重かった。
城門には、すでに乗替えの逞しげな馬が用意されていた。馬上の人となった勝家は、無言で一礼すると、なおも城外まで見送ろうとする利家を軽く抑えて鞭をあげた。早くも遠ざかりかける八騎と利家の顔を交互に見比べながら、大井直泰が、
「殿――」
言いかけたとき、ふりむきざま、その胸倉をむずと摑んで、引寄せながら利家は嚙みつくよう

に言った。

「うぬっ、うぬめらに何が解るかっ」

ぐっと引寄せられたなり、はずみをつけて突放されて、

「うわっ」

直泰は仰向けに投出された。全く事情を知らない周囲の侍達は突然の狂気に似た城主の振舞をただ呆気にとられて眺めるばかりだった。

このとき、利家は、直泰の卑怯な献策のみを責めたのだろうか。

——そんな士道にはずれた事はできぬ。男の道は別にある。

と、直泰に眼にもの見せてやったのか。いや、このときの利家の胸裏は、それほど単純なものではなかった。

もちろん、彼には、はじめから勝家を殺すつもりはなかった。武士の情というよりも、これはむしろ戦国武将らしい打算によるものである。

——今殺すのはまずい。

ともかく、勝家はそれまで彼の指揮官だった。その指揮官が一敗地にまみれたところを襲ったら、世評は芳しくないにきまっている。

——それに、猿めには、それほど忠義立てする義理はないわ。

羽柴秀吉は利家にとって、かつての同僚である。明智光秀を討取って以来、陽の出の勢いにあることは、決しておもしろい事ではなかったし、げんに勝家が賤ケ嶽の作戦に成功していたら、

その尻馬に乗って、一挙に秀吉を打倒してやれという腹づもりもないではなかった。が、それでいて、彼はひそかに秀吉からの密使も迎え入れている。

——いざというときは中立を守ってくれ。

秀吉がそう言って来たとき、ぬかりなく応諾の返事を与えているのだ。利家は明らかに二股かけて、このときの合戦に臨んでいたのである。だから佐久間盛政危うしと見てとったとき、さっさと兵を退いたのは、臆病風に吹かれてのことではなく、勝目のある方へ賭けようとしていた彼の、予定の行動であった。

彼の撤退が盛政軍の潰滅を決定的にしたことを勝家が気づいていないはずはない。さすがに気が咎めるところもあったし、ここで勝家の敗走を冷然と傍観することは、自分の裏切りを証拠づけるようなものではないか、とも思った。

——とすれば、ここで……。

利家は何か一手打つ必要を感じたのだ。それに、思えば勝家とのつきあいも長くなっている。すでに、ろくな前途も残されていないこの愚直な男への一掬の友情がないわけではない。

城中に勝家を迎え入れた利家が自然饒舌になったのはこのためだった。

「いや、これは思いがけぬ造作にあずかる。かたじけない」

急に老の目立った勝家がぽつりと言うのをさえぎるように利家はしゃべりたてた。

「この度の合戦、いかにも無念」

「いや、某も幟奉行を一人失いました」

「なあに勝敗は時の運……」

が、気がついてみると、勝家はかすかに微笑を浮かべて肯いているばかりである。愚直で単純なこの男を手もなく感激させ、丸めこめると思った利家の狙いは明らかに外れたようだ。その心のゆらめきが、彼の舌をいよいよ滑らかにした。

「さ、ともかく、北庄へ御帰城の上、人数を集めて一戦を試みられよ。それまで、某、この城で力のかぎり秀吉めを支え申す」

「御供も七騎では心許ない。某の一手をお連れ下され。いや、お望みなら何百騎なりと」

しかし、勝家は、ゆっくりとかぶりを振った。

「かたじけないが、今の勝家には、そのような望みはござらぬ。いや、すでにこれまで数々の御助力、勝家感謝のほかはない。北陸路の盟友として、よく戦って下された」

「いや、何の……」

利家は続く言葉を持たなかった。と、勝家は、ふたたび微笑した。

「たって所望せよと仰せられるならば、では湯漬け一椀馳走にあずかろうか」

その湯漬けを食べ終えたとき、彼は言ったのである。

「明日は秀吉がここに来よう。御許は秀吉と年来の昵懇(じっこん)だ。無用の流血は止められよ。我らとの盟約は今日限りとし、家の安泰を計られるがいい」

「あ、いや、それは……」

慌てて遮ろうとする利家を制して、勝家はさらに付加えた。

「それは今、我が願うところでもある」

絶句したまま利家は首を垂れた。

――この男は何もかも見透している。

北近江での自分の行動のすべてを知っていながら、何も言わずにこの男は立去ろうというのである。愚直で単純なだけだった男が、どうしてこうなってしまったのか。

それが死を背負った者のみの持つ明快さだと覚ったとき、利家はぎょっとしてその場に立ちすくむ。そして勝家が立去った後、彼に残されたのは、自己嫌悪に近い敗北感と、やり場のない苛立ちだけであった。とも知らず顔を近づけた直泰に「うぬに何が解る」と怒鳴りつけたのは、その苛立ちのためであったか、わが心までを糊塗するためであったか……。

すでに勝家の姿は利家の視野にはなかった。敗走の報は、いまや北庄のお市の許へも、届いたはずである。

夜の宴

たった数騎の兵士に護られて、柴田勝家が北庄の城に辿りついたのは、天正十一年四月二十一日の夕刻である。法師武者中村文荷斎をはじめ、留守をあずかっていた連中に迎えられて、本丸の広間に入ったなり、勝家はお市の前になかなか姿を見せようとしなかった。

——顔をあわせたら何といおうか。

——いや、夫は何と言うであろうか。

お市は心の苛立ちを抑えながらそのときを待った。しぜんに思い出されるのは、小谷城で同じような立場に立たされたときのことである。戦う度ごとに信長に押され気味だった浅井長政は、ひどく扱いにくい男として、お市の前に現われた。傷つけられた自尊心、無念の思い、それらが屈折して彼を黙りこませるのだ。しかも、お市に向けられる視線には、濡れた刃物のような無気味さがあって、うっかりしたことでも言おうものなら、その場で切って捨てられそうな気さえした。あの息づまる思いが、また、お市の皮膚によみがえって来る。が、違うのは、勝家の戦った敵

が、長政の相手とはまるきり違うことである。むしろ、今のお市は、あのときの長政の心情を分け持った感じでいる。

——やはり、駄目だったのか……。

勝つ、必ず勝ってみせる——と今の今まで力んでいたのに、目の前にあるのは、むざんな現実だ。

——では、この後をどうするか。

その対策をまず夫の口から聞きたかった。なのに、夫はなかなか奥に姿を現わさない。

「どうしておられるのか、御様子を拝見して来なさい。お手が空かれたら、こちらで御休息遊ばすように申しあげて——」

傍にいた侍女のちかにそう言った。

「はい、ただいま」

小走りに駆けだした若いちかは、やがて戻ると、

「まもなく行くと仰せられました」

と報告した。しかし、その後、いつまでたっても勝家はやって来なかった。

「どうなさったのでしょう」

若いちかの使では心許ない。今度はお市の心の隅々まで知りぬいているかのをやることにした。

と、まもなくかのは帰って来たが、お市はその顔を見るなり、勝家はなかなか戻って来そうもない、と直感した。

「何やら、御軍議が長びいておりますようで」
かいのは声を低めてそう言った。聞くなりお市は立上がっていた。
「ちょっといって来ます」
先方が来なければ自分が行くまでだ。いや、この大事な折にどうするかを自分も知らねばならぬ、とお市は小走りに広間へ急いだ。勝家は広間の襖を背に大胡坐をかいている。周囲をかこむように坐っているのは、留守を預かっていた、柴田弥右衛門尉、小嶋若狭、中村文荷斎などという面々である。戦場に臨まなかった彼らの中で、勝家ひとりが戦塵にまみれ、さすがに頬のやつれが見えるが、その表情は思いのほかにおだやかで、
——来たか。
というふうに肯いてみせて、お市を傍に坐らせると、彼の顔は、そのまま前に坐っている十四、五の少年武者に向けられた。どうやら彼はその少年を、しきりになだめている様子である。
「いいのだぞ、十蔵」
老爺が孫をさとすような口調で、勝家はその少年に言った。
「志はありがたい。が、今からすぐ発て。府中では利家が待っていよう」
「いや、殿——」
必死の面持で遮ろうとする少年に、ゆっくり勝家は肯いた。
「そなたは利家の婿だ。それに年も若い。ここにいるには及ばぬ」
「お言葉ながら」

思いつめた表情で、十蔵と呼ばれた少年は勝家を見上げた。
「私の父、帯刀はいったん殿に背いて信長公の直参となりましたが、不慮の事に巻きこまれて落命仕りました。その折、私はまだ幼く、前途おぼつかない有様でございましたのを、殿の御情により、ふたたびお召抱えに預かりました。只今、婿・舅の縁をよいことに府中に逃れるようなことは到底できませぬ。お願いでございます。どうか、お傍において下さいますよう」
がばとひれ伏す十蔵を、勝家はしばらく無言で見ていたが、やがて、ぽつりと言った。
「そうか、この城に籠ってくれるか」
十蔵はぱっと顔をあげた。
「お許し下さいますか。ありがとうございますっ」
一礼すると敏捷に座を起った。
と、入れ替りに、片手を首から吊り、足をひきずった男が現われた。見るなり、勝家は、
「おう、市左」
立上がるようにして男に声をかけた。
「傷はどうした。痛むか」
「いや、たいしたことはありませぬ」
市左と呼ばれた男は、松平市左衛門。賤ケ嶽の合戦で負傷し、一足先に戻って来たのである。
「大儀だったな」
勝家は一語一語に力をこめていたわった。

「この上は早く加賀へ戻って療養につとめるがいい」
市左衛門の所領は加賀にある。と、それを聞くなり、
「これは異なことを」
と、相手は気色ばんだ。
「なんでおめおめ加賀に戻れましょう」
勝家はなだめるように言う。
「もう、そなたは十分の働きをしている。帰って休んでくれ」
「殿っ。殿は某に恥をかけと仰せられるか」
「いや、そのようなことは――」
「そうではござらぬか。今に及んでおめおめ命長らえよとは、お言葉とも思えませぬ。何のこれしきの傷、もう一働きしてお目にかけます」
勝家は、まじまじと市左衛門をみつめた。
「そうか。働いてくれるか」
落着いた、静かな口調であった。それは聞きようによっては、差迫った籠城について語っているというよりも、出発を延ばしてもう一晩泊ってゆくと言う旅人を受入れているような響きがあった。そしてこの事は、お市に奇妙な違和感を感じさせた。
――今にも秀吉の軍勢が迫って来るというのに。
それよりするべきことはほかにあるのではないか。それをなぜ、夫はゆったり構えて時間を浪

費しているのか。気が気ではなくなって、

——ちょっとお話申しあげたいことが……。

と言いかけたとき、町人ふうの男が現われた。見るなり、

「おう、おう、玄久」

今度は、本当に勝家は座を立った。

「どうした。達者か」

「ま、どうやら」

町人にしては無躾(ぶしつけ)な言い方をした男は、勝家の前で懐ろ手をしたまま突立っている。

——なんと無礼な男か。

お市は心の苛立ちを押えかねた。ところが、勝家は、玄久を咎めるどころか、近くにさしまねいて、お市をふりかえった。

「この男はな、豆腐屋の玄久よ」

「これは、これは、御内室さまであられますな」

と、玄久は、お市に対しては、さっと形を改めて平伏した。町人にしてはすっきりと整ったその作法にいぶかったとき、勝家は言った。

「この男、昔の古なじみでな。合戦に出て、右手を失った」

懐ろ手をしていると見えた訳がやっとわかった。勝家の言葉を引取って、玄久はお市の方を向いて続けた。

「もう武家奉公は叶わなくなりましたその折、憐みをかけられ、豆腐屋になれと仰せられましてな、以後年ごとに大豆百俵を下しおかれました」

「うむ、このごろは、なかなかそなたの豆腐もうまくなったようだな」

勝家の頬に笑みが浮かんだ。

「左様、大分うまくなりました。それで今日はここにこうして参りましてな」

「馳走してくれるとは忝い。が、今日は豆腐をおいたらすぐ帰れよ。帰ったら山の中へでも逃げこんでおれ。今にも秀吉めがやってくるわ」

「これはいかなこと」

狂言めいた口調で、玄久は首をゆらゆらと振ってみせた。

「豆腐を今日の分だけおいて帰れとは、これは心得ぬ。この玄久、そのような了見で参上したのではありませぬ」

「ほう、そりゃ、どういうわけか」

「来世までもお傍にあって、毎日豆腐を作って進ぜようとして参りましたので」

「なに、来世の分までもか。こりゃ奇特な」

勝家は破顔大笑した。

お市の違和感は、その間に少しずつ募っていった。帰城して来た勝家に挨拶に来る家臣たちは、その後も続々と絶えなかったが、気をつけてみると、いずれも未経験な若者や、病人や、腰のま

がった老人ばかりだった。領国の全力をあげて出陣した柴田勢が崩壊したいま、残っているのは、そういう連中だけだということを、改めて思い知らされた感じである。

——これでは、秀吉の前でひとたまりもない。

思わず唇を噛みたくなる状況であるにも拘らず、勝家が、ひどく間のびのした態度で彼らに対していることにお市は苛立った。

——いったい、この人は、何を考えているのか。危機は眼前に迫っているのに……。

敗軍の衝撃に、平衡感覚を失ってしまっているのか。そういえば、彼は重大なとき、まるきり見当はずれなことをやるようなところがあった。お市は例の信長と信行の対立のとき、終始歯車のあわなかった勝家のことを思いだしていた。ひどく力みかえっていながら、まったくその事件の底にある真相に気づきもしなかった救いようもない鈍感さ、それが、ふっと、甦って来たのである。

——そういう男を伴侶に組んで戦おうとした私がまちがっていたのか。

悔いても返らぬ無念の思い、失敗をまざまざと見せつけられているという、どうにもならない屈辱感——。いま、お市は、長政のあのときの心情を自分の意識に重ねあわせて、黙りこくっている。

家臣たちの挨拶の列はやがて絶えた。それはつまり、それほど籠城できる武力は残り少なだったということでもある。お市とともに奥にひきあげた勝家は、小袖を着かえ、やっとくつろいだ表情を見せた。

「お茶々たちは元気か」
堅い表情で肯くお市を、勝家は、まじまじとみつめた。
「どうした？」
「……」
「刃のような眼をしている」
お市はぎょっとして勝家を見、急いで眼を逸らせた。かつて長政の瞳の中に感じたのとそっくりの思いを相手が持っていることに、不意をつかれたのである。
ややあって、思いを鎮めてから、お市は、きっと首をあげた。
――言わねばならぬ。
しぜん気合のこもった口調になった。
「秀吉は、いつ攻めてまいりましょう」
「そうさな、明日――」
言いかけて、遠くを見るような眼を勝家はした。いつか戦陣に臨む武将の表情になって、
「明日はまちがいなく来る」
ゆっくりと言った。
「とすれば、今のうちに、手配りもせねばなりませぬ」
「案じるな」
その言葉には、むしろ悠然たる響きがあった。それから、お市の顔は見ずに、

「それぞれが、俺に命を預けに来ている」

淡々たる口調で言った。

「死ぬには及ばぬ者までがな。しかし、そう言って止める場合と、それと知りながら受入れてやらねばならぬ場合とがある。いま俺はそれを受入れた。受入れてやらねばならぬときだと思ったからだ」

そして受入れる以上、一人一人に対して、それなりの挨拶をしてやらねばならぬ、と勝家は言いたかったのかもしれない。

勝家は虚空をみつめていた。その瞳が、お市の上に戻って来たのは、しばらくしてからである。そこには微笑と見まがうような静謐な光が湛えられていて、

「さすが上様は、凡人の及びもつかぬことを仰せられたな」

思いがけなく、信長のことを持出した。

「人間が、本気で命を棄てる覚悟をするのは、一生に一度だ——とな。覚えているか、あのときのことを」

「は？」

「信行さまとのお仲違いのあったときだ。あのとき、俺は、信行さまに代って命を差しあげるつもりだった、と申しあげた。いや、織田家のためにはいつでも命を投げだす、と申しあげたとき、上様は、むしろ御不興げであられた。そう軽々に申すな、と——」

「……」

「そして仰せられた。人間が命を棄てようというときは、めったにないものだ、とな」

ふと、勝家の眼がなごんだ。

「そうそう、そなたもそこに居た。まだほんの乙女であったが……」

お市は眼を伏せた。

「まこと、上様の仰せの通りであった。命を棄てるときは一生に一度しかない」

そして、そのときが今なのだ、というように勝家がゆっくりと肯いたとき、お市の肩がぴくりと震えた。うなだれたまま眼を閉じ、お市は塑像のように動かなかった。

翌二十三日の朝、すでに秀吉方は北庄の城下に殺到していた。蟻の這い出る隙もないという形容そのままに、ひしひしと城を取囲んで気勢をあげる彼らに対して、勝家の手勢は、ほんの一握りである。すでに覚悟をきめているらしい勝家は、驚く様子もなく、

「来たか」

九重の天守からその布陣を見降し、

「旗差物を城壁にあるかぎり立てよ」

と部下に命じた。いかにそれらをこれ見よがしに城壁に押し立てたところで、勝負にならないほどの劣勢は誰の目にも明らかだ。が、彼は敢えてそれを命じた。これは虚勢ではなかった。敗北の予感におびえて、逼塞（ひっそく）していてはならない、ひるんではならない、という心意気を、敵にも味方にもしめしたかったのだ。

それは生涯を戦いに徹して来た彼の、自らの最期をみつめる余裕でもあり、死の美学でもあった。たしかに彼は、常に剛毅に戦って来た、そして戦いに敗れた今も、その姿勢を通そうとしたのである。このことは、寄手の秀吉の胸にもすぐ響いたらしい。城を見降す丘に登って、手をかざした秀吉は、

「さすがに権六よ」

と、嘆じ、左右に、なみの侍にはできぬことだ、武将のたしなみのほどよく見ておけ、と洩らしたという。

こうしておいて、勝家は手勢を二の丸、三の丸に集めた。鉄壁の守りを誇る北庄だが、いまはその広大さが、わが手に余ることを感じたからである。総構えはまもなく、破られるだろう。少ない手勢を分散させて脆い負け方をするより、総力を結集させて、最後の抵抗をしようと決めたのである。

果せるかな、秀吉方は手薄を見てとって、傍若無人に城下を焼立てて外堀の際まで押し寄せ、そこに竹束を積みあげると、いっせいに火をつけた。

今や北庄の城は火の海の中に孤立した。北国の初夏の空は、黒煙にくすぶり、城兵はまず、その目潰しに苦しまなければならなかった。が、彼らは、主人の心そのままに軒昂たる意気をもって、黒煙の向うに群がる寄手に必殺の銃火をあびせた。もちろん相手からは、それに数倍する鉄砲が射込まれて来る。喚声は天地に満ち、激しい小競りあいが続けられた後、寄手は遂に外堀を突破して、総構えの中になだれこんで来た。

予定の作戦とはいえ、柴田勢は、いまや十間余りの内堀を隔てて、圧倒的多数の寄手と対決することになった。すでに相手の顔の表情まではっきり読みとれる至近戦である。じわじわと堀にとりつき、突破作戦を試みる敵をめがけて鉄砲が炸裂する。もんどり打って倒れた男の上をのりこえて、さらに執念ぶかく次の寄手がせまって来る。まるで大洪水がじわじわと押寄せ、堀を満たすかのように、寄手は屍で堀を埋め尽してでも構えの中に乗り込んでくるつもりらしい。

悽愴な攻防戦を繰返すうちに、夜が訪れ、敵の攻撃もさすがに中止された。

「御苦労だった。よく戦ってくれた。さ、酒を飲んで、今夜はぐっすり寝てくれ」

勝家は残り少なになった守備兵をこういってねぎらった。

決戦は明日、そしてこれが最後の宴になることは、口に出さなくとも誰しもが感じている。城内には明々と篝が焚きあげられ、受持の城門や狭間ごとに開かれた酒宴は、夜遅くまで続いた。

それぞれの部署を廻り歩いて、部下にねぎらいの言葉をかけ、盃を汲みかわした勝家が、奥に戻って来た時、夜はいよいよ更けていた。勝栗、昆布、豆といった型通りの肴のほかに、干鮎、筍、蕗などの小鉢が季節の匂いをたたえ、むしろ華やかな色どりを添えているのは、今まで貯えて来たものすべてが、惜しみなく使われて、最後の宴を飾っているからである。

座につきながら、

「姫たちは？」

勝家はお茶々たちのことをたずねた。

「さきに寝ませました」

うなずくと勝家は盃をとりあげ、お市の酌をうけて一気に飲みほし、
「そなたにも」
と瓶子をとりあげた。二、三献、重ねたあと、侍女たちに盃を廻し、ひととおり終ったところで、眼顔で彼女たちを退らせると、勝家はさらに二、三杯無言で盃を含んだ。それからゆっくり視線をお市にむけた。
「明朝、合戦に先立って、羽柴の陣に使をやる」
「……」
「そなたと姫たちを引渡す手順を、その折にきめようと思う」
お市は身じろぎもしなかった。小さな唇がきゅっと閉じられ、吊り気味の蒼く澄んだ瞳が、ひたと勝家をみつめていたが、やがて、花びらのような唇が、静かに開かれた。
「私へのお気遣いは御無用でございます。殿のお供をさせていただきます」
「なんと」
驚いたように勝家はその唇をみつめた。
「これは異なことを言う。決戦の時の迫った折に、妻子を城より出す。これは戦国の掟だ。わざわざそなたが命を落すまでもないことだ」
「でも……」
お市の言いかける言葉を勝家は抑えた。
「それに、そなたがこの城に来たのは、去年の秋。まだせいぜい半年足らず——。しかもそなた

は故上様のお血筋だ。羽柴にとっても主筋にあたる。よもや疎略に扱うことはあるまい」

「はい、そうかも知れませぬ。しかし私はいやでございます」

きっぱりした口調で言った。

「したが――」

いいかけるのを今度はお市が抑えた。

「殿、殿は昨日、人間が命を棄てるときはめったにない、と兄が申したと言われました。それは一生に一度のことだと……。その一生に一度のことが、いま、私の所にも廻って来たように思われます」

勝家の瞳が揺れた。

「ふうむ」

お市は素直に首を垂れた。

「秋以来の御苦労に御礼を申しあげまする」

「いや、なに、俺は故殿のために戦ったまでよ。故殿の、そして織田のためにな」

――そして私も……。

と言いかけてお市は言葉を呑みこんだ。

――私も織田のために戦いました。お許し下さい、私はわざわざ、あなたさまを戦いの渦に巻きこんだのです。でも戦いは敗れました。これは私の敗北でございます。敗れた以上、その責めは負わねばなりませぬ。

――が、いま、この半年はそれだけではなかったことを感じております。敗れることによって、私は、あなたさまがはっきりわかったような気がいたします。あなたさまと私は、ともに戦いともに死ぬべく運命づけられていたのかもしれませぬ。いま、あなたさまのみつめておられる死の世界を、私も分けもちたい、いえ、それよりほかに私に残された道はない、と思い定めております。

そのことをお市は遂に口に出して勝家には告げなかった。いや、告げる必要を感じなかった。いま勝家は世の勝敗を超えた世界にいる。押せ押せと勝利を目前に息せききっている秀吉などとは全く別の世界にある彼に、いまさら何を告げる必要があるだろう。

夜明けはもう程近い。昼間のあの修羅と怒号が嘘ででもあるかのように、戦場はいま、奇蹟の静寂を保ちつづけている。

ふと、その静寂をかすめる音があった。鳥の声かと思われるそれは、耳をすませても、二度とは聞えてこなかった。

時鳥（ほととぎす）

時は迫っていた。

夜明けを待たず、秀吉は手足をもがれた形の北庄城に総攻撃をかけて来るであろう。その攻撃を恐れるわけではない。いや、すでに、そのときを待ち望む心境に、いまのお市はいる。が、そのときが訪れるより前に、しておかねばならないことがあった。それは、城の一隅で息をひそめている三人の娘たちを、秀吉の手に引渡すことである。

いわばこれは戦場の作法である。いくら殺気立った戦場であっても、協定に従って城を出された子女を勝利者が手荒な扱いをするようなことは決してない。まして、三人の娘たちはお市の娘——したがって信長の姪（めい）にあたる。秀吉にとっては主筋でもあるこの娘たちが、乱戦の中に巻きこまれる気遣いはなかったが、やはりはっきりした形で、正式に彼女たちを敵の陣営に引渡さねばならない。単なる落人（おちうど）ではなく、城主の娘として未来を開くための、それは欠かすことのできない儀式であった。

——そのためには、私が秀吉宛に手紙を書くべきだ。

と、お市は思った。勝家でなく、自分が、それを申入れること。それが母として娘たちに最後にしてやれることである。

そう思いながら、心の底で奇妙なこだわりがあった。お市は、城壁に迫りつつある相手が、かつて万福丸を殺した人間であることを忘れてはいない。

——その相手に、娘をよろしく頼む、と言ってやるのか……。

その思いを、強いてお市は振り棄てようとした。戦いに生きるものは、多かれ少なかれ、そういう愛憎の波をくぐりぬけて来ているのだ。

それに——。

「娘をよろしく」

と書くとき、それはとりも直さず、

「自分は城を出ない」

ということの宣言でもある。

おそらく、城下の秀吉は、戦国の作法通り、自分が三人の娘を連れて現われるものと思っているだろう。そしてみずからの庇護の下に迎え入れたとき、多分、寛大そうな笑みをうかべて近づいて来るに違いない。

——おお、嫌なこと。誰がそなたのような男に……。

あたかも秀吉の笑顔がそこにあるかのように、お市はきゅっと唇を噛んだ。

——私は行かない。

そう胸の中で繰返した。戦いにはたしかに負けた。しかし、私はそなたの前にひざまずきはしませぬ……。

呟きかけて我にかえった。自分ひとりの思いに捉われ、激しく感情を起伏させていた時間は、さほど長いものではなかったのかもしれない。傍らの勝家は、以前と同じ静かな眼差しでお市をみつめている。その眼とひたと向きあって、お市は言った。

「文は、私が書いて羽柴の陣営につかわそうかと存じます」

「それがよかろう」

勝家がゆっくり肯くのを見て、お市は中村文荷斎を呼んだ。

「かのとちかに、姫たちに着替えをさせるように言って下さい。済んだらここへ連れてくるように」

いいつけておいて、筆や墨をとりよせたそのとき、今度は、はっきり闇を截る鳥の声を聞いた。

「ほう、時鳥だな」

勝家は眼をあげた。

「もうそのような時節なのでございますね」

春雪が降りつんでいた出陣の日以来、季節の移り変りにも気づかない毎日だったが、もう初夏は来ていたのである。

勝家はつと立つと、中庭に面した障子を明け放った。

「おお、まだ暗いわ」

さすがに、四方を部屋に囲まれた城の隅のその小庭までは、外の血なまぐさい喧騒は伝わって来ない。夫に従って廊に出たお市は、その闇の重さの中に、今も確実に芽ぶき、花の蕾をふくらませつつある樹々たちの、ひそやかな息づかいを感じた。

そのときである。

お市が、わずかな闇の空間を、音もなくかすめるものの気配に、ふと身を震わせたのは。

たったいま一声を聞かせて通りすぎた時鳥か。

いや、それとも、一瞬尾を曳いて消えた流星か。

あるいはかすかな星のまたたきにすぎなかったか。

勝家は何も気づかなかった様子である。それはもしかしたら、お市だけの錯覚であったかもしれない。

が、そのとき、お市の胸の中に思い定まる何かがあった。部屋に戻るなり硯をひきよせて一気に書いた。

さらぬだにうちぬるほども夏の夜の
夢路をさそふほととぎすかな

墨の色もかわかないその歌を、お市の肩ごしに眺めていた勝家は、

「ほう……」
かすかに肯いたようだったが、やがて彼も筆をとった。

夏のよの夢路はかなき跡の名を
雲井にあげよ山ほととぎす

やや武骨なその筆跡をみつめて、お市は静かに微笑んだ。
「姫たちに、よい形見ができました」
その後、秀吉への手紙をすらすらと書きあげた。
「娘たちを託するのでよろしく頼む」
というそれだけの、淡々たる文章であった。

お茶々、お初、おごうが文荷斎に連れられて来たのはその直後であった。この春お市が作ってやった緋色地に白桃を浮かせた、揃いの小袖を着て、三人は勝家とお市の前に坐った。
「合戦が始まる前に――」
おだやかにお市は言った。
「この文を持ってお城を出なさい。かのやちかを連れて――」
「お母さま」

お茶々が言いかけるのを抑えて続けた。
「輿の支度はもうできています」
切れの長い吊り気味のお茶々の眼は、じっと母をみつめている。母の言葉を一言たりとも聞き逃すまいとするかのように……。ややあって、
「それではお母さまは、お残りになるのですね」
問いつめるような口調になって、
「なぜ？　なぜお残りになるのです」
十六の少女とは思えない、きびしい眼差しがお市に迫って来た。
「なぜ、私たちといっしょに来ては下さらないのです」
「なぜでも――」
怜悧なお茶々は、お市の瞳の中にある無言の答をたちまち読みとったらしく、居ずまいを改めると言った。
「お母さま、私も羽柴の許にゆくのは嫌でございます」
「まあ、そのようなことを言ってはなりませぬ」
「いえ、申します。嫌なものは嫌でございます」
そのとき、突然、お初がお市の袖にすがりついて来た。
「お母さまっ。いやっ、お初もいっしょに死にとうございます」
わっと泣き伏したお初の、姉妹の誰よりも濃い黒髪を、お市は静かに撫でてやった。

「泣いてはいけませぬ。お初……」

それが戦国の掟なのだ。そなたにはそなたの人生がある。それをむざむざ棄てることはないのだ……。さまざまな思いをこめて、黒髪を撫でてやると、お初は、さらに激しく泣きじゃくった。

母のその指先を、お茶々の眼はしばらく追っていたが、やがて、

「お初」

姉らしい静かな声音になって、

「さ、ちゃんとして」

なだめるように言った。

「ちゃんとして、お母さまに御挨拶をなさい」

そこにいるのは、すでに十六の小娘ではなかった。幼い妹たちの手をひいて、健気に未知の世界に踏みだそうとしている、さわやかな決意にみちたその顔を、お市は改めて見直す思いであった。

——みごとですよ、お茶々。

この娘は一番私に似ている、と思った。その勝気さは、おそらく自分以上かもしれない。自分が何も言わなくても、彼女は、自分に与えられた運命を覚ってしまったようだ。神経をはりつめ、どんな苦悩にも立向ってゆこうとしている凛とした面持は、美しすぎるほど美しかった。

この先、はたしてどのような運命が与えられるかわからないが、多分この娘は、生涯この勝気さを持ち続けるであろう、とお市は思った。

そしてお初は……。今は激しく泣きじゃくっているが、父母を失った後も、案外それを負い目ともせず、うまく均衡のとれた人生を送るのは、この娘ではないか……。

お初はやっと首をもたげた。眼尻を押えながら、勝家とお市に一礼した。

「さ、おごうも……」

うながされたおごうは、はじめて、姉たちの蔭から膝をにじらせ、黙って一礼した。それまで彼女が、泣きもせず、騒ぎもせず、終始無言で坐りつづけていたことに、初めてお市は気がついた。

周囲にあふれるただならぬ緊張の中で、彼女一人は、全く別の世界にいるようにみえる。美貌の姉たちに比べて、なぜか一人だけ器量の劣る末娘は事にあたっての反応はいつも鈍い。が、いまのお市には、それが、子供に似合わぬ落着きぶりをしめすもののように思われるのだった。わが娘ながら、どこか捉えどころのない、無口なこの子には、いったいどのような人生が待ち設けているのだろうか……。

ただ、自分でもふしぎだと思うくらい、いまのお市の心には、一種の安らぎがあった。自分が死んでしまったら、この先娘たちがどうなるだろうか、という不安は全く感じられない。お茶々はみごとに自分の代りをつとめてくれるだろうし、一番年下のおごうでさえも、疑いもなくしっかり大地を踏みしめて生きてゆくことであろう。

——母は、そなたたちを信じています。

一人一人にそう言ってやりたかった。

幼いながらも、娘たちはすでに巣立ちの羽づくろいをする若鳥であった。

——そなたたちは私がいないからといって、一生を誤るような、そんな子ではありませんね。

その甲斐甲斐しさを、彼女たちはいつ身につけたのか。手をとって教えた覚えはないが、戦国のきびしい日常の中から、いつのまにか、誰にも頼らずに生きてゆく気構えをわがものとしてしまったのであろう。

「ちとお急ぎ遊ばしたほうが……」

傍らの文荷斎にうながされると、もう一度お茶々は首をまっすぐに立ててお市をみつめ、ゆっくり一礼した。胸にお市たちの辞世と文宮をかかえて黙って立つと、お初とおごうがそれに続いた。

娘たちが座を起った後も、勝家はしばらくお市から顔をそむけていたが、ややあって、

「そなたの顔を見るのが辛い」

ぽつりと言った。

「もう二度と顔を見られぬ、と思いながら娘たちを見送ったその気持を思うと……」

「いいえ」

お市は静かに首を振った。

「そうではございませぬ。いま、私は、ひそかにほっとしております」

「何と……」

「これでいいのでございます」

いまお市には、彼女を取巻く死の世界から、娘たちを生の世界に送りだした、という思いがある。まるで籠の中の鳥を大空に解き放ってやるように……北庄の濠を渡りきったそのとき、彼女たちは、まぎれもなく生の世界へ迎えとられるのだ。

「何かあの子たちに新しい門出をさせたような、そんな気がしております」

お市の白い頬を微笑に似たゆらめきがよぎった。

「先刻あなたさまは、あなたさまのために死のうとしてお城につめかけて来た者たちを、一人一人迎え入れておやりになりました。それとは逆に、私はいま娘たちを、生きながらえよとて濠の外に送り出してやりました。でも、考えてみれば、事の裏と表――私たちは同じようなことをしているのでございます」

「いいや」

勝家は眼を閉じ、顔を歪めた。こみあげて来るものを必死で抑えようとして、声をくぐもらせながら、そっと言った。

「俺も……俺も、そなたを、あの娘たちと同様に、濠の外に送り出してやりたかった」

「ありがとうございます。でも、それを私は幸せとは思いませぬ。娘たちを送り出したいま、今度は、あなたさまが、私を受入れて下さる番でございます」

「うむ、む……」

勝家は、眼を閉じたまま、塑像のように動かなかった。

夜明けの訪れより早く、秀吉方の攻撃は、始められた。侍女につき添われたお茶々たちの輿がその陣営に到着したときの彼の感情の動きを、そのまま反映させたような、性急な、猛烈な攻撃ぶりであった。

秀吉は、お茶々たちが輿から降りるのを見て、わが眼を疑った。

「お市さまは？　お市さまはどうなされた」

落城とともに当然お市は娘たちとともに、自分の陣営にやって来るものと信じていただけに、その驚きは大きかった。勝家とお市の縁はほんの数カ月にしかすぎない。それに、彼はお市と三人の娘の安全は保証する、ということを度々柴田方に申入れている。

それを、いったいどうしたというのか。なぜお市は来ないのか。

戦国の常識では、これは考えられないことであった。

――女が城を枕に討死する？　そんなばかなことがあるものか！

修理め！　と彼は舌打ちした。

――あの修理め、お市さまの色香に眼が眩んで、俺に渡すまい、と片意地張っているに違いない。

そうとしか彼には考えられなかったのである。お市の腕を捉え、刀を突きつけて、死なばもろともと威しをかけている勝家の髭面が、あざやかに浮んで来た。

――修理め！　城を渡しても、お市さまは渡さぬぞ、と嘲笑おうというのだな！

彼の耳には、

――どうだ、やはりそなたの負けだぞ。
そう言っている勝家の声が聞えてくるような気さえした。
――何をっ。
彼は城の天守を睨みつけた。
――ひと揉みに揉みつぶさずにおくものか。
ただちに攻撃は開始された。ときに午前四時。その心の動きが、微妙に全軍に伝わったのだろうか、秀吉勢の攻撃の鋭さは、これまでの比ではなかった。
全員が、血気に逸って城内に殺到しようとしたそのとき、
「待て、急ぐな」
秀吉は、怒濤の如く進みつつある先鋒に危うく歯止めをかけた。
「そのまま進むな。城は狭い。いたずらに進んでは自由を失うぞ」
辛うじて、軍略家としての理性が甦って来たのである。狭い建物の中に大人数がなだれこめば混乱は必死だ。一人が敵の先鋒にひるんで後退しようとしても、後に人数がひしめいていては進退の自由さえ奪われ、被害は大きくなるばかりである。
「雑兵(ぞうひょう)どもは動くな。鉄砲足軽退(ひ)けえっ」
「槍隊、止まれっ」
もう彼らの活躍する舞台ではないのである。腕に覚えのある者だけを選りすぐって刀を短くかまえさせて攻撃隊を編成した。

が、いったん隊伍の中に湧立った闘志は、上官の制止だけでは静まらない。制止の命令を聞いた彼らは、むしろ不服そうに足踏みする。

「何だと、止まれだと」

潮鳴りに似たどよめきが包囲軍の中に伝わりひろがっていった。そしてその響きは、城の中へも微妙に伝わって来た。

「来たか」

勝家は天守の下に残りの兵力を集めた。その数はたった二百余だったが、ひるんだ顔は一つもなかった。その顔を見廻して、勝家は言った。

「勝家の年来の武運も今日を限りと見えた。最後の戦いに卑怯の振舞して恥を千載に残すなよ」

「おおっ」

どよめきに似た答が返って来た。

「いいか、ゆけっ」

二百人は一丸となって押し出し、早くも城の構えの中になだれこんで来た攻撃勢に向って、襖、衝立の蔭から鋭く襲いかかった。必死の鋒先に、相手がひるみをみせると、さっと物蔭に退く。また雄叫びが近づくと、野獣のごとく敏捷に、かつ獰猛に襲いかかってはまた退く。一度、二度、三度——激しい戦闘は十時間以上の長きに亙って執拗に続けられ、城兵は七度までも白刃の切込みを敢行して、攻撃軍の出足を食いとめた。

が、陽が午後に及んだとき、二百の人数はすでに三十余名に減っていた。

いまや城内に敵勢はあふれ天守は全く孤立している。その天守にも、敵の先鋒は遂に到達した。

「梯子を引けえっ」

追いつめられた柴田勢は、梯子をはずして上へ登る。登ればもう逃げ路のないことはわかっている。が、彼らにはそれより他にすべきことは残されていないのである。

と、攻撃側は、じわじわと柱を攀じて、なおも追いすがって来た。先登の男が、やっと次の階にとりついた、そのとき、その男の首めがけて、さっと白刃が振りおろされた。

「わっ」

声をあげるのもつかの間、男はもんどりうって階下へころげ落ちる。が、新手の敵は、性懲りもなくまたもや柱にとりついて来る。

勝家はこのとき最上階にいた。錦の褥にどっかと胡坐をかいた傍に、亀甲菱の裲襠をまとったお市の姿があった。わずかに格子の間から空がのぞけるほか、天守の中はほの暗い。背をこごめて歩かねばならぬほど天井は低く、荒々しい木組が人々の上にのしかかって来る。その中でお市はひどく場違いな大輪の花のように見えた。

天守に登って以来、お市は勝家とほとんど口をきいていない。もう二人の中には話しあうことは残っていないのだ。

お市はただ待っていた。時を、まぎれもなく近づきつつある死の時を——。

雄叫びがいよいよ迫って来たとき、

「殿」

中村文荷斎が、低く短く言った。

いよいよ、そのときは来たようである。

「うむ」

勝家はゆったりと肯いて身を起した。

「よいな」

刃の柄に手をかけて、そう言ったとき、お市は静かに肯いて、手をあわせた。

少数の家臣の居並ぶ周囲には、所狭しと、木の箱が積みあげられている。

お市はちらりとそれを見た。彼女が夫の手によって命を終え、続いて夫が自決した直後、その木箱に詰められた火薬にいっせいに火が放けられ、二人をはじめこれに殉じた家臣たちの死骸は、天守もろとも、一瞬のうちに虚空にはじけ飛ぶはずであった。

夫の刀が抜かれたのを見て、お市は眼を閉じた。そしてその瞬間、暁の闇夜に捉えたあのものの気配が——空をかすめた時鳥か、流星の軌跡かが、ふと眼裏を過ぎてゆくのを感じていた。その一瞬に似た迅さで自分の人生の過ぎていったことに、お市は悔いを持たなかった。

（下巻　おわり）

参考文献

『大日本史料・十編、十一編』

『織田信長文書の研究』（上・下）奥野高廣（吉川弘文館）

『賤ヶ岳の戦』高柳光寿（春秋社）

『人物・日本の歴史・信長と秀吉』（読売新聞社）

『滋賀県史』

『東浅井郡史』

『清洲町史』

ほかに田中政三氏、伏木貞三氏、下坂藤次郎氏から史料の提供をうけたほか、現地の御案内を頂いている。

初出掲載誌

「歴史と旅」昭和五十年五月号～五十三年六月号

単行本

昭和五十四年五月文藝春秋刊



文春文庫

流　星——お市の方(下)

定価はカバーに
表示してあります

1982年10月25日　第1刷
1996年1月30日　第14刷

著　者　永井路子

発行者　堤　堯

発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720011-2

永井路子　炎環
永井路子　朱なる十字架
永井路子　乱紋　上・下
永井路子　流星―お市の方―　上・下
永井路子　銀の館　上・下
永井路子　一豊の妻
永井路子　美貌の女帝
永井路子　北条政子
永井路子　噂の皇子
永井路子　恋のうき世　新今昔物語
永井路子　裸足の皇女
永井路子　長崎犯科帳　霧　上・下　毛利元就の妻
永井路子　山

長尾誠夫　源氏物語人殺し絵巻
永岡慶之助　斗南藩子弟記
中上健次　岬
中上健次　日輪の翼
中上健次　讃歌
中里恒子　時雨の記
中里恒子　忘我の記
中村正軌　元首の謀叛　上・下
中村正軌　貧者の核爆弾
南木佳士　ダイヤモンドダスト
夏樹静子　死刑台のロープウェイ
夏樹静子　喪失
夏樹静子　アリバイの彼方に

夏樹静子　霧氷
夏樹静子　遠い約束
夏樹静子　閨閥
夏樹静子　風の扉
夏樹静子　暗い循環
夏樹静子　碧（あお）の墓碑銘
夏樹静子　訃報は午後二時に届く
夏樹静子　秘められた心中
夏樹静子　旅人たちの迷路
夏樹静子　孤独のフェアウェイ
夏樹静子　ひとすじの闇に
夏樹静子　死の谷から来た女
夏樹静子　影の鎖

夏樹静子　ペルソナ・ノン・グラータ
夏樹静子　ダイアモンドヘッドの虹
夏樹静子　わが郷愁のマリアンヌ上・下
南條範夫　山岡鉄舟全三冊
南條範夫　出雲の鷹上・下
南條範夫　幻の観音寺城
南條範夫　武家盛衰記
南條範夫　英雄色を好む　小説伊藤博文
南條範夫　鎮西八郎為朝上・下
難波利三　てんのじ村
難波利三　小説吉本興業
西木正明　凍（い）れる瞳

◈　◈　◈

文春文庫・永井路子のノンフィクション

歴史をさわがせた女たち 日本篇・外国篇・庶民篇

淀君らの猛烈ぶりも楽しい〈日本篇〉、楊貴妃らの雄姿を描いたスケールのでっかい〈外国篇〉、日本史の裏側で活躍した女たちの〈庶民篇〉まで、大好評のシリーズ。

歴史をさわがせた夫婦たち

古代や中世の政略結婚の悲喜劇、火の車の台所、夫婦ゲンカなど、今と変わらぬ愉快な夫婦生態。

新・歴史をさわがせた女たち

推古天皇、元正天皇、平時子など、日本史の中の猛女たちのあっと驚く生き方をユーモアたっぷりに描く。

平家物語の女性たち

平家物語の表舞台の陰で、激しく、静かに生きた建礼門院、静御前、巴御前、祇王らに光をあてる。

つわものの賦

鎌倉幕府成立の陰には、数々の知られざるドラマがあった。武士たちの姿を描く迫真の歴史ドキュメント。

相模のもののふたち

日本史上最大の革命期、鎌倉時代。武士たちを動かしたものは何だったのか。興味深い歴史紀行。

はじめは駄馬のごとく ナンバー2の人間学

歴史の表で主役を演じた人の陰にいた真の実力者たち。北条義時、徳川秀忠らの奥深い裏方人間学。

今日に生きる万葉

少女の頃から「万葉集」に親しんだ著者が愛情をこめて、数々の歌の背景となった風土や恋を語る。

歴史のヒロインたち

日本史を華やかに彩る額田王、北条政子、お市の方などの生き方を豪華ゲスト陣とユーモラスに語る対談集。

「太平記」 古典を読む

激動の時代、後醍醐帝、尊氏、正成、義貞らの決断が歴史を変えた。現代的視点で読む壮大な男達のドラマ。